
シークレットゲーム KILLER QUEEN ~エピソード7~ 【桜姫編】

桐島 成実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム K I L L E R Q U E E N ～エピソード7～ 【桜姫編】

【Nコード】

N 2 5 1 4 M

【作者名】

桐島 成実

【あらすじ】

この世界は、本来あるべきの世界とは少し違っていた。

死んだはずの桜姫優希。彼女は死ぬことなく、総一と再び合間見えたのだ。しかしそれは同時に、この血塗られたゲームの参加を意味していた。

そして『ジョーカー』の異名を持つ、殺人ゲームマスターの存在。

プレイヤーの中に紛れ込んだその正体は一体誰なのか・・・？

新たなプレイヤーも加わり、ますます混沌としていく閉ざされた世界。総一達、そして他のプレイヤー達の運命は・・・？

桜姫「私は信じてるから。総一の事」

第1話「組織の采配」（前書き）

この小説は、P S 2「シークレットゲーム」K I L L E R Q U
E E N」を元に、私が独自に作成したものです。

本作をプレイしていない方、又はプレイしたのが大分前の方は <http://www.yetigame.jp/secretgame/main.htm>
を確認して下さい。

ただし、プレイしていない方はこの小説を読むことはオススメしません。幾分ネタバレを多分に含んでいますので。

なお、この小説はストーリー上、ダーク調な面が強いのでご了承ください。

ちなみに、本作でエピソード1～4までありましたので、それにあやかっただけエピソード7と命名しました。

他にもエピソード5・6も掲載しておりますので、同時に楽しみください

第1話「組織の采配」

シークレットゲーム 〽 KILLER QUEEN 〽 「エピソード7」

第1話「組織の采配」

トントン

高級感がある部屋のドアがノックされ、部屋の中に響く。

初老の男「入りたまえ」

部屋の中の、ひときわ上等なソファーに初老に差し掛かった男性が1人座っていた。

郷田「失礼いたします」

丁寧な挨拶と共に、1人の女性がゆつたりとした物腰で部屋の中へと入り、男性の座る机の前まで歩んでいく。

初老の男「おお、郷田くんか」

彼は何枚もの書類に目を通していたが、それを机の上に置いて女性、郷田真弓の方を向いた。

郷田「稲葉様、お呼びでしょうか？」

稲葉と呼ばれた人物。表向きは大企業の会長を務めているやり手ではあったが、裏の顔は、この悪意に満ちたゲームを初めとしたカジノを運営する『組織』の一員だった。

彼の裏の社会での立場は、実務レベルでは頂点にあたる『最高幹部会』のメンバー9人の内の1人だった。

実質上『組織』を運営しているのは、この『最高幹部会』の9人と、その上に立つボスが中心となって管理・運営していた。

彼、稲葉という人物の普段の役割は、ゲームやカジノを運営する上での人為の配置と管理、カジノの遊具等の考案やチェックが主な仕事であった。

ゲームやカジノの状況などを部下から報告を受け、客のニーズに合わせた運営を考慮、実施していく、組織の中でもカリスマ的な存在であった。

稲葉「うむ、さっそく本題に入ろう。君はこの15年余り、よくぞ組織の為に忠実に働いてくれた」

威厳に満ちた声で、ねぎらいの言葉を掛ける。

郷田「もったいないお言葉です」

郷田は自身の実績が称えられた事に、反射的に深々と頭を下げる。

稲葉「その功績を称え、君に名誉勲章を授与しようという声が拳が
つてね」

郷田「まあ」

突然の申し入れに、郷田は感嘆の声を漏らす。

稲葉「前日の会議で、それが確定となった。おめでとう」

郷田「私のような者を、ありがとうございます」

礼儀を崩さぬしぐさとは裏腹に、郷田は内心小躍りをしそうなくらい喜んでいた。

名誉勲章を与えられるということは、組織になくてはならない人物に選ばれたということ。それは組織に属する者としては、将来の安泰を意味する。

しかも、この名誉勲章が与えられるのは非常に稀で、郷田の様なゲームを運営するゲームマスターからして見れば、憧れの対象でもあった。

稲葉「既に君の名誉勲章は完成してここにある。受け取ってくれたまえ」

そして彼は小型のカードの様な物を差し出す。名誉勲章といってもメダルではない。ゲームマスターをはじめ、ゲームを運営する者は

名刺がわりとして、このカードを携帯する習慣がある。

今、郷田に渡されようとしているのは、特別製の専用カードであった。

郷田「謹んでお受けいたします」

郷田は断りを入れ、そのカードを手取る。

その時だった。

ガタンッ

急に何かが動く様な音が部屋中に響いた。

おやつ？と思ったのは、郷田の方だけだった。

そして、急に自身の体重が軽くなった様な気がした。

これは

郷田「！？」

いつの間にか、郷田の居る側の区画の床が一面、スッポリと抜け落ちていた。

それに気付いた時、既に自身の身体は真下へと落下していた。

郷田「きゃあ！？う、くうっ」

郷田は必死に手を動かし、かろうじて抜けてない床に両手を引っ掛けて踏ん張った。

稲葉「ほお、これを回避するか。さすがはベテランのゲームマスター、といったところかな」

彼はソファーから立ち上がり、踏ん張り続けている郷田の前まで歩む。

郷田「こ、これは、一体何事ですか!？」

郷田は必死の形相で、疑問をぶつける。

稲葉「聡明な君ならば分かるはずだ」

彼はそう言うが、郷田には今置かれている状況に陥ってしまった理由が全くといっていいほど思いつかない。

稲葉「・・・どうやら、分かっていないようだね」

そして彼はごく自然な動作で、懷から銃を取り出す。

稲葉「ならば教えておこう。私が組織の人員を配置、採用などを行う事は当然、知っているね」

彼は淡々とした表情で続ける。

稲葉「時代は常に流れている。そろそろ若手と入れ替える必要があるということだ」

それを聞いた郷田は驚愕する。

それだけの理由で切り捨てられるというの！？そんな理不尽な理由で！？

驚きに顔を染める郷田をよそに、彼は銃を、ぶらさがり続けている郷田の頭に狙いを定める。

稲葉「君と同じ様なゲームマスターが数多く存在する事は、君も承知のはずだ」

ゲームマスターは、郷田を含め30人ほど居る。

ゲームマスター同士の面識というのは、ゲーム中を除き意図的に顔を合わせない様に徹底されている。

そうしないと、万が一の時に互いに情を持ち、ゲームに支障を、果ては『組織』に逆らう輩が出ないとも限らないからだ。

そしてその中から稀に、こうして名誉勲章を頂く事が過去に何度かあった。

稲葉「そのゲームマスターが名誉勲章を貰った後どうなったか、知っているかね？」

郷田「え！？」

稲葉「彼らは」

稲葉の持つ銃の引き金が引かれ、銃撃が放たれる。

それは必死でこらえている郷田の頭を貫通し、驚愕の表情のまま、踏ん張っていた手を離す。

そして彼女は、2度と暗闇から脱することは叶わなかった。

稲葉「君と同じ運命を辿った、ということだ」

至極落ち着いた声で、そう告げたのだった。

稲葉は事の顛末を見届けた後、郷田が落ちた暗闇の中に、渡そうとしていたカードを放り込む。

稲葉「殉職した者に与えられる。それがこの名誉勲章の実態、というわけだ」

稲葉は壁に歩み寄り、添えつけられている制御盤を操作する。

すると、開ききっていたフタが閉まりはじめ、元の床へと戻っていた。

トントン

それに合わせたかのように、再びドアがノックされる。

稲葉「入りましたえ」

再びソファーに腰を下ろした稲葉は、まるで何事もなかったかのよう
に返事をかえす。

ディーラー「失礼いたします」

稲葉「ああ、君か。察するに、明後日行われるゲームの詳細を報告に来た、というところかね？」

ディーラー「ご察しのとおりでございます」

ディーラーは稲葉の所まで歩み寄り、深々と頭を下げつつ、報告をまとめた書類を手渡す。

稲葉「ふうむ」

一通り目を通した稲葉は、ふとこんなことを口にした。

稲葉「この、今回のゲームのサブマスターはたしか、以前君が採用を推薦した人材のはずだね」

ディーラー「おっしゃるとおりです」

稲葉「過去に読んだ報告書によると、今までにない異彩の活躍をする人物とか」

ディーラー「ええ、ゲームを運営するメンバーからは『ジョーカー』の異名を持つほどで」

稲葉「『ジョーカー』？」

ディーラー「トランプの柄からもじった呼び名ですよ。何せ、異端視扱いされてますからね」

稲葉「なるほどなあ。たしかにその名は、こやつにはふさわしい」

稲葉は至極感心したように、2、3度うなづく。

彼らが話す『ジョーカー』と呼ばれているゲームマスターは、今までにはない趣を行う人物として有名であった。

これまでのサブマスターの役割といえば、ゲームの賭けで人気の高い人物に密着し、撮影や録音を担当するのが主な仕事だ。

だがこのサブマスターは、参加者であるプレイヤー達を自らの手で追い詰め、苦しめ、そして残忍な手口で殺していき、そのシーンを撮影・録音していくという、今までにない特殊なゲームマスターなのである。

その性質上、他のプレイヤーまでもを追い詰める結果となり、更なる醜い争いが期待できる、というわけである。

もちろん、それではゲームとしてはアンバランスになる為に、通常ゲームマスターが持ち得る筈のPDAの様々なソフトは持たされず、ディーラー達との通信も一切不可能。他のプレイヤーと同等の条件からのスタートとなる。

他にも、他のプレイヤーがゲーム開始から6時間経過した段階で戦闘禁止が解除されるのに対し、更に18時間上乗せされ、正味ゲーム開始から24時間戦闘禁止という条件が課せられる。

ディーラー「厳しい条件ですが、過去4度のゲームに参加して怪我こそ負ったものの、累計18人の命を奪っています」

ただその人物の、あまりに際限がないやり口に、参加したプレイヤーはもちろんのこと。同業者である彼らでさえ恐れ、おののくほどだった。

その為、ゲーム関係者からは腫れ物にさわる感じの目で見る者も居る。それでも『組織』に所属し続けていられるのは、ひとえに観客達がそれらのシーンを望んでいるという表れであった。

稲葉「『ジョーカー』の存在意義。カードゲームで言えば、最強のカードとも、弊害となる場合もあるわけか。・・・なるほど、これは面白くなりそうだ」

稲葉、そしてディーラーの口元がほころぶ。

ディーラー「今回のゲームの運営、お任せくださいませ」

稲葉「ああ、よろしく頼む」

ディーラー「それでは失礼いたしました」

そしてディーラーは足早に、部屋を立ち去ったのであった。

・
・
・
・
・

第1話「組織の采配」(後書き)

ゲームの準備は着々と整い、そして動き出します。さて、今回のゲームの参加者は、如何なる運命を辿っていくことになるのでしょうか？

次回は第2話「失われた日常」2日が経ち、ゲーム当日を迎えたその時、ゲームが始まる

それでは楽しんでいって下さい

第2話「失われた日常」（前書き）

エピソード『7』に関しての注意点

- ・登場人物が1部変更されており、それぞれの置かれている状況も変更されている。
- ・各プレイヤーが所持しているPDAがシャッフルされている。
- ・ルールや首輪の解除条件、PDA用のツールボックスの内容はそのまま。
- ・武器の配置が少し変わっている。
- ・今回の主人公は基本的には総一ではあるが、別の人物に視点が変更される場合が何度かある。

以上の点をご理解の上、今作品をお楽しみください。

第2話「失われた日常」

太陽が夕日となり、オレンジ色に染まる情景の遊歩道を、並んで歩く2人の姿があった。

桜姫優希「ねえ、総一？」

総一「ん〜？どうした、優希？」

総一の隣に居る彼女の名前は桜姫さくらひめ 優希ゆうき。総一と幼い頃から仲良く過ごしてきた間柄であった。

2人は同じ学校に通っている為、朝と夕方はいつも登下校を共にしていた。

総一「明日は何の日か、覚えてる？」

優希は微笑みつつ、明るい声でそう問いかける。

総一「明日？えーっとなあ、何かあったっけ？」

彼女の問いに、総一は唸りつつ考えこむ。

桜姫優希「・・・もしかして、忘れちゃった？」

心なしか、彼女の声が沈む。

すると、総一はいたずらっぽく微笑んだ。

総一「なーんてな！」

そうやって総一はおどけてみせる。すると彼女はキョトンとした表情に変わる。

総一「ちゃんと覚えてるぜ。3月18日、お前の誕生日だろ？」

総一がきちんと覚えていたことを知り、心底ホツとする。

桜姫優希「んも〜！脅かさないでよね！？本気で忘れられたって思ったじゃない！」

安心したのか、彼女は細長い眉を少し釣り上げつつ、あからさまに大きな声で非難する。

総一「悪い悪い。けど、俺がお前の誕生日忘れるわけないだろ」

桜姫優希「え・・・？」

総一「お前の誕生日より1ヶ月前、ちゃんと俺の誕生日を祝ってくれたしな」

そう言いながら、なんとなく感傷に浸る。

総一「あの時に食ったケーキ、おいしかったぜ」

桜姫優希「そつか。そうだよな。あのケーキ、2人で仲良く食べたもんね」

その時の思い出も、とても楽しいものだった。ケーキ自体もおしい

かったが、やっぱり愛すべき人と側にいたから、一際おいしかったのだと、優希は心からそう思っていた。

総一「何かリクエストとかってある？」

毎年お互いの誕生日にこうしてプレゼントするのが、この2人の習慣だった。こうやってリクエストを尋ねるのも恒例になっていた。

桜姫優希「ええっと・・・」

優希はなぜか言いにくそうに口ごもる。

総一「どうした？」

不思議に思っていると、彼女は思い切って言うてみた。

桜姫優希「その、あのね。実はほしい服があるんだけど・・・」

総一「服？」

桜姫優希「うん。ただその服、結構値段が高くって・・・」

それを買ってもらうのは図々しいと彼女は思っているようだ。たとえ馴染みであっても、相手の気持ちを常に考えるのが彼女の魅力の一つだろう。

総一「なあに、結構貯金持ってるし、別に構わないぞ？」

そんな優希に総一はあっさりとそう答える。

桜姫優希「え、でも・・・？」

総一「いいっていいって。その代わり、来年の俺の誕生日、楽しみにしてるからな」

総一は満面の笑みを浮かべる。

桜姫優希「うん・・・」

彼女は頬を赤らめつつ、そっと総一の腕に自身の腕を絡めた。

2人はそうして歩いていると、遊歩道に植えられている桜の木から、花びらが落ちてきた。

それはちょうど2人の前にひらひらと舞い、夕焼けの光にあたったそれは美しく見えた。

総一、そして彼女も、当たり前となったこの日常が、永遠に続くと思っていて疑わなかった。

だが、それは突如失われることとなる。

既に目先に迫っている過酷な運命を、この2人は知るよしもなかった・・・。

・
・
・
・
・

総一「これは、一体・・・？」

総一は自身の持つPDAの文字列を追っていたが、まるで意味が分からなかった。

総一はいつの間にか意識を失っていたらしく、気がつくときコンクリートの一室に放り込まれていた。

しばらく周りを調べたが、自身の首に巻かれている首輪とPDAを発見したものの、状況が飲み込めずに、ただただ呆気にとられていた。

結局PDAがただのゲーム機のように思えてきた為、読むのをやめ、

【戻る】の項目を押して、最初の画面へと戻す。

すると最初に見た時と同じ、大きな数字が書かれた画面へと切り替わる。

そこにはランプの絵柄を模した、クラブの『2』が描かれていた。

総一「あっつ！・・・」

今だ痛む頭を押さえつつ、痛みを紛らわそうと首を振る。

ガチャリ！

すると、部屋のドアが開く音と共に、1人の人物が姿を現した。

総一「！」

総一は思わず音のした方へと振り返る。

その人物を見て、総一は驚き目を見開いたが、それは向こうも同じだった。

相手の人物は、総一の姿を見た瞬間、驚きの声を挙げる。

桜姫優希「そ、総一！？」

総一「ゆ、優希・・・？」

2人は瞬きもせず、啞然としていたが、先に彼女の方から総一に勢い良く駆け寄ってきた。

桜姫優希「総一っっ！！」

総一「どうして・・・？」

総一は頭が真っ白になったいたが、彼女はずっと1人で居た為、よほど心細かったのか、顔見知りの総一を見て、あからさまに安堵の表情を見せる。

桜姫優希「こ、怖かった・・・。いきなり知らない所に連れてこられてっ・・・」

『連れてこられて』

それはつまり、総一も彼女も誰かに誘拐されてきたと言うことだ。

総一は戸惑いを見せたが、目先に居る彼女が震えているのに気付き、思わずギュッと抱きしめた。

そうすることで、震えが止まるかと思ったからだ。

総一「どうしたんだ？いつものお前らしくもない」

総一は優しく語り掛ける。

優希「アンタが鈍いんでしょっ・・・！」

優希は強がってみせるものの、その目には涙が浮かぶ。

率直に自分の気持ちを言えるのは、彼女にとって総一しか居なかった為だ。

きつと怖かったのだろう。今しがた目覚めてよくわかっていない総一も、彼女のその様子を見て状況を理解した。

総一はそうして、彼女の震えが止まるまで、ずっと支えていたのであった。

・
・
・
・
・

総一「落ち着いたか？」

桜姫「う、うん」

なんとか本調子を取り戻した優希は、いつもの微笑みを見せるようになった。

いつもは彼女の方が俺をリードしてたのになぁ・・・。

基本的に呑気な総一を、正義感が強く、意地っ張りな彼女がグイグイと引っ張っていく。それが今までの2人の関係だった。

総一「それにしても、一体何がどうなってるんだ??」

総一の疑問に、優希が答える。

桜姫「実は私、目覚めてから少し辺りを彷徨ってたんだけど、この建物相当入り組んでるみたいなの」

優希の話では、総一の元に来るまでの間にいくつかの部屋に出入りしたらしい。

そこには特に何もなく、もぬけの殻だったらしいが、部屋や歩いてきた通路でも、どこにも人の姿はなかったらしい。

桜姫「それに、この建物どこがおかしいのよ」

総一「おかしい?」

桜姫「それがどこにも窓が無くって、まるで封鎖された空間みたいで感じて・・・」

そう言う彼女は、不安そうな表情で総一を見上げる。

総一「・・・とりあえず、ここでじっとしていてもしょうがない。出口を探しにいくのか？」

桜姫「そうね、そうしょっか」

考えるよりも、先に行動した方が良く、2人は判断した。遅かれ早かれここにはいずれ誘拐犯がやってくる。そう思っていたからだ。

2人は慎重にドアを開け、その部屋を後にしたのだった。

・
・
・
・
・

暫く闇雲に通路を歩いた2人ではあったが、結局何も収穫はなかった。

総一「参ったなあ、こりゃあ相当に入り組んでいるなあ・・・」

2人はかれこれ10分程度歩き回っているものの、人と会うことはおろか、窓や外への出入り口らしきものはまるで見当たらなかった。

桜姫「あ、そうだ！」

総一と共に考え込んでいた優希であつたが、ふと何かを思い出したかのように両手を叩いた。

桜姫「たしか、この建物の地図をコレで見たわ」

そう言つて取り出したのは総一が持っている物と同じPDAだった。

総一「そついや、やけに広い地図が載つてたな」

総一も一度目を通したことがあるが、その時はこの建物の地図を示しているとは思えなかった。

だが、これだけ右に左に歩いた後なので、あの地図もまんざら嘘でもないのかもしれない、とそう思い始めていたのだ。

桜姫「うわあ、改めて見てみると本当に広いわねえ・・・」

パツと見ただけでも迷路のような通路が螺旋状に入り組んでおり、限りなく広いことが伺えた。

総一「ん？1階つて表示がある。つてことは」

画面を操作すると、2階、3階と順に切り替わる。

総一「6階・・・。本当にあるのかな？」

これだけ広い土地に建物。どう考えても数十億のお金はかかっている。

桜姫「うーん、それはわからないけど、今まで通った道のりで、現在地ってわからないものかな？」

総一「ええっ、分かるかなあ・・・」

桜姫「たしか、ここに来る前は右に曲がって、その前は2つのドアを通り過ぎて左へ曲がって・・・」

優希は記憶を頼りにいくつか検討していく。

それは思った以上に困難な作業であった。そして30分ほどの時間をかけた後、なんとか2つまで絞り込めることが出来た。

だが、残りの2つで意見は分かれた。

総一「多分、こっちだと思うよ」

総一は地図の一角を指さす。

桜姫「ううん、ここのドアとドアの間隔を考えると、きっと違うと思う。絶対こっちよ！」

総一「困ったなあ・・・」

困惑する総一に対し、優希は総一の手を取った。

桜姫「それじゃあ、この先をもっと進めば、はつきりするんじゃない？」

優希はそう言って総一の手をギュッと握り締める。

総一「・・・そうだな」

2人はそう言って再び前へと歩き出した。

総一の意見が正しいとすれば、この先は十字路に遭遇する。

優希が正しければエントランスと思わしき場所に出ることになる。

しばらく2人で並んで歩いていると、通路の先から広い空間が覗いているのを目撃する。

桜姫「ホラ、やっぱり私の方が正しかったじゃない」

そう言って総一の腕をグイと引っ張る。

総一「おっかしいなあ。絶対こっちだと思ったのに・・・」

嘆く総一と共に、その通路の先の方へと足を運ぶ。

そして、目線だけでエントランスが見通せる距離まで来た時、そこに人影があることに気がついた。

桜姫「まさか、誘拐犯？」

2人は通路の端に寄り、そっと中の様子を伺う。

総一「いや、そんな感じじゃないな」

総一は頭の中で、誘拐犯は屈強な男だという創造を膨らませていた。

それだけに、今エントランスに居る人物は、その想像を覆すものだ。

桜姫「2人。ううん、3人居るみたいね」

3人の人影は1人も違いなく、とても誘拐犯とは程遠く見えた。

総一「んー、でもそう決め付けるのもよくないかな。話しかけるにしても、先にどこか部屋の中とか探して、武器が何か見つけた方がいいかな？」

総一は優希に顔を向けて尋ねる。

桜姫「でも、もし誘拐犯じゃなかったら、余計に警戒されちゃうんじゃない？」

優希の言い分ももつともだ。

総一「じゃあ、もし何かあったら、すぐこっちの方に向けて逃げるってことで」

総一はそう言っただけで握り合っていた手を、再びギュッと握り締める。

桜姫「そうしょっか」

こうして2人は、エントランスに居る人達に話しかけることにした。

・
・
・
・
・
・

総一「あの！すみませーん！」

総一は、遠くからその人影に話しかけてみる。結構な距離がある為、必然的に大声になる。

総一「話がしたいので、そっちに行ってもかまいませんかー！？」

その声に、3人の人影は互いに顔を見合わせていたが、やがて1人の少女が代表して返答する。

??「いいよっ！じゃあゆっくりとこっちに来て！」

その少女の返答に、総一と優希は一度顔を見合わせてうなずくと、手を繋いだままゆっくりとエントランスへと入っていく。

そしてお互いの表情が見えるぐらいに近づいた後、再び尋ねる。

総一「もしかして、君達も誘拐」

総一が尋ねる前に、側にいた優希が驚きの声を挙げる。

桜姫「え、あなたって・・・」

優希の様子が変わるのを不思議に思い、目を向けると、優希は目の前に居る少女の方に驚きの視線を向けていた。

??「え!??・・・もしかして、優希さん!?」

その人物は名乗ってもいないのに、優希の名前を当てる。

総一「・・・知り合い?」

総一の疑問も、目先の少女の背中に隠れていた別の少女が、前に出てきて同様に驚きの声を挙げる。

??「優希さん!どうして!?」

よくよく見てみると、今総一達の前に出てきた2人は顔がそっくりで、姉妹なのかとすぐに分かるほど似ていた。

桜姫「かりんちゃん!?それに、かれんちゃんも!?」

どうやら3人共顔見知りだったらしく、優希は繋いでいた手を離して、その2人の少女の元へと近づいていく。

1人残された総一は、何がなんだか分からず、ただただ呆然としていた。

総一「あ、あのさ・・・もしかして知り合い?」

親しげに話している3人の元へおずおずと近づいていき、そっと尋ねる。

桜姫「あ、ゴメン総一。えっと、紹介しておくね」

優希はそう言って、2人の少女を総一と対面させる。

かりん「え、えっと、この人は？」

姉の方と思わしき少女が、優希にそう尋ねる。

桜姫「ええと、私の大切な人、かな？」

優希は少し照れつつも、そうやって総一の事を紹介した。

かれん「えっ！もしかして、恋人！？」

妹の方が、興味津々といった感じでそう切り出してくる。

かりん「こらっ、かれん。そういうことはハッキリと口に出さないの！」

姉の方が、かれんと呼ばれた少女をたしなめる。

かれん「あ、ゴ、ゴメン。つい・・・」

桜姫「いいのよ、事実だし」

やっぱり総一1人が置いてけぼりを食らっている気がする。

桜姫「あ、ええっとね、この子がかりんちゃん、で、こっちが妹のかれんちゃん」

かりん「あ、えっと、はじめまして、北条かりんです」

かりんはたどたどしい様子で頭を下げる。

かれん「はじめまして！妹のかれんです」

一方のかれんはかりんに合わせて、それでも元気よく挨拶をした。

総一「あ、ええと、御剣総一です、よろしく」

2人につられるように、総一も礼を返す。

実は優希は、学校が終わった後や休日に、様々なボランティア活動にいそしんでいる毎日を送っていた。

その日以外は総一と優希は学校帰りを共にしていたが、活動がある日は病院などに通っていたらしい。

そんな過程で、病院に入院して学校に行けないかれんに対し、色々と勉強を教えていたようだ。

かりんともそこで顔見知りとなり、今に至る。と優希の話であった。

そんなことを聞いた後、何を思ったか優希は総一の側まで駆け寄り、腕を組みつつ優しく微笑む。

桜姫「総一って、結構優しい所があるから、すぐに仲良しになれると思うなあ」

総一「お、おいおい、優希。腕を引っ張るなつての！」

仲睦まじい2人の様子に、自然と2人の表情もほころぶ。

かれん「いいなあ、私も恋人がほしいなあ・・・」

かりん「ちょ、ちよつと！かれん！」

などと和気藹々会話していると、少し離れた所からずっと様子を見ていた少年が、やれやれといった感じて会話に割って入る。

??「あのさあ、おたく達今の状況がわかってんの？」

その少年はあからさまに呆れた様子でそう尋ねてくる。

すると、かりんはすつと前に出て、とたんに表情を険しくする。

かりん「わかってるわよ！知り合いに会えて安心してただけよっ！」

優希とここで出会った時とはまるで違ふかりんの態度に、てつきり3人揃って仲が良かったのだと勘違いしていた総一は、トゲトゲしい雰囲気ガラツと豹変した事を肌で感じていた。

??「『安心した』ねえ、本当にそう言えるのかなあ？」

かりん「どういう意味よ、長沢！」

目に見えて険悪になっていくこの2人の相性は、どうやら最悪のようだ。

総一は驚いていたが、同時に長沢と呼ばれた少年が言うことにも一

理あることに気がついた。

今ここに居る人物は俺を含めて5人居る。それだけの人物が誘拐されてきたのだ。

しかも、互いに顔見知りだったりするなど、意図的にそうした感がある。

なぜ、顔見知りである必要があるのか。なぜ5人も人物の誘拐をそこに言い知れぬ不安を感じずにはいらなかった。

それを裏付けるかのように、長沢はふとエントランスの一角を指し示す。

長沢「ホラ、あれを見てみなよ」

桜姫「あれは・・・」

導かれるように総一と優希はその方面に顔を向ける。

長沢「多分、元々はあそこが出入り口だったんだろうさ」

視線の先には、ガラス戸とシャッターが並んで降りていたものの、その一部に穴が開けられていた。

床にツルハシのような物が落ちていることを合わせると、それで開けられた穴だということは容易に想像がついた。

問題なのは、その向こう側に覗かせる一面コンクリートの壁。

長沢「分かった？ 今、俺達が置かれている状況」

それは、この入り組んだ廃墟とも言える空間に閉じ込められたことを示すものであった・・・。

・
・
・
・
・

第2話「失われた日常」（後書き）

閉じ込められたことを知った総一達。そしてゲームは既に開始されていたのです。

次回は第3話「蠢く光と闇」総一をはじめ、何人かの視点で状況が語られていきます。乞うご期待

第3話「蠢く光と闇」

第3話「蠢く光と闇」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」	P D A	状態	解除
条件			
御剣 総一	(2)	健康	J O
KER破壊			
桜姫 優希	(?)	健康	?
?			
北条 かりん	(?)	健康	
??			
北条 かれん	(?)	健康	?
?			
長沢 勇治	(?)	健康	?
?			

総一達5人が居るエントランス。その出入り口と思われる部分が一面、セメントで塗り固められているという現実には、誰しもが言葉を失っていた。

総一「まさか、こんな・・・」

セメントで完全に塞がれている出入り口を前に、そう呟くのがやつとだった。

長沢「どうあっても、俺達をここから出すつもりはない、ってことだろうね」

長沢のその言葉で、さっきまで明るい雰囲気が、とたんに沈んでいく。

自身のおかれている状況を改めて認識した総一は、思わず頭を垂れる。すると、総一の目に床に放り出されているツルハシが見えた。

総一「・・・このツルハシを使って、セメントを削っていけば、出られるかもしれない」

総一はそう提案するのだが、それを長沢は鼻で笑う。

長沢「それは無謀だと思うよ」

かりん「どうしてよ!？」

かりんは賛同しようとしたのだが、長沢の反対に思わずムキになる。

長沢「もしセメントを削ってここから出られるなら、わざわざ建物の内部、それもこのセメントの壁の前にツルハシなんか置くと思う？もしそうなら、犯人はよっぽどお間抜けってことになるけどね」

かりん「それは、そうだけど・・・」

長沢「それにさ、そもそも俺達を閉じ込めておくつもりなら、わざわざセメントで出入り口を塞がなくても、縄とかで拘束しておれば済む話じゃないか」

たしかに、その方がずっと手間が省ける。こんな風に自由に建物内を歩き回っていること自体、誘拐の常套手段から外れている。

長沢「首輪にPDA、そしてこの建物。どう見ても金銭目的じゃないよね」

桜姫「金銭目的でもなくて、私達を縛り付けるでもない。と言う事は・・・」

首をかしげる優希に対し、長沢は、やれやれ分かんないかなあ、いった表情で、その疑問に答える。

長沢「これはゲームさ。人を使ったサバイバルゲームなんだよ！」

長沢は自慢げにそう言うのだが、総一にはイマイチ納得がいかなかった。

総一「・・・これが、何かのイベントとかアトラクションとか？」

考えた末に出た答えがそれだった。だが長沢はニヤニヤ笑いを浮かべるだけで、それに答えようとしなない。

桜姫「・・・とりあえず、ここから出る方法を考えましょ」

沈んだ空気を打ち払うかのように、努めて明るいう口調で桜姫はそう言った。

桜姫「ひとまず、こことは別の出口を探すべきだと思うのだけど、どうかな？」

桜姫はそう提案する。それに反応したのはかりんだった。

かりん「けど、そこも閉鎖されている可能性もあるわけだよね？」

長沢「そりゃそうだろうね。ここだけ閉鎖しても意味がないよ」

総一「とすると、やっぱり闇雲にあたりを歩き回るより、このセメントを破壊していった方が確実かな？」

総一はかりん達の方を向いて尋ねた。

かりん「私は、やってみる価値はあると思う」

長沢「・・・はあ。もう好きにしてよ、あんちゃん」

呆れ顔でそっぽを向いてしまった長沢以外は、どうやら賛成のようだ。

総一「じゃあ、さっそく」

総一はそう言って、床に放り捨てられているツルハシを手を持ち、セメントの少し窪んだ部分めがけて、ゆっくりと振り上げる。

狙いを定めるように一呼吸おいて、思い切り振り下ろす。

ガツツ！！パラパラパラ・・・

セメントの砕けた音と共に、破片が下に落ちていく。

総一「こりゃ、いけるかも。ツルハシは1本だけだし、1人でやった方が効率いいかも」

桜姫「あ、じゃあ疲れたら交代するから。遠慮なくいつてね」

後ろに居た優希は、総一の作業の邪魔にならない様にかりん達の方に歩む。

そうして、総一の作業をしばらく見ていた4人だったが、ふとかりんが誰にとも無く尋ねてきた。

かりん「私達はどうすればいいのかな？」

その問いにいち早く答えたのは、やはり長沢だった。

長沢「とりあえず、このPDAに書かれたルールの確認をしたいんだけどなあ？」

かりん「ええっ！？こんなデタラメな内容を確認して何が・・・」

大げさに反応するかりんに対し、長沢はあざ笑うように言い放つ。

長沢「あのねえ。どこの誰が、意味もなく精密機械なんか作って一人ひとりに配るっての？」

すると、ずっとかりんの後ろの方に居たかれんも、そつと口添えをする。

かれん「うん、その子の言うとおриだと思うよ。少なくとも地図は本当だったし・・・」

かれんは賛同したのだが、その言い方が気に食わなかったらしく、長沢はピクリと眉を吊り上げる。

長沢「誰が『その子の言うとおり』だ！俺を子供扱いするなっ!？」

かれん「ひつ、ご、ごめんなさい・・・」

長沢の剣幕に、思わずかりんの背中の顔を隠してしまう。

かりん「・・・アンタ、かれんを泣かせたりしたら、承知しないからね・・・!」

これまでの感情的な言い方ではなく、ドスの利いた低く鋭い口調だった。

桜姫「ま、まあまあ。じゃあルールの確認をしようか」

桜姫はなんとか2人をなだめて、PDAに書かれているルールの確認を行ったのであった。

・

・
・
・
・
・

かりん「本当にデタラメな内容ね・・・」

一通りルールの確認を行った後、最初に出てきた台詞がそれであった。

幸い、4人と総一から借りてきたPDAを合わせた結果、ルールのすべてを把握することが出来た。

優希はそれを忘れないように、一語一句を自らのノートに書き込んでいった。

桜姫「ペナルティで人が死ぬ、3名以上の殺害・・・。たとえアトラクションだとしても、使って良い言葉じゃないわ」

かりん達が不安な表情を見せる中、桜姫は少し怒っていた。

長沢「どうか？昨今のネットの世界なんかでは、こんな言葉いくらでも使ってるよ・・・それより、そのノートちよつと貸してくれないかな？」

そう言つて長沢は手を出す。桜姫は不満そうな表情をしながらも、ノートを開いた状態でシャーペンと共に手渡す。

長沢「サンキュー。さっそく書き写して、と」

長沢は桜姫が書いた文面を見つつ、最後尾のページにそれらを書き

込んでいく。

書き込んでいく最中、長沢は恐ろしい事を口にしていた。

長沢「賞金20億かぁ。せつかくのチャンスだしなぁ」

きつと本人は心の中で思っているつもりなのだろう。その口元が醜く歪んでいた。

反射的にかりんが反論しようとしたのだが、それは今もせつせと穴掘りをしている総一の声で遮られた。

総一「うわっ、とっ」と

先ほどからザクザクという掘り進める一定の音が、とたんに途切れた。

桜姫「!どうしたの、総一!？」

その様にいち早く気付いた優希は、足早に総一の元へと駆け寄る。

異変に気付いたかりん達もそれに続く。

総一「ふえー、あぶないあぶない」

随分と掘られた穴は、人一人が完全に隠れるぐらいの深さになっていた。

その穴から出てきた総一の手には、ツルハシの柄が握られていた。

総一「ああ、優希。実はツルハシが壊れちゃって・・・」

木材で出来たツルハシの柄が途中で無残に折れ、本来先端にあるはずの金属部分が完全に取れてしまっていた。

桜姫「あ、ホントだ・・・」

2つに分割されてしまったツルハシを前にして、そう呟く。

かりん「うーん、やっぱり無謀だったのかな？」

総一「かもしれないね」

総一はやれやれといわんばかりに、もはや使い物にならなくなったツルハシを、そつと床に置き捨てる。

総一「このコンクリートの壁、結構な厚みがあるみたいだ」

まるで地面を永遠と掘り進めているような、そんな錯覚に陥っていた。

もちろんそんなことはないだろうが、これだけ厚みがあれば、どうしてもこの建物から出さないという明確な意思が見え隠れして、不安を隠せない総一だった。

かれん「・・・？あれ？」

そんなやりとりの最中、最後尾に居たかれんが、ある事に気がつく。

かりん「ん？どしたの？かれん」

キヨロキヨロとあたりを見渡しているかれんに気付き、そう尋ねた。

かれん「えつと、その、長沢くんが・・・」

その答えに、かりんはハッと気付く。

かりん「あ・・・」

辺りを見渡すが、いつの間にか長沢の姿はどこにもなかった。

恐らくみんな揃って総一の元へ駆け寄った隙にこの場を後にしたのだろう。

総一「本当だ。長沢のヤツ、一体どこへ・・・？」

桜姫「とりあえず、あたりを探しましょう」

桜姫は迷わずそう提案した。

かりん「えっ！？でもアイツ、本気でこのふざけたゲームに乗る気にいるんだよ！そんな奴・・・」

かりんの言いたいことは桜姫も十分承知していた。

桜姫「うん。でもね、少なくとも誘拐犯が居ることは確実だから、放っておけない」

そう言つて首を横に振る。たとえ気に入らない人でも、背を向けることはしない。それは彼女の生き様であつた。

総一「それに、他にも誘拐されてきた人達が居るかもしれないから、どっちにしてもあたりを探してみるのはい良いと思うよ」

総一の口添えに、しぶしぶながらもかりんは頷いた。

かりん「・・・わかった。じゃあどこに行く？」

桜姫「そうね、とりあえず・・・」

総一達4人は、今後の行動について、色々話し合つた。

だが総一達はいまだに、このゲームの真の恐ろしさには気付いていなかった。

・
・
・
・
・

長沢「おっ、いいもん見つけ」

総一と別れ単独行動をとっていた長沢は、いくつかの部屋を物色した後、それを見つけていた。

ツルハシがある以上、他にもあるだろう。その考えは当たっていた。

長沢「うわっ、結構重たいなあ、コレ」

それは両手でやっと持ち上げることが出来るほどの大型の斧であった。

ずっしりとした重厚そうな黒い金属が、その重さを物語っている。

長沢「コレがこんな所に放置されているってことは・・・」

こんなものは室内の作業には到底向いていないし、建築や改築に使われるような道具でもない。

もちろん、気まぐれで放置しているはずもない。

長沢「やっぱり、このゲームは本物なんだ！くくっ、よおしっ！やってやるっじゃないか！」

そう言つて慣れない斧の感触を確かめる為、何度も振り下ろす。

先端の鋭い刃が光を反射して、不気味さを露にしている。

それに感化されてしまったのだろうか？いつしか長沢は興奮状態に陥っていた。

長沢「見てろよ！これで俺を馬鹿にしたヤツラを見返してやる！」

そう決意し、部屋を後にした。

次に探すのは対象となる獲物だ。今の所確実に出会えそうなのは・・・

・。

長沢「やっぱり御剣のあんちゃん達かな？」

そう言う頃には、既に長沢の進む足は、総一達が居るであろう、エントランスへと向かっていた。

今の彼は相手を倒すことしか頭になかった。なぜなら……。

長沢「主人公がすべての敵を倒す。定番だからなあ」

両手に持っている斧を一度床に置き、地図を確認する為に再びPDAを取り出す。

そのPDAの画面には、スペードの柄が9つ描かれていた。つまり『9』を示している。

さつき確認したルールの一覧を照らし合わせると、次のことが言える。

長沢「皆殺し、か。へへっ、上等じゃないか」

本来、与えられた解除条件では最もはずれといえるこの条件。しかも、誰かが首輪を解除して、そのまま戦闘禁止エリアに逃げ込んでしまった場合、それは長沢自身の死を意味してしまう。

つまり、早期決着が何よりも大事なのだ。

そのせいで、タダでさえ攻撃的な性格の長沢に、拍車がかかってしまったのである。

長沢「・・・うん？」

地図を確認していた長沢の目線が、ふと前方に向けられる。

前方にある通路は一直線に長い通路があった。そのずっと先に、かすかに見える人影があった。

長沢「他のプレイヤーか？それとも誘拐犯？」

遠くからではそれは判別がつかない。

長沢「けど、まあ、どっちでもいいか」

PDAを素早くしまった長沢は、床に置いていた斧を持ち替えた。

目線の先にある小さな人影は、どうやら曲がり角を曲がっていったようで、もう既にここからでは姿は見えない。

だが、どうやら長沢の存在に気付いている様子はなく、ゆっくりとした動作で姿を消したのだ。

長沢「誰だか知らないけど、逃がしはしないさ」

その言葉通り、迷い無く斧を強く握り締めたのだった。

・
・
・
・
・
・

御剣総一と桜姫優希が再会した時と同じくして、別の場所でもゲームは密かに進行していた。

ここはとある部屋の一室。

そのポツンと置かれているベッドに、1人の女性が横たわっていた。

麗佳「すうー、すうー」

彼女、矢幡麗佳は総一達同様、誘拐犯に連れ去られて、部屋に放り込まれていた。

この段階では、彼女は誘拐されていることすら気付いておらず、かがされた薬品によって深い眠りについていた。

ガチャ！

しんと静まり返っていた部屋に、ドアノブが回る音が響いた。

??「・・・ん？」

ドアを開いて、そこに1人の人物が部屋へと入ってきた。

??「・・・これは」

その人物は、ドアに遮られているが為に麗佳の姿を確認出来ず、別の方へと注目していた。

??「ここにもこんなものが・・・」

そう言っただけあるものを手に取る。

それはPDAだった。その画面には、ハートの柄が7つ描かれていた。

??「うつむ、何のことやら」

腕を組んで考え込んでいたが、何気なしに横を向いて、そこでようやく麗佳の存在に気がついた。

??「ん！この子は？」

しばらくの間誘拐犯ではないかと疑ったものの、描いていた人物像とまるで違うことに気がつき、もしかすれば誘拐されて来た側の子ではないかと思えた。

??「きみ！きみ！」

いまだ眠りにについている麗佳の元へと歩み寄り、そう呼びかける。

麗佳「んっ・・・、すうー」

かろうじて反応を示したものの、目を覚ます様子はない。

??「やむを得ない、か」

彼女は布団をかけて寝ているわけではなく、その身をベッドにさら

け出している。

男性である彼は、女性に対して手を触れることに抵抗を感じたものの、このまま時を過ごすわけにもいかない。やむなく麗佳の肩に手をやり、揺する。

よく見ると彼女が着ている白いワンピースが、同じく薄汚れたベツドの生地よりもずっと清潔で、それだけに違和感があった。

??「きみ！申し訳ないが、起きてはくれまいか？」

何度か身体を揺すった後、麗佳のまぶたがゆっくりと開く。

麗佳「ん・・・？んんっ」

ゆっくりと開けた瞳の視線は、空中を泳いでいたものの、その目が目の前に居る1人の男性の姿を捉えた。

麗佳「・・・え？なっ！！？」

まだ脳が覚めきつてない麗佳であったが、見知らぬ男性を目にして、とたんに身を思い切り起こす。

??「わっ！とと」

余りに突然の動きに、男性の方が思わず後ずさる。

麗佳「あ、あなたは誰！？一体何をしようとしていたの！？」

寝ぼけていた目は一瞬で覚醒し、射抜くような鋭い視線をその男性

に向けた。

??「お、落ち着いてくれ！僕は・・・」

麗佳「これが落ち着いていられますかっ！！？」

思い切り身を起こし、まるで嘔み付こうとする勢いで身構える。

??「たぶん、僕と同じ立場だとは思っただけけど・・・」

その男性は尻込みしながらも、なんとかそう答える。

麗佳「・・・は？」

そこでようやく、麗佳は今自身がおかれている状況を理解した。

見知らぬ部屋、見知らぬベッド、そして会った事もない男性の姿。

まるで廃墟に見える部屋の風貌が、誘拐され、監禁されているという状況を連想する。

その答えに行き渡った麗佳は、再び騒ぎ始めた。

麗佳「私をさらって、一体どうしようって言うの!？」

??「ち、違うんだ！僕も誘拐されてここに来たんだ」

麗佳「え・・・？」

その男性の返答が意外だったのだろう。麗佳はキョトンとして困惑

の表情を見せる。

葉月「僕の名前は葉月克己。会社帰りに道路を歩いていた所までは覚えていたんだが、気がついたらこの建物の中に居た。しばらく歩いていたら、君を発見して、というわけなんだ」

麗佳「……………」

麗佳は無言だったものの、鋭い視線は向けたままだった。

構わず葉月は続ける。

葉月「恐らく君も同じようなものだとは思っただが、違うかい？」

話を振られた麗佳は、慎重に言葉を選ぶ。落ち着きを取り戻した麗佳ではあったが、葉月に対していまだ疑惑の眼差しを向けたままだった。

麗佳「……………はい。えっと……………そう、私も大学のキャンパスに向かう途中で記憶が途切れていて」

葉月「ふうむ。やはりそうなのか」

しばらく考え込んでいた葉月であったが、思いついたように再び問いかける。

葉月「そういえば、この機械みたいなのは、君の持ち物かい？」

葉月はそう言ってさっき拾ったPDAを麗佳に手渡す。

麗佳「これは・・・？」

それはコンパクトな液晶ディスプレイだった。画面にはハートの『
7』が刻まれたランプの柄が大写しになっていた。

しかし麗佳には思い当たる節はなく、ただただ困惑するだけだった。

葉月「君のじゃないのか。すると、やはり誘拐犯が置いていったものののかな？」

その問いに答えられるものは居ない。PDAを渡された麗佳は、しばらく考え込んでいたが、画面に細長い指を押し当てた。

ピッ！

軽い電子音と共に、画面が切り替わる。

麗佳「これは、なんなのかしら・・・？」

何度か画面を押して操作している麗佳を見て、葉月も自身のPDAを取り出す。

葉月「なるほど、そうやって使うんだね」

葉月は、今までPDAの操作の仕方が分からなかった。麗佳に続いて自身の持つPDAの画面に触れてみる。

ピッ！ピッ！

そうしていくつか操作していく内に、地図の様なものが画面に広がった。

葉月「これは……。ここの地図かな？」

しかし初めて見たその地図を前に、葉月は半信半疑であつた。

なにせ、有り得ないぐらいに広い地図だつたからだ。画面の端から端までが、幾多もの通路や部屋で埋め尽くされていたからだ。

葉月「地図が途切れている。この先はどうやって見るんだろう？」

どうやら画面外にも地図の続きがあるようだ。あれこれと試行しながらうなつている葉月をよそに、麗佳は別の画面を見ていた。

麗佳「ルールの一覧。解除条件、PDA、首輪の作動、ペナルティで……。死ぬ!？」

麗佳はルールの一覧を読み続けることに、驚きを隠せなかった。

首輪は今、私の首に巻かれている。PDAもある。これは、もしかして……

はつきりとした確証はないものの、今の状況はこれに書かれている事柄は、これが事実だと告げている。

と、すると単なるイタズラと考える方が間違いないのかも……。

葉月「大丈夫かい？」

葉月の視線がこちらに向けられているのに気付き、ハッと考えを打ち切る。

麗佳「え？ええ。大丈夫です」

どうやら深く考えている麗佳を見て、どこか具合が悪いのではないかと葉月は思ったようだ。

葉月「これが何だかは結局分からなかったけど、誘拐犯もいるだろうし、ひとまずここを出たほうがいいんじゃないかと思うんだが」

麗佳「・・・そうですね」

麗佳はうなずき、ドアの方に歩いていく葉月の後に続く。

だが、言い知れる不安が、他ならぬ麗佳自身を襲っていた。

誘拐犯、PDA、首輪、ペナルティ。

そして今日の前に居る見知らぬ男性・・・。

麗佳「私は、どうしたらいい・・・？」

その問いに答えられるものは、この場にはいなかった。

・
・
・
・
・
・
・

第3話「蠢く光と闇」（後書き）

総一達4人、長沢、そして麗佳と葉月。果たして彼らを待ち受けるのは？

次回は第4話「恐怖の迷宮」共に行動を開始した麗佳と葉月にスポットをあててみます。乞うご期待

第4話「恐怖の迷宮」

第4話「恐怖の迷宮」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」

P
D
A

状態

解

除条件

御剣 総一

(2)

健康

JOKER破壊

桜姫さくらぎ 優希

(?)

健康

??

北条 かりん

(?)

健康

??

北条 かれん

(?)

健康

??

「グループB」

矢幡 麗佳

(7)

健康

全員

との遭遇

葉月 克己

(?)

健康

??

長沢 勇治

(9)

健康

皆殺し

最初の部屋を出た麗佳と葉月は、行くあてもなく通路をあちこちと彷徨っていた。

葉月「本当にこれだけ広いとはね……。さっき見た地図もあながち間違いじゃないみたいだ」

麗佳「・・・そうですね」

先頭を歩く葉月の後を、一定の間隔をキープしながら麗佳がついていく。

葉月「それにしても、誘拐犯の姿が全くといって見えないなあ。一体どういうことなんだろう？」

麗佳「さあ、分かりません」

先ほどの葉月の問いに、麗佳は口調こそ丁寧なものの、素っ気無く答えている。

麗佳にとって、目の前に居る人物が実は誘拐犯だった、という疑いも、少しではあるが持っていた。

その為か、麗佳の視線は周りよりも葉月に向けられている事の方が多かった。

当の本人は気付いているのかいないのか、麗佳の返事に唸りをあげている。

葉月「うーむ。何はともあれ誘拐犯が居ることは確かだからね。警戒するに越したことはないだろうね」

麗佳「・・・そうで」

その返事は途端に切られた。

最初、麗佳は建物が揺れたのだと感じた。

自身が踏み出した右足が、グラリと揺れたからだだった。

しかし、実際はそうではなかった。麗佳が踏んだ床が少し沈んだのだ。

その事に気付いたのは、既に事が起こった後だった。

ビュン！

その瞬間、壁から勢い良く何かが飛び出してきた。

麗佳「えっ」

その音に導かれるように、麗佳は後ろを振り向こうとする。

その瞬間、頭に強い衝撃が走った。

ガッツ！！

麗佳「うッ！！!?」

壁から飛び出したものは、麗佳の後頭部に接触した。

葉月「！麗佳くん！？」

麗佳のうめき声に、葉月は思わず振り返り、前のめりに崩れ落ちてゆく麗佳を目撃する。

そして、その後ろに見える、棒状の仕掛け。それは勢いづいたまま、180度回転し、壁に再び接触して跳ね返る。

そんな危険なものが麗佳の頭に当たった。その事に気付く前に、麗佳の意識は完全に飛んでいた。

麗佳にとって不幸中の幸いだったのは、床が沈んだことにより体勢が少しグラついていた事。

そして棒状のトラップは、思ったよりも高い位置に設置されていた為、頭を掠めただけで済んだことだった。

もし直撃していたら、命にも関わったかもしれないのだ。

葉月「まさか、これは・・・！」

言い終わらない内に、麗佳は床に叩きつけられた。

ドサッ！

・
・
・

・・・

麗佳「くッ・・・、うっッ・・・！」

それから麗佳が意識を取り戻したのは、さっきの出来事から1時間ほど経過した時だった。

麗佳「あ・・・」

一気に意識が覚醒した麗佳だったが、その瞬間に頭から痛みが伝わってきた。

麗佳「あ、つつッ！」

突然の痛みに、思わず頭を抱える。

葉月「大丈夫かい？」

その様子に、側にいた葉月が心配そうに声を掛ける。

どうやら麗佳が意識を失った後、葉月の手によって運ばれ、近くの部屋のベッドに寝かされていたのであった。

麗佳「え？ええ。大丈夫です・・・」

痛みを必死でこらえながら、さっき起こった出来事がフラッシュバックしていく。

麗佳「あ！」

その事を思い出した麗佳は、反射的に身体を硬くするものの、頭の痛みを余計に感じるだけだった。

葉月「じつとしておいた方がいい。見た目は大丈夫そうだが、それでもコブが出来ているんだから」

慌ただしく動こうとした麗佳を、葉月がゆっくりとした口調でなだめる。

その声で落ち着きを取り戻した麗佳だったが、次第に先ほど起こった出来事を脳が噛み砕いていく内、ガタガタと身体を振るわせはじめた。

ほんの一瞬しか見えなかったけど、後ろから棒か何かで殴られた！

その恐怖感が、麗佳の心に浸透していく。

葉月「……………」

恐怖を身をもって感じている。それに気付いた葉月だったが、今度はどう声を掛けていいか分からなかった。

その恐怖は葉月にも十分伝わっている。それを紛らわそうとしたのか、何とか前向きな言葉で場を繋ぐ。

葉月「ともかく、こんな危ない所はもうゴメンだ。麗佳くんの状態がよくなったら、さっさとこんな所から出てしまおう」

そう提案する葉月に、恐怖をグツと堪えて麗佳も答える。

麗佳「・・・いえ、私は大丈夫ですから。それよりも早くここから脱出しましょう」

そう言い終わらない内に、葉月の制止も聞かずにベッドから起き上がる。

葉月「だ、大丈夫かい？」

麗佳「ええ」

その落ち着き払った態度は、まるで何事もなかったかのようなのだ。

だが、恐怖を拭い去れているわけでは決してない。その恐怖は、麗佳、そして葉月の平常心を知らず知らずの内に奪っていったのだった。

麗佳「・・・？葉月さん。それは？」

ベッドから起き出した麗佳が最初に目を付けたのは、葉月のすぐ脇に置かれていたあるモノだった。

葉月「ああ。何が何だか分からない状況だけれど、誘拐犯が居るところだけは確実だからね。・・・本当はこんな物は持ちたくはないのだが、非常事態だからやむをえないと思つてね」

それは、木製の柄に、特徴的な金属部分に取り付けられた、極々一般的に使われている金槌だった。

本来なら大工用の工具ではあるのだろうが、護身用のつもりなのだろう。

麗佳「こ、これは、一体どこから・・・？」

それを見た麗佳は驚愕した。自身がさつき恐らく罠にかかって殴られたのだろつということは分かっていたつもりだった。

しかし、もし罠でなかったら。いや、もし次があるとしたら・・・？

麗佳が頭をよぎったのは、最初の頃に確認したPDAに書かれたルールの一覧だった。

少なくとも、ここに誘拐して来た連中は、人を傷つけることを厭わなかった。

なら、あのルールに書かれたことを実際にさせようとしているのではないか？その事に気付いたのだ。

葉月「うん、麗佳くんをこの部屋に運んできた後、部屋のダンボールなんかを物色したんだよ。もしかしたら治療出来る医療道具かなにかあるかもしれないと思ってね。それで・・・」

葉月のその言葉は、麗佳の耳には届いていなかった。

今度こそ本当に命を落とすかもしれない。

確信にも似たそれは確実に麗佳の理性を蝕んでいた。

その為か、必死に答えを探そうとして、余計に頭が空回りする。

葉月「と、言うわけなんだ。・・・本当に大丈夫かい？」

麗佳の様子がおかしいことに気付いた葉月は、麗佳の目線がぶつかる位置へと顔を持っていく。

麗佳「えっ！？あ、ええ、そうですね・・・」

まるで質問と違う答えを返しながら、言葉を濁す。

葉月「とにかく、早くここから出よう。とはいえ、さっきの罠のこともあるから、慎重に進んだ方がいいかもしれない」

そう言いつつ、先導してドアの方へと歩んでいく。

麗佳「・・・・・・・・」

その後に麗佳が続く。

葉月「・・・誰もいない、か」

ドアを開いて向こう側を覗き込み、ひとまず人影がない事を確認した後、通路側へ出た。

麗佳も部屋を出ようとするが、必要以上に前方を警戒していたせいか、足元に置いてあった小型の木箱に足を引っ掛けてしまう。

麗佳「あっ！・・・」

驚きの声が出そうになったが、寸前でそれをこらえる。

だが、その声ともども、一気に身を凍らせた。

カタンッ

ひっくり返った手のひらサイズの木箱は、蓋が取れ、中身をさらけ出していた。

型をくりぬいたスポンジに収まる形で入っていたもの。

キラリと光る先端は、細く鋭く尖っていた。

麗佳「これは・・・！」

それは針だった。それも、裁縫に使うような物ではない。

裁断用よりも2倍の長さで太さを誇っていた。しかも太いだけあって、かえって先端の鋭さが目に映る。

素人である麗佳でも、今の状況を鑑みれば、それが暗殺に使えることは、容易に想像出来た。

と、いうより端からそれを目的として作られ、ここに置かれていたのだろう。

麗佳「う・・・」

恐る恐るそれを手に取ってみる。先行している葉月は気付いていない。

こんなものまであるなんて・・・！

禍々しいそれを見続ける内、しだいに麗佳自身の心に悪魔の叫びが聞こえる様になった。

本当に殺し合いをさせようとしているのね・・・。

その思考に覇気がない。恐怖は絶望を生み、そして狂気へと変貌していった。

けれど逆を言えば、これさえあれば、自分の身を守れるかも。

ううん、そんなあいまいではいけない。自分の命がかかってるんだもの！

麗佳「いつそ、殺される前にクロス・・・」

そう決断しようとした矢先、途端に葉月がこちらを振り返り、尋ねてきた。

葉月「さっきはこっちの方角から来たから、今度はこっちに行こうと思うんだが、どうだい？」

麗佳「・・・！！」

絶妙なタイミングの話の振りに、心臓が飛び出そうになった麗佳だったが、必死でこらえる。

麗佳「え、ええ。それでいいのでは？」

葉月「うん。それじゃあさっそく・・・」

そう言い、慎重に床を歩きながら前に進む葉月。それに麗佳も続く。

その間も麗佳は今の状況から正しい答えを見つけようと必死で模索していた。

ルールが本当だとすれば、私のPDAは『7』、すなわち「ゲーム開始から6時間目以降に全員と遭遇する。死亡している場合は免除」なのだから、無理に人を殺す必要はない。

けれど、まず間違いなくこの目の前にいる葉月さんは、私のPDAが『7』ということを知っている。

最初に私が目覚めた時、彼はこのPDAを持っていたのだから。

その事が、今後不利益を被ったりしないだろうか・・・。

あちこち歩いている最中ずっと考え続けていたが、結局明確な答えは出ないままだった。だが一つ確実なことが言える。

少なくとも、今葉月さんと別れば、すぐに襲われる危険性はなくなる。

その結論を導き出した麗佳は、恐怖の対象から逃れるように、そそくさと葉月とは別の通路へ逃れようとする。

葉月「・・・んっ？麗佳くん!？」

その事に気付いた葉月は、思わず後ろを振り返る。

麗佳「私は1人でいきます」

そう言い残し、その場を後にしようとする。

葉月「なんだって！？そんな、麗佳くんを見捨てていくわけにはいかない！」

葉月は必死で呼び止めようとするが、麗佳の歩みは止まらない。

麗佳「私の事は放っておいて下さい。それでは」

葉月「待ってくれ！君を危険な目に会わせるわけには・・・」

麗佳「・・・どうして、そんなに私にこだわるんです？私を油断させて背後から襲うつもりなのですか！」

普段なら、こんな根も葉もない言いがかりは決してしない。だがしかし、今の彼女には自身以外の人物を信用できなくなっていた。

葉月「そんなつもりはない！・・・僕には君ぐらい年の娘が居るんだ。だからどうしても、娘と姿が被ってしまう。それに・・・」

麗佳「だから信用しろと？そんなの無理よ・・・！」

そう言い残し、足早にその場を立ち去っていった。

葉月「くっ、仕方がないのだろうか・・・？」

これ以上無理に引き止めても、彼女は耳を貸さないだろう。

だからといって、強引に連れて行くわけにもいかない。

何より、彼女が僕を信用しないと言っている以上、僕にはどうすることも出来ない。

未練はあるものの、やむを得ないときびすを返した時、それは聞こえてきた。

麗佳「きゃあっ!?!」

それは通路の向こう側から聞こえてきた、麗佳の悲鳴。

葉月「!!麗佳くん!?!」

考えるよりも先に、足が動いていた。

・
・
・
・
・

葉月は、麗佳が曲がったであろう通路の正面に立った時、彼はその目を疑った。

床に尻餅ついている麗佳の姿。彼女が見据える視線の先には、見知らぬ人物の姿があり、麗佳の前に立ち塞がっていた。

そして何より驚いたのは、麗佳とその人物との間の床面に、何かがめり込んでおり、平らな床を大きく抉っていた。

めり込んだ先端はコンクリートに埋まって見えないが、強い衝撃が加わった結果そうなったのだと認識出来る。

長沢「ちえっ、もう少しだったのになぁ」

その少年は、まるで日常で出てくる愚痴を言うような軽い感じで、その言葉を発した。

長沢「よっと！」

その掛け声と共に、黒い金属の先端部分が姿を現す。その形状は、誰がどう見ても斧そのものだった。

そして高らかにそれが掲げられる。

葉月「！いかんっ！？」

あの少年はそれを振り下ろす気だ！その先には麗佳くんが居る。するとどうなるかは火を見るより明らかだ！

葉月とその少年との距離は大きい。

迷っていることも躊躇する余裕もなかった。葉月は自身の右手に持つ金属製の金槌を、その少年のすぐ近くを通り過ぎる様に投げつけた。

間違っても頭に当たらないように低い弾道で。そして麗佳くんにも当たらない方角に。

カーン！カラン！

金槌は長沢にも麗佳にも当たることなく、コンクリートの床に叩きつけられた。

長沢「うわぁっ！」

だがしかし、当の長沢は、それが自身に向けられて投げつけられたのだと錯覚した。その影響もあってか、大きく振りかぶっていた体勢が崩れ、足がもつれる。

葉月「今だ！」

葉月は素早く麗佳の下に駆け寄り、麗佳の手を強く握り締めた。

葉月「早く逃げるんだッ！」

麗佳「え・・・？あ！」

突然の奇襲に我を忘れていた麗佳だったが、葉月の声に瞬間的に状況を把握し、なんとか身体を起こして立ち上がる。

長沢「っ！く、くそ、脅かしやがって！」

激昂した長沢は、勢いにまかせて斧を振り回す。

何とかその場を離れようとする2人だったが、長沢の方がわずかに

早かった。

ザシュツ!!

長沢と反対側の通路に逃げようと身体を前に傾けた瞬間に、振り回された斧の鋭い先端が、葉月の背中を掠める。

葉月「ぐうツ!?・・・ぐおおっ!、何のこれしきっ!」

構わず葉月は麗佳の手を強く握ったまま、全力で走り抜ける。

麗佳も最初こそ引つ張られる形であつたが、葉月に遅れを取らないように、震える足と心を無理やり動かす。

長沢「このお!待ちやがれっ!!」

怒声と共に、長沢が後を追おうとするものの、重量のある斧を持っていることもあつてか、そのペースは上がらない。

彼は斧以外にも、小型の果物ナイフも所持していたのだが、強力な斧で倒すという図式が頭にある為、とっさにそれを捨てるという考えは思いつかなかった。

その間にも、先に行く2人との距離は、徐々に広がっていった。

長沢「待てって言うてるだろ!俺がこの手で」

彼は知らなかった、その存在に。何より目先に居る2人に完全に気を取られていた。

そして全力で追っていることと、重すぎる斧。無理に無理を重ねている状況で、彼に気付けと言う方が無理だったろう。

ガコンッ！

長沢が踏んだ床が、とたんに沈む。

長沢「どわあッ！」

重すぎる斧も相まって、バランスを崩した彼は、床にその身を大きく叩き付けた。

長沢「ぐはっ！！？っう・・・！」

その衝撃で持っていた斧が手からこぼれ落ちてしまう。

彼は慌てて身を起こすものの、葉月達にはとても追いつけそうにもない距離だった。

長沢「くっうゝッッ！！！」

悔しさのあまり奥歯をギュッと噛み締め、腹ただしく思っていた矢先、それは起こった。

ガラガラガラ・・・

長沢「えっ？」

気付いたのは、事が起こった後だった。

ガツンッ！！

長沢が作動させた罠、それは通路を塞ぐ形で降りてくるシャッターだった。

これは本来、多人数のグループを分断することが主な目的だ。

しかしながら、多人数であるが故に発生する事態もある。

それが今回不幸にも、長沢自身に起こってしまった。

長沢「ぐッ！！ぐわあああああッ！！」

文字通り勢い良く降りてきたそれは、長沢のちょうど真上から降りてきた。

左足を軸にして身を起こしていた為、後ろに回っていた右足のふくらはぎの部分に、シャッターが降りたのだ。

そして無情にも、彼の右足は完全にシャッターに完全に挟まれていた。

長沢「痛え！！痛えよお！！」

長沢の悲鳴が、通路に木霊する。

これがごく一般にあるシャッターならば、シャッター自身に強い負荷が掛ければ、安全装置が働いて自動的に動きを停止、もしくは上昇するシステムになっている。

それに通常使われる材質は主に軽いアルミで、普通ならこんな現象は起こらない。

だが、これを仕掛けた連中には、そんな生易しい考えは微塵もないことを暗に示していた。

重たい鉄のシャッターに加え、誰かが挟まるだろうという事を想定して、シャッターの先端部分に隠される形で、鋭い刃物が備え付けられていた。

その刃はギロチンなどに使われる重く鋭い刃物と同類である。それが、長沢の足に目一杯食い込んで、なお下がろうとしていた。

しかも意地の悪いことに、スッパリと『切る』のではなく、じわりじわりと『引きちぎる』感じで。

長沢の悲痛な叫びに気付いた麗佳と葉月は、全力で走っていた足の速度を遅くし、後ろを振り返る。

そして見てしまった。彼、長沢の最後を。

シャッターが降りきったその瞬間、長沢の悲鳴は聞こえてこなかった。

代わりに血飛沫が、あたり一面に飛び散った。そしてシャッターの向こう側に消えた右足……。

死んだのか、痛みのあまり気を失ったのかも定かではない。

しかし、生きていたとしても彼は助からないだろう。

葉月「なんつ・・・」

麗佳「こんな、ことって・・・」

2人は逃げていたことも忘れ、今起こった惨状に、言葉を失ったのだった。

・
・
・
・
・

第4話「恐怖の迷宮」（後書き）

長沢の死、それはこのゲームが本当に存在する事の証となっていました。

次回は第5話「絆」その場に残された麗佳と葉月。引き続きこの2人を追っていきます。他のプレイヤーも登場しますが一体誰が・・・？乞うご期待

第5話「絆」

第5話「絆」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」	御剣 総一	OKER破壊 桜姫 ^{さくらぎ} 優希	北条 かりん	北条 かりん	北条 かれん	「グループB」	矢幡 麗佳	との遭遇	葉月 克己	長沢 勇治	皆殺し
PDA	(2)	(?)	(?)	(?)	(?)	(7)	(?)	(?)	(?)	(9)	
状態	??	??	??	??	??	健康	健康	背中を切傷	死亡	死亡	
解	J					全員					

長沢という名の少年。彼の壮絶な死を見せ付けられた2人は、あまりの結末に、しばし言葉を失っていた。

静まり返った通路に、最初に人の声らしきものが聞こえたのは、しばらく経った後だった。

??「あ・・・」

かろうじて人が発したと分かるその声の主は、麗佳でも葉月でもなかった。

麗佳「!？」

葉月「君は・・・？」

背後に人が居る。その気配に気付いた2人は、ほぼ同時に背後を振り返る。

??「・・・!!？」

その人物はやはり過去に会ったこともない人物であった。

赤い制服を着ている黒髪の少女。高校生だろうか？彼女は、しばし名も知らぬ少年の死体に釘付けだったが、自身に向けられた視線に気付いて、童顔の表情をこわばらせる。

??「い、いやあああああつ!!？」

まるで火がついたかのように、葉月の呼び止める声を掻き消すほどの悲鳴と共に、麗佳達から逃げていった。

葉月「あ・・・」

追いかければよかったのだが、残された2人も相当なショックを受けていた為、そんな余裕はなかった。

それどころか、彼女の甲高い悲鳴が、白紙になっていた思考に強烈なほどの恐怖心を煽る結果となった。

麗佳「も、もういや！こんな所、1秒でも居たくないわっ！」

麗佳はとにかくこの恐怖に溢れた空間から抜け出したいという衝動に駆られた。

そう言つて黒髪の少女が逃げたのとは別の通路に走ろうとする。

葉月「あ、ま、待ってくれ・・・ぐうっ!？」

その場を逃れようとする麗佳を追いかけようと足を踏ん張った時、背中に刻み込まれた傷の痛みが、全身を走った。

その痛みに耐えられず、思わず片膝をつく。

麗佳「・・・あっ！」

あまりの出来事に我を忘れていた麗佳であったが、他ならぬ麗佳を助けてくれた葉月のことを思い出し、その足を止める。

助けるべきか、放っておくべきか・・・。

最初こそ迷っていたものの、自身が今こうして生きているのは葉月のおかげだ。

葉月がいなければ今頃、あの少年の持つ斧によって身体を切り裂かれていただろう。

葉月「ううつ、う・・・」

その葉月が痛みにつめいている。いまだ裏切りを恐れる麗佳であったものの、それを理由に見捨てるほど麗佳自身は薄情ではないし、強くも無かった。

麗佳「・・・大丈夫ですか？」

麗佳は逃げようとした足を反転し、葉月の元へ駆け寄る。

葉月「あ、ああ。と、言いたいところだけど、正直、かなりキツイかな・・・」

葉月からは、自身の背中の傷の深さはよく見えない。

しかし、床に滴り落ちる血を見る限り、それが決して浅い傷ではないことを示している。

麗佳「どうすれば、・・・あ！そういえば！」

麗佳は、先ほど自身が倒れていた際、葉月に手当てされたことを思

い出した。

その時に葉月の横には救急箱が置かれていた。

あれはそのまま部屋に置いてきてしまったが、部屋をあちこち探索している時間はない。

ひとまず葉月を近くの部屋まで連れて行き、急いで救急箱を取りにいったのであった。

・
・
・
・
・
・

麗佳「ちょっと失礼します」

麗佳は一応断りを入れ、血で汚れたカッターシャツのボタンに手を掛ける。

葉月「あ、ああ、済まないね」

そうして、葉月の服を脱がせると、傷がくつきりと目に写るようになる。

出血の割りには、傷自体はそれほど深くはなさそうだ。麗佳はさっそく大きめのガーゼに消毒液をつけ、それを傷にそっと当てていく。

葉月「いつつっ！」

麗佳「しばらく我慢してください」

葉月「う、うむ・・・」

そして、傷口に新たなガーゼを当て、包帯をきれいに巻いていく。

葉月「結構上手なんだね」

麗佳「・・・昔、保険委員をやっていたことがありますから」

葉月「なるほどなあ」

葉月は痛みをこらえつつも、感心したように何度もうなずく。

そして手当てが済んで、再び服を着させようとしたのだが、

麗佳「あっ、血で汚れていますけど、どうしようかしら・・・」

麗佳が両手に持っているカッターシャツには、生々しい血がベッタリとついたままだ。

葉月「構わないさ。まさか君の前で、上半身裸でうろつくわけにもいかないしね」

そう言って頭を掻く。

麗佳「そうですね。・・・あっ」

そんな時、カッターシャツからひらりと何か紙のようなものが落ちたことに気がついた。

麗佳は床に落ちたそれを拾ってみる。

麗佳「これは・・・」

それは3人の人物が並んでいる写真だった。

葉月「あ！それは・・・」

麗佳「もしかして、前に言っていた娘さん？」

麗佳は写真をまじまじと見ながらそう尋ねた。

葉月「恥ずかしながら、そうだよ。中央に居るのが僕で、写真から見て右に居るのが家内。そして左に居るのが私の娘さ」

麗佳「そうですか。きれいな娘さんですね」

葉月「そうかい？そう言う君も美人じゃないか」

葉月はニッコリと微笑みを返す。娘を褒められたことが純粹に嬉しいのだろう。

麗佳「愛する家族が居るのに、私を口説いていいんですか？」

葉月「あ、いや、そんなつもりは・・・。ははは、参ったなあ・・・」

葉月は言葉とは裏腹に照れていた。そんな葉月はまさに、普通の、うっん、違う。とても立派な父親そのものだった。

いつしか麗佳は、この人が裏切るんじゃないかという疑念は薄らいでいった。

この人が言う、娘さんと同じ年頃の私を見捨てたくはないという気持ちに偽りがないように感じられたのだ。

麗佳「あつ、こんな大事な物、私が持つてゐるわけにはいきませんね。どうぞ」

そう言つて写真を葉月に手渡した。

葉月「ああ、ありがとう」

葉月はそう言つて、血で汚れていないズボンのポケットにそれをしまいこんだ。

葉月「あつと、こんな時に雑談をしている場合じゃないな。手当てもしてくれまし、そろそろ行こうか？」

麗佳「あ、無理はなさらないでください」

葉月「いやいや、こんな所で休んでいて、君に何かがあつたら大変だ。それにこのPDAに書かれたルール・・・」

葉月は真剣な眼差しになって、PDAを取り出した。

葉月「きつとこれに書かれていることは真実、と考えて行動した方

が良いと思う」

麗佳「ええ、・・・少なくとも人が死んだ、ということは間違いないですし・・・」

さっきまでの微笑ましい表情は失せ、どことなく沈んだ表情に変わる。

葉月「出口を見つけるのが最善だが、見つけれないかもしれない。そうなった場合・・・」

麗佳「このルールに従わざるを得ない？」

麗佳の返答に、葉月はうなづく。

葉月「ええと、君のPDAはたしかハートの『7』だったね？」

やっぱり覚えてたのね・・・。

そう思ったものの、どの道葉月には解除条件を教えても良い気分になっていた。

葉月「僕はこれだ。ダイヤの『K』。僕の首輪を解除する為には、他の人達が持つPDAを5つ集めなくてはならない」

麗佳「ええと、そうすると・・・」

葉月「うん。少なくともあと4人。協力してくれる人を探さなくてはいけないことになる」

葉月には、誰かを殺して奪うという発想は全くといっていいほどなかった。

葉月「ふう、今思えば、あの時に会った彼女を、追いかければよかったなあ」

葉月の首輪の解除のためだけではない。恐らく彼女も参加者の１人なのだろう。その子を１人にさせておいては、きつと自分の二の舞になってしまう。

もし、それで命を落としてしまったら・・・。

ガチャッ！

麗佳「・・・！！」

とたんに、部屋のドアが勢いよく開かれた。あまりに突然の出来事に２人はびくつと身体を震わせる。

??「・・・むっ」

ドアの向こうに居たのは、見るからに精悍な体つきの男だった。

??「・・・お前達は？」

そう問いただしてくるところ、どうやら誘拐犯ではないようだ。

葉月「あ、ああ、僕達はここに誘拐されてきたんだ。君たちと争うつもりは毛頭ない」

葉月は慌ててそう言い添える。

高山「そうか。・・・俺は高山」

麗佳「え？」

高山「高山浩太だ。お前達の名は？」

そう言われて、その人物が、自身の名前を名乗ったのだということに気がついた。

葉月「ああ、僕は葉月、こちらは麗佳くんだ」

麗佳「・・・はじめまして」

葉月には気を許しはじめていたものの、高山と名乗る人物の油断のない顔つきも相まって、緊張は隠せない。

??「あ、あの」

すると、その大男に隠れて判らなかったが、背後から1人の女性が顔を出す。

どうやら彼1人ではなかったようだ。

高山「どうやら、誘拐犯ではなさそうだ」

高山はその女性に向けてそう告げる。

??「そうなんですか。よかったあ」

その女性はあからさまに安堵の表情を浮かべる。

葉月「うん？君のその制服・・・」

??「はい？」

葉月の視線に、その女性はキョトンとした表情に変わる。

葉月「たしか、前に見た女の子も、君と同じ赤い制服を着ていたなあ」

そう。前というのは、怯えて逃げていったあの女の子のことだ。

??「えっ!!?」

その女性は、驚きに顔を染める。

??「もしかして、黒髪でショートカットの!?」

細長くキリッとした彼女の眉がつりあがり、遠慮なしに葉月にそう問い詰める。

彼女のふんわりとした長い髪が、動くたびになびいている。

葉月「あ、ああ、たしか、そんな感じだったかな」

その剣幕に押されつつも、そう答える。

??「・・・真奈美だね。きつとそうよ」

彼女は問い詰めるのを止め、深く考え込む。

麗佳「知り合い、なのかしら？」

??「ええ、・・・私の親友なんです。きっとバイト帰りに一緒に連れ去られて・・・」

彼女はグッと唇を噛み締める。

??「早く探さなきゃ、それでは・・・」

高山「待て！」

慌てる彼女を高山が制止する。その低く強い声には静かな迫力があり、彼女の急ぎ足をピタリと止めてみせた。

高山「焦る気持ちも判るが、今は状況を確認することが先だ」

??「で、でも・・・」

高山「それに、この者達にも探すのを協力してもらおう。その方が効率が良い」

??「・・・わかりました」

高山の言うことには筋が通っていた。しびしびといった感じで、彼女は葉月達のもとへと帰ってきた。

高山「それと」

高山はもう一つ付け加えた。

高山「名を名乗っていないのは君だけだ」

渚「あつ、そうでした。えと、私の名前は綺堂、綺堂渚」

彼女、渚は深々と頭を下げた。

葉月「よろしく」

麗佳「よろしくお願いします」

こうして、4人は状況の確認もそこそこに、行方不明の女の子、真奈美と呼ばれた女性を探す為に、行動を起こすことになるのであった。

・
・
・
・
・

麗佳「と、言ったものの、どこを探せばいいのかしら?」

麗佳の問いに、先頭を歩いていた高山が振り返る。

高山「さしずめ、階段かエレベーターを見張るのが良いとは思っただが?」

渚「と、いいますと？」

高山の提案に、渚は敏感に反応する。

高山「このまま通路を無作為に歩き回っても見つけれられるとは到底思えん。それならば必ず通るであろう場所を見張る方が良い」

葉月「なるほど」

葉月は納得した様にうなづく。

高山「だが、逆に好戦的な相手と出会うこともある。・・・注意しておくことだな」

高山の言うことももつともだ。

しかしながら、葉月達にとってこの行動は必要不可欠なものだった。

葉月は5台のPDA、麗佳は他のプレイヤーと出会う必要があった。

当初、葉月は自身のPDAの解除条件を高山達に教えようとしたのだが、慎重な麗佳に止められた。

対する高山も同じ考えなのか、ひとまずPDAが何かは教えあわないことにした。

もし、相対する解除条件ならば、必然的に別れざるを得ないからだ。

そうこうしている内に2階へと続く階段が見えてきたのだが。

高山「むっ……。どうやらここは通れない様だな」

その階段には様々な障害物が置かれ、通る為には、それを乗り越えていかなければならない。

渚「なんとか登れない、かな？」

麗佳「それは、無理がありますね」

麗佳は冷静にそう判断する。

葉月「仕方がない。別の階段を探すでしょう」

葉月はそう言って再びPDAを起動させる。

しかし、その手がピタリと止まる。

葉月の見ているPDAの画面。本来なら地図の画面が表示されるはずが、全く別の画面へと切り替わっていた。

そこにはカボチャ型のキャラクターが表示されていた。訝しげにそれを見つめる葉月だったが、そこに派生して書かれているメッセージが目に入った。

「これから知らせる事は、キミにとってすごく重要なコトになるよっ！」

画面にはそう書かれていた。

葉月「・・・？」

何のことやらさっぱり判らないが、これが誘拐犯のメッセージだということだけは明白だった。

その為か、自然と表情は硬くなる。

しかし、再び画面が変わったその瞬間、葉月の顔はみるみる内に青ざめていった。

葉月「なんっ！」

思わずそう声を漏らす葉月の様子に、麗佳が気付いた。

麗佳「どうしたんです、葉月さん？」

葉月「・・・」

そう返事を返すものの、彼は返事一つせず、PDAに釘付けだった。

葉月の人生にとって、今までで一番ショッキングな出来事だったに違いない。

その画面に映されていたのは、見間違えるはずもない、葉月の娘の姿だった。

それも、両手と両足を縛られ、木製のイスにその華奢な身体を固定

されて、口も布で塞がれていた。

表情は怯え、目には涙を浮かべている。

声は聞こえなくとも、それが助けを乞っている事は明らかだ。

そして極めつけは、その下に大きく表示された新たなメッセージ。

「彼女を助けたければ、ゲーム終了までに矢幡麗佳を殺す事。さもないと・・・」

テロップでメッセージが流れ、すべてが表示された瞬間。

ザシュッ！！

葉月「あっ・・・」

娘が写っていた映像は、真っ二つに別れた。まるで、娘を切り裂いたがごとく。

麗佳「・・・？どうしたんですか」

麗佳は葉月が凝視しているPDAを覗き込もうとした。

葉月「ああ！いや、なんでもない！」

思わずPDAをズボンのポケットにしまい込む葉月に、不思議そうな表情を浮かべる麗佳だったが、追及はしなかった。

高山「すまんが、急いでくれないか？」

先頭を歩く高山は、足を止めた葉月に対して、そう急かした。

葉月「あ、も、申し訳ない。すぐ行こう！」

葉月は思い切り不自然なほどの明るい声でそう言った。だが内心、動揺で頭は真っ白になっていた。

麗佳「・・・？」

その態度に疑問を持つ麗佳。

高山「・・・あまり大声を出すのは感心しないのだがな」

気付いているのかいないのか、冷静な台詞を返す高山。

渚「えと、こちらの階段は、x印がついているから・・・」

恐らく彷徨っているであろう真奈美の身を案じ、まるで気付いていない渚。

葉月「僕は・・・」

障害物のない階段を見つけ、2階へと上がる間、彼は完全に上の空だった・・・。

・
・
・
・
・
・

第5話「絆」(後書き)

葉月に課せられた運命。さだめ 彼は一体どうするつもりなのでしょう？

次回は第6話「苦悩」娘を助ける為に麗佳を手にかけるのか、それとも・・・？次回はこのゲームの最初のヤマ場、引き続き麗佳達を追っていきます。乞うご期待

第6話「苦悩」

第6話「苦悩」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」

P
D
A

状態

解

除条件

御剣 総一

(2)

??

J
O

KER破壊

桜姫 優希

(?)

??

??

北条 かりん

(?)

??

??

北条 かれん

(?)

??

??

「グループB」

矢幡 麗佳

(7)

健康

全員と

の遭遇

葉月 克己

(K)

背中を切傷

P
D
A
5

台収集

高山 浩太

(?)

健康

?

?

綺堂 渚

(?)

健康

?

?

長沢 勇治

(9)

死亡

皆

殺し

2つ目の階段を見つけた麗佳達4人は、そこに1つ目の階段のような障害物がない事を確認した後、慎重に階段を上っていった。

幸いといって良いのかわからないが、他のプレイヤーはおろか、誘拐犯の姿もなく、しんと静まり返ったままだった。

渚「ここで真奈美が来るのを待つんですよね？」

なんとなく焦り気味の渚は、率先して他の3人に確認をとる。

高山「ああ」

それにうなずいたのは高山だ。彼は階段横の壁に背をもたれ、ポケットから煙草を取り出す。

高山「だが、その少女が先にここを通り抜けていなければいいのだから」

渚とは対照的に高山は冷静に状況を分析する。

高山「それに地図の通りならばエレベータもある。ここで見張っていて必ず見つけられるとは限らん」

渚「それなら、二手に分かれて見張れば・・・」

先走る渚を、高山は制す。

高山「少し落ち着け。焦ってはいざという時の見極めが出来ん」

なおも何か言いたそうな渚をよそに、高山は麗佳達の方に視線を向ける。

高山「お前達はどう思う？」

そう問いかけるものの、葉月は全くといっていいほど反応しなかった。

麗佳「え？えつと・・・。二手に分かれるのはかえって危険が増すのではないかと」

葉月の様子がおかしいことを気にしていたのか、突然振られた話に麗佳は驚きを見せつつ、そう意見する。

高山「ああ。俺も得策とは思えん。ひとまずここで何時間か見張って、合流できなければ諦めて先を急ぐ、というのはどうだ？」

渚「もし合流出来なかったら、次の手は？」

高山「それよりも、先に考えておくことがある。もしここで好戦的な相手と出会った場合・・・」

高山と渚のやりとりは続く。麗佳も時折その話に加わるのだが、やはり葉月の様子がおかしいことを気にしているのだろう。

最初は怪我により、気分が悪くなっているようにも見えていたが、どうやらそうではないらしい。

やはり、先ほどPDAを見ていた時から目に見えて様子が変わったように、麗佳の目には映っていた。

それだけに、余計気になるのだろう。

麗佳「葉月さん・・・」

ポツリとそう呟く。葉月に何事かを尋ねても、首を横に振るだけなのだ。

当人がそう言っている以上、無理に聞き出すわけにもいかない。

麗佳「私達には、私には言えないこと・・・？」

今までの出来事を考えると、悪い想像しか浮かんでこない。葉月が垣間見せる苦しげな表情が、今も頭をよぎる。

高山「・・・という方針で構わんか？矢幡、葉月」

麗佳「え？あ、はい」

そう返答するものの、どんな方針にしたのかは頭には入っていないかった。

高山「葉月はどうだ？」

葉月「え！？・・・あ、ああ、いいんじゃないかな？」

高山に促され、ハッと気がついたかのように返答する。

高山「・・・戦場では、一瞬の気の緩みが命取りになる。覚えておくんだな」

高山も葉月が、心ここにあらずの状態には気付いているようだが、それにはあえて触れずにそう忠告する。

葉月「そ、そうだね。気をつけるよ」

そう言うものの、その声には張りが無い。

高山「ならば、お前達はしばらく休んでおく方が良い。4時間後に見張りを交替してもらおう。・・・念のため部屋に入る時も警戒しておけよ」

そう言って話を切り上げる高山。渚もそれに続く。

渚「真奈美・・・。無事でいてね」

その呟きは、この場に居る何人が聞いていただろうか。それに答えるものはいなかった。

麗佳「葉月さん。部屋で休みましょう」

麗佳は葉月の手を取り、そう促す。

葉月「あ、ああ」

やはり上の空の葉月であったが、一つだけ理解した。いや、理解してしまったことがある。

このまま部屋の中に入ってしまったえば、そこには自身と麗佳しか居ない。

つまりは……。

その先を想像するのが怖くて、葉月はぶんぶんと首を振る。

麗佳「葉月さん？」

葉月「あ！すまない。早く休むとしよう」

あからさまに不自然な動作で、葉月は素早く部屋の中へと入っていた。

そして部屋の中に入った葉月の目に入ってきたのは、まるでこれらの自らの行動を示唆しているかのようなだった。

葉月「……くっ！」

そこには、今まで1階で見た部屋とは違い、あまりにも異質だった。

部屋の壁は今までどおり一面コンクリートだった。

問題はそこに立てかけられている物の数々。

麗佳「こ、これは・・・!？」

後から入ってきた麗佳は、あまりの光景に言葉を失う。

ナイフを始めとして、日本刀、手斧、鉋や鎌、他にも様々な形状の刃物や金属類などが、所狭しと置かれていた。

それらは、まるで熱心なコレクターが、見せびらかすかのごとく整然と並んでいたのだ。

麗佳「こんな所で休めって言うの・・・？」

明らかに武器と分かるそれらに囲まれて過ごす。たとえそれらを使う人間が居なかったとしても、圧迫感は並大抵ではない。

麗佳は戸惑い、高山達に相談しようかと反転して部屋を出ようとする。

葉月「・・・・・・」

しかし、葉月は何を思ったか、重い足取りで部屋の奥へと進んでいくのが目に入る。

麗佳「え？あ、葉月さんっ!？」

麗佳の制止が耳に届いていないのか、そのまま壁の一角へと足を運んで、まっすぐを見つめる。

その壁には、先刻葉月達を襲った少年が持っていたのと同じ斧が壁一面に立てかけられていた。

斧と、それを支えるフックはまるで装飾がなく、無機質な金属をむき出しにして置かれていた。

葉月はしばらくそれをぼうつと見つめたままだったが、意を決したかのようにその内の一つを手取る。

ずっしりとした手に伝わる重み。それは葉月の心の重さを表しているかのようにだった。

麗佳「は・・・葉月、さん・・・？」

この時の麗佳は、葉月が何を思っているかは分からなかったが、何か尋常ならざるものを感じ取っていた。

葉月「明海を、明海を助けるんだ・・・」

無意識の内に、自身の娘の名を呼んだ。

そして否と叫ぶ自身の心を無理やり押さえつけ、葉月はそのまま麗佳の方へと振り向く。

麗佳「葉月さん・・・、一体・・・？」

振り向いたことによって麗佳と正面から向き合う形となった。

葉月「麗佳くん・・・」

『麗佳を殺せ』という文字を見た時から、まともに顔を見れなくなっていた為、麗佳の顔を見たのは久方ぶりに思えた。

本当に、僕はこの娘を殺すべきなのか？他に方法があるんじゃないのか！？

かつて美しいと葉月自身が評したその顔は、眉をひそめており、目も不安と動揺が見て取れる。

その表情は、捕らえられた娘の表情を思わせる。

きれいな娘さんですね。

写真ごしに見た葉月の娘を、この目先に居る女性はそう評した。

こんな大切なものを私が持っているわけにはいきませんね。
どうぞ。

そして、微笑ましい表情で家族の写真を葉月に……。

葉月「……くっ！！やっぱり僕には無理だっ！」

必死で築き上げた殺意が折れ、それと同時に手に持っていた斧を落としてしまう。

カァン！カラン……。

そして、そのまま床に崩れ落ちる。

麗佳「葉月さんっ！だ、大丈夫ですかっ！」

不安な表情を引っ込めて、葉月の元へと駆け寄る。

そして、そのまましゃがんで、葉月と視線を同じにする。

葉月「済まないっ、済まない！明海っ！・・・」

葉月は許しを請うかのように、繰り返し娘の名を呼ぶ。

一方の麗佳には、葉月がなぜ許しを請うているのかは知る由もない。

ただ一つ判ったことといえば、何か葉月に深刻な状況が訪れていて、それに押しつぶされそうになっている事。

だから、麗佳は葉月が落ち着くまで、そっと背中をさすっていたのだった。

・
・
・
・
・

麗佳が葉月を落ち着かせている頃、騒ぎに気づいたのだろう。見張りをしていた高山と渚が共に部屋に入ってきていた。

2人は、この部屋に敷き詰められていた武器に驚きを見せていたものの、葉月達に何かがあった事を察して、しばらく様子を見守っていた。

そうして葉月がやつとのことで落ち着きを取り戻した後、すべての事情を説明する事にした。

麗佳「そんなことって・・・」

麗佳はあまりの内容に驚きを隠せなかったが、それと同時に納得もしていた。

高山「よもや葉月の娘が捕らえられているとはな」

高山もいつもの無表情に近かったが、どこか苛立ちを秘めているように見えた。

おそらく、このゲームに対する高山なりの怒りの表れなのだろう。

渚「私の親友だけじゃなく、葉月さんの家族にまで・・・！ふざけてるわっ！」

渚はもっと率直なようで、純粹に怒りを感じていた。

彼女にとって、家族に対する思い入れは人一倍だったからだ。

麗佳「葉月さん・・・」

麗佳はどう声をかけていいか迷ったものの、このまま葉月を放っていくことが出来ずに、なんとか言葉を繋げる。

麗佳「もし、もし私がこの先怪我を負って動けなくなった時は、その時は・・・」

私を殺してもいいですよ。聞かなくても葉月には判ってしまった。

葉月「そ、そんなことは出来ない。娘も大切だが、君だって・・・」

自身が愚かだったことを責めもせずに、そんなことを言う麗佳に慌てて反論しようとするが、麗佳の人差し指が葉月の口にそっと添えられる。

麗佳「それはあくまで最悪の事態の場合ですよ。．．．私がなんとかして娘さんを助け出してみせますから！」

その方法は今は全くと言っていいほど思いつかない。けれど決していい加減な気持ちで言っているわけではない。

娘の事を、そして私のことさえも大切に想う葉月を見捨てることなど出来るはずもなかった。

それに、こんな卑劣な事を思いつく連中に捕らえられているのは、葉月の娘さんも、そして私達も同じ立場なのだから。

葉月「．．．ありがとうつ、本当に．．．」

いつしか葉月の目には涙が浮かんでいた。

葉月「ははは．．．、もう齡かな？涙もろくていけないな．．．」

泣きつつも、こらえようとして口元に笑いを浮かべる。

葉月の内に渦巻く様々な感情が、そうさせているのだろう。

渚「そんなことないですよ。私もその気持ちは痛いほどわかります」

人を大切に想う気持ちは、何よりも大切。それは渚、そして葉月にとって心からそう想っている本心であった。

高山「・・・落ち着いたらこの部屋を出るとしよう。さすがにこの有様では落ち着けないだろう」

そして4人は新たな想いを自らに託して、先へと進むのであった。

・
・
・
・
・

部屋を出て、通路上に4人並んで座っていた。

階段を見張っているのは麗佳。通路の反対側を見張っているのが高山。その2人の間に挟まれる形で渚と葉月が休んでいた。

こうすれば、どちらかから人が来てもすぐにわかる、というわけだ。

鋭利な刃が剥き出しで、重量感ある斧は結局あれから誰も手にしなかった。代わりにさきほどの部屋に吊り下げられていた日本刀を高山が手にしていた。

鞘に収まっている為、帯刀時は刃が見えず、無意味に威圧することがないからだ。

渚「日本刀、使ったことがあるんですか？」

日本刀の柄の部分の感触を確かめたりしている高山の横から、渚がおずおずと聞いていた。

高山「昔、傭兵をやっていたことがあってな。日本刀自体は扱ったことがないが、刃物の類には慣れている」

渚「そうなんですか・・・」

武器らしい武器を持ち出したのは高山だけだった。

4人が4人とも仰々しい武器を携えていたら、大抵の人は恐れて近づこうとしないだろう。

たとえ次に遭遇するのが渚の親友でなかったにせよ、味方を増やしていくに越したことはない。

その為にあえて武器を持たない渚を、階段を見張っている高山のすぐ近くに座らせているのだ。

高山「俺たちが交替する時には、葉月かお前にコレを渡さねばならんが・・・」

渚「本当はこんな物、持たない方が幸せなのに・・・」

そう言う渚の顔は暗く沈んでいた。

高山「やむを得ないだろうな。うむ、そうだな・・・、攻撃する為のものではなく、自らを守るためのお守りとも思っておくのがい

いかもしれんな」

高山はそう諭すのだが、渚の表情は晴れない。

渚「真奈美・・・、どうか無事でいて」

渚が願うのはただそれだけだった。

高山「気持ちは分かるが、今は休め。親友に出会った時、お前が無事でなければ意味がないからな」

渚「はい・・・」

渚は軽く頷くと、持っていた毛布に身を包み、そのまま目を閉じる。

それを見届けた高山は、刀を構えなおし、見張りを再開する。

高山「さて、釣れるのは敵か味方か・・・」

それは高山自身にも分からなかった。そして再び通路は静寂に包まれたのであった。

・
・
・
・
・
・

シャッターに切断される形で息を引き取った長沢の死体の前に、一

人の男の姿があつた。

手塚「オイオイ、マジかよ」

彼、手塚はこの建物で目覚めてから、他のプレイヤーとは一切接触せずに、今ここに居た。

手塚「何か嫌な予感がしてたが、この展開はさすがに予想外だったぜ・・・」

手塚は軽く舌打ちをすると、両手に持っていた槍を床に置き、シャッター部分から生えているように見える胴体から足の部分を丹念に調べ始めた。

手塚「ん？コイツは・・・」

その死体、足だけを見ても少年と分かるそのポケットをまさぐる内、何か硬いものに触れる。

それを取り出してみると、見たことのある機器が姿を現す。

手塚「画面の柄が、スペードが9つ、か」

そこに描かれていた柄は、手塚自身の物とは違い『9』の数字を示すものだった。

タッチパネルに触れ、あれこれと操作していたのだが、ふと長沢のポケットの近くの床に、一枚の紙が落ちているのが目に入る。

手塚「あん？なんだこりゃ？」

手塚はそれを拾い、文字を最初から順に追っていく。

そして最後まで目を通した後、メモをそつと自身のポケットへと放り込む。

手塚「なるほどねえ。コイツは既にルールをすべて把握していたってわけか」

そうなるといくつか言えることがある。

手塚「コイツは他の、恐らく数人程度と面識があつたんだろうな。・ ・ ・それと、死体の血がまだ流れている状況から考えて、まだソイツらは近くに居る可能性が高い」

一通り死体を調べ終わった後、手塚はその場を後にするのであった。

手塚「・・・ん？」

そうして暫くも歩かない内に、通路の角からチラリと人影が見えた。

その人影はすぐに姿を消し、手塚からは見えなくなってしまった。

手塚「さっそくか。相手が誰だか分からねえな。・・・後をつけてみるか」

そう決めた後、手塚はその人影を追って忍び足で近づいていくのであった。

・
・
・
・
・

ディーラー「ふむ、予定通り、だな」

コンソラーを操作していたディーラーは、モニターの様子を窺いながらそう呟く。

ディーラー「葉月への諫言は失敗したと。まあ、これもシナリオ通りだな」

忙しそうに手を動かしているものの、彼にとっては手馴れた作業だ。

ディーラー「失敗はしたが、布石にはなる。・・・この段階では、まだ始まりでしかないとは、彼らは想像つくまい」

ディーラーが画面越しに見ているのは、葉月達4人のことである。

ディーラー「準備は整った。あとは『メインマスター』の行動次第。よろしく願いますよ」

彼はそう締めくくり、『メインマスター』が映っているモニターを見続けたのだった。

• • •
• •
• •
•
•

第6話「苦悩」（後書き）

麗佳を殺すことを断念し、共に歩んでいることを選んだ葉月。果たしてこの選択が今後どのように影響していくのでしょうか？

そして彼らの知らぬ所で行動している手塚。彼が見た人影とは一体・・・？そして彼は何を考えているのでしょうか？

次回は第7話「緊迫」今度は総一たち4人に再びスポットを当ててみます。総一たち4人は長沢と別れてから、一体どうなったのでしょうか？乞うご期待

第7話「緊迫」

第7話「緊迫」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」件

P
D
A

状態

解除条

御剣 総一

(2)

??

J
O

KER破壊

桜姫 優希

(?)

??

??

北条 かりん

(?)

??

??

北条 かれん

(?)

??

??

「グループB」

矢幡 麗佳

(7)

健康

全員と

の遭遇

葉月 克己

(K)

背中を切傷

P
D
A
5

個収集

高山 浩太

(?)

健康

??

綺堂 渚

(?)

健康

??

手塚 義光

(?)

健康

??

長沢 勇治

(9)

死亡

??

麗佳達が2階で見張りをしている頃と時を同じくして、総一たち4人は状況をイマイチ理解出来ないまま、行動を続けていた。

総一「おつ、地図の通りだと、この先にエレベーターがあるな」

自身のPDAを操作しつつ、画面の一角を指差す。

桜姫「あ、ホントね。1階がダメだから、このまま一気に最上階に上っちゃおつか?」

桜姫はそう提案する。6階ないし屋上からなら外の様子が見えるか
も思ったのだ。

状況を把握したいという考えもあるが、本音の所は目が覚めてから
今まで、ずっとこの封鎖されたコンクリートを見続けている為、外
の景色を見る事で安心したかったのだ。

かりん「さんせーい。私も外の空気が吸いたいよ」

かれん「うん。・・・なんかココって落ち着かないし」

どうやら異論はないようなので、このままエレベーターの前へとやって来た。

総一「それにしても、ハラ減ったなあ・・・」

重苦しい雰囲気を少しでも晴らしたいからなのか、総一がふとそんな事を言い出す。

桜姫「うーん、そういえば私も・・・どこかに食料ってないのかしら？」

この建物内で目覚めてから、ここに至るまでに幾つかの部屋を調べてはいたものの、食べ物らしき姿は何処にも見当たらなかった。

変わりに薄汚れた日常雑貨などが、ダンボールに所狭しと敷き詰められていた。

ただ一度だけ、それだけ妙に真新しい感じの薙刀が、部屋の隅の方にポツンと置かれていたのを目にしていた。

現状をよく理解していない4人は、まさかそれを使って他のプレイヤーが襲撃してくるかもしれない、という考えは持っておらず、武器そのものに対して警戒し、その武器には手をつけていなかったのだ。

かりん「私もおなか減ったなあ」

かれん「うん・・・」

などと呑気な事を言い合っている内に、目的の場所へとたどり着いた。

総一「おっ、どうやらここがエレベーターのようだな」

そこには2基のエレベーターが並んで設置されていた。

さっそくその内の一つのボタンを押してはみるものの、故障でもしているのか、電気が通っている様子がない。

総一「おっかしいなあ。まるで反応がない」

何度もボタンを押すが、やはり変化はない。

桜姫「壊れてるのかな？」

総一「かもしれない」

ボタンを押すのを諦め、途方に暮れている所に、もう一基のエレベーターを確認していたかりんが、慌てて総一を呼ぶ。

かりん「そ、総一！？ちょ、ちょっとこっちに来て！」

その様子はただ事ではない。

総一「どうした！かりん！？」

総一たちが慌てて駆け寄ると、かりんはエレベーターの上側を指差した。

そこにはエレベーターのカーゴが今何階に居るのかを表示しているパネルがあつた。

かりん「そ、それがホラ！今このエレベーターが下に向かって降りて来てるの！？」

かりんの言うとおり、4階の部分が明るく点灯していたのが、3階、2階へと下がってきているのだ。

総一「だ、誰かが乗っている！？」

その事に気がついた総一たちは、真っ先にそれに乗っている人物が誘拐犯の一味ではないか、という考えを思い浮かべた。

総一「とりあえずどこかに隠れよう！」

かりん「隠れるってたって、どこに！？」

桜姫「こつちよ！こつち！」

桜姫はもと来た通路の方へと駆け込む。総一たちも慌ててそれに続く。

このエレベーターホールには隠れる場所など皆無だった。しいて言えば隣の壊れたエレベーターだが、そんな所に悠長に隠れる暇などなかった。

そうこうしている内に、エレベーターは総一たちが居る1階へと降り立った。

ガタンッ！

そしてエレベーターの扉が開く。

ダダダッ！

通路に隠れてその様子を見ていた総一たちだったが、エレベーターから2つの人影が物凄い勢いで飛び出してくるのを目にした。

桜姫「あっー！？」

息を呑む間もなく、その人影はまるでエレベーターから逃げるかのように、通路の方へと駆け出す。

通路は一本道しかない。もちろん、その先には総一たちが・・・。

??「きゃああっ！！？」

その内の一人は、総一たちが居る事に気がついたらとたん、駆け出していた足に猛烈にブレーキをかけ、反動で身体が後ろに倒れてしまう。

??「さ、咲実お姉ちゃん！？」

もう一方が、慌ててその人物の方を振り向く。

咲実「あ・・・、あ、あ・・・」

咲実と呼ばれた人物は、驚きのあまり硬直してしまっていた。

もう一方の、おそらくまだ子供と言える少女が、咲実と、総一たちの方を交互に見ながら、咲実に身を寄せてガダガタと震えていた。

その様子からすると、とても誘拐犯には見えない。恐らく誘拐された側の人物なのだろう。

ただ、その異様とも言える怯え、恐らく総一たちに対してのものなのだろうが、そこが今一つ理解できなかった。

総一「あ、えーと」

咲実「ひっ」

総一が一步前に出てきた事に咲実は驚き、か細い悲鳴を上げる。

対する総一は、咲実の顔を見た時、それが今横に居る桜姫にうり二つな事に気がついた。

総一「え・・・？」

もちろん当の桜姫はすぐ隣に居るから、赤の他人なのだろう。

桜姫「大丈夫、落ち着いて。ひどい事はしないから」

一瞬固まった総一を差し置いて、ゆっくりと優しい声で桜姫がなだめようとする。

咲実「いやっ！こないでっ！」

そう言いつつ後ずさりするものの、肝心のエレベーターは扉が閉じ

てしまい、逃げ道が完全に塞がれていた。

桜姫「私達も状況がよくわかってないの。たぶんあなた達と同じ立場だと思っただけど」

なおも優しい言葉で語りかける桜姫の声に、かりんが大声で割り込む。

かりん「ま、待って！優希さん！あ、あれ・・・」

かりんは再びさっきのパネルを指差す。

総一「エレベーターが再び上昇している・・・？」

通常なら、1階に降りた所で上の階にカーゴが移動するとは考えられない。と、すると誰かが上の階からボタンを押した、ということなのだろう。

咲実「えっ！！？」

幼い少女「そ、そんなぁ・・・」

視線をパネルの方に向けた2人は、その事実に関顔を蒼白にする。

総一「一体どういう・・・？」

考え込もうとする総一だったが、それを咲実が遮った。

咲実「も、もうダメ！もうおしまいよっ・・・」

甲高い声でそう叫ぶと、目に涙を浮かべ始めた。

誰かが後から追ってきていて、その誰かから、この2人は逃げ回っていたのだろうか？

状況としてはそれで合っているのだが、だからと言ってどうしていいかはとっさには思いつかない。

総一「ええとっ、うーんと」

引くべきか、待つべきか？

それにこの2人はどうする？共に連れて行く？でも、どうやって・・・？

この場をどう切り抜けていいか焦る総一だったが、

ぐぎゅるるる・・・

総一「・・・・・・・・」

緊迫した今の状況を完全に無視した、気の抜ける様な大きな音が、総一の、そしてその場に居る誰の耳にもそれが聞こえてきた。

その音の発信源は、固まっている総一のお腹から聞こえてきたものだ。

桜姫「あ、あんたはっ・・・・・・・・！」

この場にまるでそぐわない展開をした総一に、反射的にいつもの叱

り癖が出た桜姫。

桜姫「もうちょっと場の空気を読みなさいって、いつも言ってるでしょっ！」

そう言いながら、顔を総一に向けて前に突き出す。

総一「わ、悪い！ワザじゃないんだってば」

それに合わせて総一は背中を後ろに曲げて、両手を前に出して許しを懇願する。

かりん「・・・はあ」

緊張の糸がプツリと切れたのか、視線を下にして深いため息をつくかりん。

咲実「・・・」

幼い少女「・・・」

対する2人は、最初に総一たちと会った時とは別の意味で固まってしまった。

かれん「え、えっと、あのね」

すると今まで後ろで控えていたかりんの妹のかれんが、おずおずと声をかけてきた。

かれん「多分、私達が居るからこの人たちが動けないんだと思う。

だから私達がどいてあげればいいんじゃないかなあ・・・？」

かれんの提案に、しばし沈黙したものの、考えてる猶予はない。

桜姫「ひとまず、そうしましょうか」

総一「だな。えと、じゃあ俺達はもう行くから」

本来ならば、か弱そうな2人を放っておくのは尋常じゃないのかも
しれない。

しかし状況が状況だけに、今の彼女達にとってこれが一番良いのか
もしれない。

それが分かっているのか、総一たち4人はそそくさとその場を退散
した。

咲実「あ・・・」

幼い少女「い、いこっ！今のうちに！」

幼い少女はそう言って、咲実の腕を引っ張る。

咲実「あ、う、うん」

それにつられて咲実もようやく身を起こす。

そして総一たちに続いてその場を後にしたのだった。

・
・
・
・
・
・

かれこれ５分ほど移動しただろうか？エレベーターがあつた場所からある程度は距離をとっていた。

総一「も、もう大丈夫かな？」

そう判断した総一は、走る速度を遅くする。

かりん「そうみたいだね」

かりん達もそれに続き、同時にペースを落とす。

かれん「ふう〜っ」

かりんと手をつないでいたかれんは、少し息が上がったのか、何度か深呼吸を繰り返す。

かりん「大丈夫、かれん？」

かれん「すう〜、はあ〜。・・・うん、なんとか」

全く平気そうな姉のかりんと比べると、体力の有無に差があるのだから。

不思議そうな顔をしている総一に、桜姫がそつと耳打ちをしてきた。

桜姫「・・・かれんちゃん。不治の病に侵されて、ずっと病院暮らしなの」

なるほど、それなら納得がいく。桜姫がボランティアで親身に勉強を教えていた理由が分かった気がする。

総一「それにしても、一体何だったんだろうな？」

そう言つて他の5人全員に問いかけてみるが・・・。

5人!?

幼い少女「はあ、はあ・・・」

これは一体どうしたのか？総一たちに怯えていたはずの2人は、そのまま総一たちの後に続いてここまで走ってきていたのだ。

総一「え？ええっ??」

状況が理解出来ない総一だったが、それは咲実も同じだったようだ。

咲実「ちょ、ちょっと優希ちゃん！どうしてこの人たちと・・・！」

優希と呼ばれ、桜姫は一瞬反応したものの、咲実の視線から、その幼い少女の名を呼んだことが伺えた。

どうやら咲実はこの優希に腕を引っ張られ、そのままここまで来て

しまったようだ。

優希「ふう〜、うんっ！これでいいのっ！」

何度か息をついた後、まるで何かを悟ったかのように明るいついでに
う言い切った。

優希「だって怯える私達をどうこうせずに、そのままいつちゃうんだもん。きつと悪い人たちじゃないよぉ〜」

先程までの怯えた姿はどこへやら。この明るさが本来の彼女の姿なのだろう。

咲実「で、でもっ・・・！」

なおも反論しようとする咲実だったが、後の言葉が続かない。

優希「大丈夫、大丈夫っ」

優希と呼ばれた少女は、言葉どおりの意味あいもあるのだろうが、恐らく人を見る目があるのかもしれない、と思わせるほど確信に満ちた表情でニコニコと笑顔を振りまいている。

総一「え、えーと・・・」

どう話に割り込んでいいのか分からない総一だったが、このまま声を掛けないわけにはいかない。

総一「さっきも言ったけど、恐らく俺達と状況は同じだと思うんだから・・・」

迷ったが、ここはストレートに言うのがいいだろう、と判断した。

総一「俺達と一緒に来るかい？・・・出来れば何があったのか聞かせてくれると嬉しいんだけど」

優希「うんっ！」

その誘いに、優希は一つ返事で頷く。

咲実はいしばらく悩んでいたようだが、仕方なくといった感じでゆっくりと頷いた。

桜姫「うんうんっ！じゃあ、とりあえず近くの部屋まで行きましょ
うか？ここだとなんだし・・・」

そして総勢6名となった総一達一行は、比較的広い部屋へと足を
運んだのであった。

・
・
・
・
・

優希「そういえば、まだ名乗ってなかったよね？私の名前は優希、
色条優希！」

咲実「・・・姉妹咲実です」

元気いっぱいな声でそう名乗った幼い少女、優希に対し、いまだ総

一達のことをいぶかしんでいるのか、言葉を選んでいる咲実。その姿は対照的だった。

総一「俺の名は御剣総一。で、こっちが・・・」

桜姫「桜姫優希です。よろしくね」

丁寧にお辞儀をする桜姫に対して、幼い方の優希は驚きの声を挙げる。

優希「へええ、私とおんなじ名前なんだあ」

桜姫「ふふつ、そうね。ホント偶然だよね」

微笑む2人に対し、総一は唸りをあげる。

総一「んゝ、すると2人を呼ぶ時はどう呼べばいいんだろ？優希、って言うのとどっちがどっちだか・・・」

桜姫「えっ？そうね・・・」

桜姫はもう一人の優希に視線を向ける。

優希「苗字で呼ばれるのも変だしなあ。うーんと・・・」

かりん「『ちゃん』付けならいいんじゃないかな？」

そう提案したかりんに対し、優希は複雑な表情を見せる。

優希「そっか。そうだよな。でも皆から『ちゃん』付けて呼ばれて、

なんか子供扱いされてるみたいだなあ」

なんとなく不満そうな表情が逆に微笑ましくて、かりんの頬も自然と緩む。

かりん「ゴメンゴメン。えと、私は北条かりん。で、こっちが妹の・・」

かれん「妹のかれんです。よろしくね」

優希「うんっ 私の方こそよろしくねっ」

年が近いこともあって、自然と2人は笑顔に変わる。

優希「姉妹かあ。私は一人っ子だし、うらやましいなあ」

かれん「うん。私はこんなだし、とっても頼りになるの!」

いつも控えめな彼女にしては珍しく、語気が強い。それだけ姉の事を信頼している証なのだろう。

かれんのほめ言葉に対し、照れている姉のかりん。この建物に連れ去られてから今までで、これほど微笑ましい会話はなかった。

優希「いいなあ、私のパパとママはずっと留守だし。私もお姉ちゃん欲しいなあ」

他の人たちもそれに安心感が持てるのか、今の状況を忘れて、続々と会話に加わっている。

きつと今の残酷な現実から離れたいのだろう。総一も出来ることならばずっとこのまま話し込んでいたい気分だった。

優希「総一お兄ちゃんは兄弟っているの？」

総一「ん？いや、一人っ子だな」

桜姫「私もそうなの。私と総一の両親は家に居る事が少なくって。だから小さい頃から色々と助け合ったりしてたの」

優希「へええ」

かりん「小さい頃からラブラブだったんだ？」

するとかりんが悪戯っぽく茶化した。

総一「か、かりんっ！」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にする総一。

優希「それじゃあ、咲実お姉ちゃんは？」

咲実「え！？私ですか。私は、その・・・」

妙に歯切れが悪い。まだ総一達の事を疑っているのだろうか、と一瞬思ったのだが、どうやらそうではないようだ。

咲実「私には、妹がいました」

優希「いたって、もしかして・・・」

優希の問いに、咲実が首を横に振る。

咲実「私の両親は、私が小さい頃に事業に失敗して、家族がバラバラになってしまったんです・・・」

優希「あ・・・」

つまりは、生きているかどうかさえ分からない、ということなのだろう。

優希「ご、ごめんなさい」

気軽に聞いたことを、優希は悔やんだものの、咲実の沈んだ声はすぐに元に戻った。

咲実「いいんですよ。もう昔のことですし・・・」

どことなく居心地が悪くなったことを肌で感じた総一は、ふとすぐ隣に居る桜姫の方を向いたものの、桜姫はそれに気づかなかった。

桜姫「・・・？」

総一「ん？どした、優希」

どことなく考え込んでいる優希に疑問を持ち、問いかけてみると、ようやく反応した。

桜姫「さっきから何か引つかかって・・・。ううん、気のせいかも」

そう言って考えるのをやめた。

総一には何のことか判らなかったが、ちょうど区切りがよいので本題に移ることにした。

総一「それで、一体何があっただい？」

本当ならばこんな物騒な話はしたくはないのだが、そういう訳にもいかない。

咲実「えと・・・、この建物の1階の部屋で目覚めて、最初に優希ちゃんと出会ったんです」

咲実の話を総合するところだ。

咲実と優希は目覚めてからしばらくして、男の死体を発見したそうだった。

その男性はシャッターによって身体を分割されており、あまりの情景にしばらく身体を震わせていたそうだった。

それから、その場を逃げるようにして2階への階段へと上ったそうだった。

そして2階でエレベーターを発見し、試しに6階へと一気に上ったのだが。

咲実「どうしてなのかは分かりませんが、通路のあちこちにシャッターみたいなのが下りてまして、結局どこも通れなかったんです」

そのシャッターは地図上には表示されておらず、仕方なくエレベーターに戻るうとしたところで、突然謎の男の襲撃にあったそうだ。

総一「謎の男？」

咲実「はい・・・、なんというか、服装が派手で頭に帽子を被っている、鋭い目つきの人でした」

咲実はそこまで言うと、沈痛な表情に変わる。

咲実「なんとか必死に逃げ回って、エレベーターに乗ることが出来たんですけど・・・」

その時の記憶が蘇ったからなのだろう。優希がギュッと咲実の身体にしがみつく。

咲実もそれに答えるかのように優希の手を握った。

総一「そっか・・・」

どう声を掛けていいか迷ったものの、言おうとしている事は既に決まっていた。

桜姫「私達と一緒に行きましょ！このまま放っておく事なんて出来ない」

どうやら皆、同じ気持ちらしく、一様に頷いていた。

咲実「・・・いいんですか？」

おずおずと尋ねる咲実に対し、総一は大きく頷く。

優希「よかったね、咲実お姉ちゃん！」

頼れる人達が居ることに、素直に嬉しいのだろう。

桜姫「すると、残りの問題はこの首輪、ってコトになるのかな、総一？」

そう言つて桜姫は、自身の首に巻かれた首輪に手を触れる。

総一「そうだな・・・。死体があつたつてことは、もうこれは冗談じゃないつてことだ」

桜姫「ルールは幸い、といつていいか分からないけど、一応把握してるし。首輪を外す為には解除条件を満たさなければいけないんだけど・・・」

総一「あー、俺はその時コンクリの壁を掘つてたしな・・・。たしか俺のPDAはクラブの・・・」

そこまで話が進んだ時、かりんが慌てて話を遮った。

かりん「ま、待って！？そんなの出鱈目だよ！？真に受ける必要ないつて！」

総一「え・・・？」

あからさま過ぎるほどの否定に、総一は首をひねる。

総一「もちろん、これらがすべて本当って保障はどこにもないけど、かといって全て嘘って決め付ける訳にもいかないだろ・・・？」

総一の言い分はもつともなのだが、かりんはそれでも首を横に振る。

かれん「お姉ちゃん・・・」

かりん「いいからっ！ダメなの！ホラ、早く出口見つけよっ」

慌てて立ち上がるかりんに引っ張られる形で、かれんも続いて立ち上がった。

かれん「あっ・・・」

その時かれんが、引っ張られた勢いで右手に持っていたPDAを誤って落としてしまう。

かりん「ああっ！」

かりんは慌ててそれを拾おうとするが、壊れずに済んだそれは、総一達の眼前にさらけ出す結果となった。

総一「ハートの、クイーン」

かりん「くうっ・・・！」

かりんは思わず齒軋りをした。

桜姫「たしか、クイーンはゲーム開始から73時間経過した時点での生存だったはず。それなら解除出来るかもしれないね」

そう言うものの、かりんの表情は引きつったままだ。

桜姫には、それに思い当たることがあった。

そっか。きっとかりんちゃんはエースの存在を恐れているのね。。。

エースの人間が居れば、いつか必ず妹の命を狙ってくる。それを心配してのことだろう。

しかし、気づいていないのか総一の解釈は違ったようだ。

総一「それなら何も問題ないじゃないか。・・・俺のPDAは『2』。首輪を解除する為にはJOKERを探し出して破壊しなくちゃいけない。優希は？」

桜姫「私のは『6』だから、JOKERを5回使用する事」

総一「って事は、JOKERを5回使ってから破壊すればいい、と言う事になるのか？」

桜姫「うん、そう」

総一「ええと、優希、ちゃん。・・・なんか違和感ある呼び方だけど、どうなんだい？」

優希「私はコレ、クラブの『4』！」

そう言つて優希は自身のPDAを見える様に前に出す。

桜姫「『4』ってことは、ええと、3つの首輪の取得ね」

優希「えーと、ということとは？」

桜姫「私と総一、あとかれんちゃんの首輪が外れれば、優希ちゃんの首輪も外れるってコト」

総一「今のところ、相対する解除条件はないな……。咲実さんは？」

咲実「私、ですか……。私は……」

とたんに口ごもる咲実。言つていいべきかどうか迷っているのだろう。

それをかりんは代弁するかの様にはつきりと口にした。

かりん「私は教えたくないっ！」

そう言い放ち、そのままスタスタとドアの方へと向かつてしまう。

かれん「お、お姉ちゃん！」

総一「あ、おい！」

そのまま部屋を後にしようとするかりん達を放っておくわけにもいかず、仕方なく総一達も2人についていったのだった。

• • •
• •
• •
•
•

第7話「緊迫」（後書き）

なぜか条件を明かしたからないかりん。彼女は一体何を思ってたそんな行動に出たのでしょうか。

次回は第8話「突きつけられた現実」ディーラーのシナリオは、いよいよ現実のものとなってプレイヤー達を追い詰めていくのでした。乞うご期待

第8話「突きつけられた現実」

第8話「突きつけられた現実」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」	PDA	状態	解除
条件	(2)	健康	JO
御剣 総一	(6)	健康	J O K E
K E R 破壊	(?)	健康	
桜姫 優希	(Q)	健康	2日と2
R 5 回使用	(7)	健康	首輪 3
北条 かりん	(K)	健康	全員と
??	(?)	健康	
北条 かれん	(?)	健康	
3 時間生存	(?)	健康	
色条 優希	(?)	健康	
個人手	(?)	健康	
姫萩 咲実	(?)	健康	
?			
「グループB」			
矢幡 麗佳	(7)	??	
の遭遇	(K)	??	P D A 5
葉月 克己	(?)	??	
個人手	(?)	??	
高山 浩太	(?)	??	
?	(?)	??	
綺堂 渚	(?)	??	

？

手塚 義光

(？)

？？

？

？

長沢 勇治
殺し

(9)

死亡

皆

総一以下6人は、ひとまず2階への階段へと足を運んでいた。

総一が先行して階段を上ったものの、結局誰とも遭遇する事なく、2階へと進むことが出来ていた。

今目指しているのは3階への階段である。

その間、結局かりんと咲実の解除条件を聞くことが出来なかったが、当人達が上の階に進むことに異議がなかった為、ひとまずその方針に落ち着いた。

総一「エレベーターが使えないってのはやっぱりキツイな」

桜姫「うん。でもしょうがないよ」

咲実達の証言から、エレベーターを使って6階へと進んだとしても、地図上にはないシャッターで道を塞がれている事はわかつている。

とすれば、他の階でも同様になっている可能性は十分にあった。

それにもしそんな状況で敵に襲われでもしたら、今度こそ命はないかもしれない。

咲実「でも、階段でも同じ待ち伏せがあったりしないのでしょうか・
・・？」

咲実は不安そうな表情で、身体をブルツと震わせる。一度襲われた身だから当然ではある。

総一「だからと言って、このままじっとしているわけにもいかない。警戒だけは怠らないようにしないと」

総一はそう言って右手に持っているスタンガンを強く握り締める。

総一たちは階段へと行く途中、いくつかの部屋を調べていた。

最初の部屋で見つけたのは、総一の持つスタンガン。

護身用にと手に取った総一だったが、その次の部屋に入った時には心底驚かされた。

なにせ斧だの棍棒だの、果ては大きな鉈まで部屋中に置かれていたからだ。他にも、かつて総一が使っていたツルハシと同じ物が数本置かれてあった。

あの時は何気なしに手に取った総一ではあったが、さすがにその異様な情景を前にしては、それすら手に取ろうという発想は出てこな

かった。

結局武器らしい武器を持っているのは総一のスタンガンと桜姫の小さいの手斧。それとかりんの小型の果物ナイフだけだった。

咲実が武器を持つこと自体に抵抗があるらしく、結局何も持たなかった。

幼い優希とかれんには武器は持たせられないと、大きい方の優希とかりんがそれぞれ反対した。

かりん「こんなの、使わなきゃいけないなんて・・・」

かりんはここに来る前にも果物ナイフを使ったことはある。もちろんそれは人に対してではなく、ずっと病院暮らしであるかれんに対して、りんごやその他の果物を切って食べさせてあげる為に使っていた。

だからだろうか。かろうじて果物ナイフに対しては抵抗が少なかったのだろう。

総一「・・・そろそろ3階の階段に着くぞ」

その一言で、場の空気が張り詰める。そしてそれを暗示するかのごとく、その先に異変が起こっていることに気がついた。

かりん「明かりが、消えてる・・・」

階段が見えてくるはずの通路の先は、明かりといえる明かりがまるでなく、薄暗い情景を醸し出していた。

優希「あ、ホラ見て！けいこうとーが割れてる」

背の低い優希は、首を大きくもたげて天井を見上げる。そこには蛍光灯の白いガラスが、金具の先端にかすかに残っているのがうつすらと見える。

明かりがあるはずが無い、いや、無くされていると言う事は・・・？

桜姫「誰かが割った、と見るべきかな？」

総一「恐らくは。けど、このまま立ち往生しているわけにもいかないだろ？俺が先に行つて、誰か居ないかどうか確かめる」

桜姫「え、でも！」

総一の提案に、思わず止めようとする桜姫だったが、総一はポンと桜姫の肩に手を添えた。

総一「危なくなつたらすぐ引き返すから大丈夫だつて」

桜姫「総一は樂觀的すぎるのよ。どんな危険が潜んでいるか・・・」

不安そうな表情を浮かべる桜姫だったが、総一はニツコリと笑つて余裕を見せる。

総一「なに、こう見えて逃げ足だけは速いからな。知ってるだろ？」

桜姫「も、もうっ」

桜姫の心配をよそに、総一は先行して階段前のホールを調べる。

桜姫「気をつけてね・・・」

ポツリとそう漏らす桜姫。ここは総一を信じることにしたようだ。

ホールといっても1階での階段と違い、他の通路とほとんど変わらないほどの広さだった。どうやら階ごとに所々構造が違うようだ。

総一「誰もいないか、・・・ん？」

ホールの端の方にポツンと置かれたドラム缶が目に入った。

総一「これは・・・、中身は、カラか」

軽く両手で押してみると、意外なほどあっさりとした。どうやら中身は全くといっていいほど入っていないようだった。

総一「なんでこんなものが・・・？」

疑問に思う総一ではあったが、さしあたっての危険はないと判断した総一は、後ろを向いて手招きする。

他の皆がそろそろと出てくるのを確認した後、総一は先行して階段を上りだす。

階段の部分も明かりは無くされていた。見落としがないように慎重

に慎重に、一步步階段を上っていく。そして半分ほど上ったところで、その存在に気づいた。

階段の上に見える、通路の真横から突如現れた巨大な物体。それは暗がりでよく見えなかったが、先ほど総一が目撃したドラム缶と同様の物に思えた。

それはまるで意思が働いているかのごとく通路を転がり、そして階段の方に・・・！

総一「に、逃げろっつ！！」

総一の叫び声と共に、それは急斜面といえる階段へと落下してきた。

ガランガランガラン！！

総一「うわっつと！」

総一はとっさにその場にしゃがんだ。というより、下りようとして足を滑らせ、そのまま段の上に身体を激突させた。

その上をドラム缶が勢いよく通り過ぎていく。

桜姫「危ないっ！？」

階段を上り始めようとした桜姫は、そのすぐ隣に居る優希を庇って共に地面に身を伏せる。

優希「きゃあっ！」

更に勢いづいたドラム缶は強く跳ね上がり、そのまま桜姫達のはるか上を通り過ぎる。

かりん「うわわっ!？」

他の3人はまだ階段を上っていなかった為、横に避けてなんとか難を逃れた。

総一「ひええ」

段に身体をぶつけた痛みと、ドラム缶が通り過ぎる瞬間の恐怖に、思わずか細い悲鳴を挙げる総一だったが、階段の上に人が居る事に気がついて、とっさに顔をもたげる。

手塚「やれやれ、まるで成果がなかったか。運のいいヤツラだぜ」

総一「なっつ!？」

暗闇に慣れてきた総一の目に映ったのは、チンピラ風の男の姿だった。

その男は、かつて咲実から聞いていた人物像にこれ以上ないほど合致していた。

そいつがドラム缶を使って奇襲をかけてきたのだろう。

桜姫「総一っつ!！」

総一「譴茲蠕茲紡寮?を立て直した桜姫は、手塚の仕業を知るやいな

や、手元に持っていた手斧を構え、そのまま投げつけた。

ビュン！

それは扇状の線を描き、そのまま手塚の元へと向かった。

手塚「よっと」

対する手塚も軽い身のこなしでそれをあっさりと避ける。

しかしながら、その表情は意外そうな顔をしていた。

手塚「この男以外は女子供だと鷹を括っていたが。なかなかやるな、あの女」

自身肝不利を察知し、さっさとその場を後にする。

桜姫「待ちなさいっ！」

手塚「機会があればまた会おうぜ！」

そついい残し、その男は姿を消した。

その事を確認した総一はようやく起き上がり、桜姫達の無事を確認する。

総一「大丈夫か！？」

総一は階段を下りて桜姫達の元へと駆け寄る。

桜姫「う、うん、大丈夫。総一も怪我はないみたいね」

誰も怪我がない事を確認した2人はホッとため息をつく。

優希「あいたたた・・・」

頭をさすりながら、優希もようやく起き上がる。

総一「大丈夫か？優希」

ちゃん付けする事をすっかり忘れ、そのまま手を差し伸べる。

優希「うゝ、頭打ったあ」

総一は優希の頭をさすりながら、他のメンバーに目配せする。

かりん達はその意味は悟ったらしく、コクリと頷いて階段を上っていったのだった。

・

・

・

一方その頃、2階の階段で待ち構えていたはずの麗佳達は、今3階の部屋の一室に陣取っていた。そこに敷かれた毛布の上に寝そべっている2人。

渚「真奈美・・・」

渚が寝そべっているその隣で毛布に包まれているのは、他ならぬ真

奈美の姿。そう。渚は親友の真奈美と合流する事が出来たのだった。

真奈美「すうすう」

当人は親友に会えた喜びと心労からか、今は深い眠りについていた。

無事でよかった。

それは渚の嘘偽りのない想いだった。

真奈美と合流した時、真奈美の泣き喚く様子が思い出された。

その時は渚自身も喜びのあまり涙したのだが、その時の話では真奈美は最初に目覚めてからしばらく一人で建物内をさまよっていたらしい。

すると2人組と遭遇し、その場に転がる男性の死体が目に入って、慌ててその場を逃げ出したとのこと。

その2人組とは、葉月と麗佳の事である。

そして彼方此方している内に2階の階段へ、という流れであった。

真奈美「うう・・・」

うなされているのだろうか？軽く唸る声を挙げる。

渚「真奈美・・・」

部屋の外の見張りは高山達3人が行ってくれている。気を利かせて、親友である2人を一緒に休ませることにしたのだ。

本来ならば渚も休むべきなのだろうが、真奈美の事がどうしても気にかかって、眠りにつけないのであった。

渚「真奈美、一緒にこのふざけたゲームから抜け出そうね」

それは渚の密かな願いであった。

・

・

・

高山「すると、24時間行動を共にした人物の生存。それが君の解除条件ということになるわけだな」

休息を十分にとり、再び行動を開始する前の話し合いで、高山はこう切り返した。

真奈美「は、はいっ」

対する真奈美は、緊張しきった面持ちで自身のPDAの画面を前に出す。

そこにはダイヤの柄と共に、『J』の文字が刻み込まれていた。

渚「大丈夫よ、真奈美。この人たちは貴方を探すために協力してくれたんだから」

渚は努めて明るくそう振舞った。少しでも緊張を和らげようとする渚の心遣いなのだろう。

真奈美「う、うん、分かってるんだけどお・・・」

頭では分かっているものの、感情がついてこない。だからつい尻込みしてしまうという真奈美の心情は、渚にも十分分かっていた。

以前は互いにPDAの解除条件を明かすことを躊躇ったものの、やはりそれでは方針を立てられないとの事で、結局明かすことにしたのだ。

高山「条件が相対する可能性は十分にあるが、このまま内密にしておいてもラチがあかん。・・・やむを得ないだろう」

高山はしぶしぶと言った感じだったが、なんとか同意してくれた。少なくとも、葉月・麗佳コンビと渚・真奈美コンビに関しては、たとえ条件が相対してもすぐに決裂となる危険は少ないだろう、との高山の目測だった。

高山「俺のPDAは『5』だ。首輪を解除する為には指定されたポイント24箇所をすべて回らなくてはならん」

葉月「え！？とすると・・・」

葉月は言葉を続けようとするが、高山が先にその問いに答えた。

高山「問題ない。1階と2階のチェックポイントは既に通過している」

麗佳「そ、そうなのですか。・・・いつの間に」

驚く葉月をよそに、高山は涼しい顔だ。

高山「簡単なことだ。4人になってから先頭を歩いていたのは俺だ。そうすれば余程目的地から外れでもしない限り、誘導する事は容易だ」

至極あつさりとそう答える高山に対し、他の人たちは啞然とする。言われてみれば2度ほど行き止まりに差し掛かって引き返した、なんていう出来事があったことを思い出した。

葉月「ま、まあ、問題はないし、いいじゃないか」

葉月はそう言うものの、抜け目ない高山の行動に、味方である筈なのについて警戒してしまう。

高山「それで、矢幡が『F』葉月が『K』。綺堂、お前は？」

渚「あ、はい。私のPDAはコレです」

渚は真奈美と同じくPDAを前に出す。そこに刻まれていた数字は『10』だった。

高山「『10』か」

渚「ええ。私の首輪を解除する為には5つの首輪を作動させる必要があります」

高山「なるほどな。ふむ・・・」

高山は頷きつつ、一本の煙草を取り出してライターで火をつける。

麗佳「話を総合すると・・・、まず私の首輪を外す為に他の参加者に遭遇して」

高山「それと平行して俺の首輪、すなわち24箇所のチェックポイントをすべて通過する」

葉月「そして真奈美くんが2日と23時間後に首輪が外れるだろうから、これで3人」

しかし、歯切れのよい言葉の羅列も、ここでプツリと途絶えてしまう。

麗佳「問題は葉月さんの『K』と渚さんの『10』ね・・・」

まず葉月に関しては、この時点で使えるPDAは3台。渚のPDAを借りても4台。どうしてもあと1台足りないのである。

仮にこれをクリアして葉月の首輪を外す事が出来れば、外れた首輪は計4つ。

ただし、真奈美の首輪は2日と23時間が経過しないと外れない。つまり渚の首輪の解除に使用できるのは3つ。残り2つをどうにかして作動させなくてはならない。

すなわち最低でもあと2人のプレイヤーの助力が必要になるわけなのだ。

煙草をふかしたまま、変わらぬ表情で高山が提案する。

高山「ふむ……。矢幡の首輪の解除条件は他のプレイヤーとの遭遇だ。その際に誰かに協力を求める。しかないだろうな」

誰かを襲って強制的に首輪を作動させる。という台詞が出かった高山だったが、それは引っ込めておいた。

麗佳「そうですね……」

ともあれ、あらかた方針は決まった。高山のチェックポイントの件もある為、あまり悠長にはしていられない。

高山「さて、行くとするか」

そう言って高山は、吸っていた煙草を地面に落としたのであった。

・
・
・
・
・

手塚「ったく。失敗したぜえ……」

通路の角に身を潜める手塚は、自身のしでかした失敗に思わず舌打ちする。

手塚が角から様子を伺う先には、数人の人影。その先頭に立つ人物は、今までに見た連中とは大きく異なっていた。

高山「観念したらどうだ。青年」

対する高山も、静かな威圧を放っていた。

麗佳「あ、あの・・・」

おずおずと後ろから声を掛けようとする麗佳だったが、高山がそれを後ろ手で制す。

高山「あの男は只者ではない。油断していると付け込まれるだろう」

低く鋭い声に、麗佳もそれ以上声が出ない。それを確認した高山は、再び前方に集中する。

高山「わかっているハズだろう？その先は行き止まりだということ」

高山の言うとおりである。この2人が出会ったのはほんの偶然に過ぎなかった。

手塚が部屋から出ようとドアを開いた所、そのドアに隠れる形で高山達が通路を歩いてきたのだ。

とっさに手塚は対抗しようとしたのだが、高山の風貌と片手に持っている上物の日本刀を目撃し、只者ではないと瞬時に悟り、その場を逃げ出した、まではよかったのだが。

急な展開に、逃げ出した後の事まではさしもの手塚でも考えきれなかった。

拳句、自ら袋小路に飛び込む失態をしたのであった。

手塚「厄介なことになりやがったなあ・・・」

余裕ぶっているものの、簡単には逃がしてくれない事はよく理解していた。

高山「安心しろ。何もお前の命を奪おうというわけではない。・・・ただPDAを一時期貸してくれるだけでいい」

葉月「高山さん・・・」

それは純粹に葉月の為の行為であった。

麗佳の解除条件である全員との遭遇は、厳密に言えば自身より半径1メートル以内にその人物が介入する事である。

しかし幸運なことに、手塚と高山が鉢合わせになった際に、その条件は満たされていた。

あとはPDAを1つ拝借して、葉月の首輪を外せば、今後の展開がずっと楽なものになるはずだ。

手塚「それを信用しろってか？PDAを明け渡した瞬間にその日本刀でバツサリやられちゃ、たまんねえぜ！」

高山「信用するか否かはお前しだいだ。このまま交渉決裂となるよりは、幾分かお前に利がある様に思えるが？」

そう言い合いながら、2人は一步も動こうとしない。

手塚「それはどうだかな？」

手塚はあつさり受け流そうとするが、高山には通じない。

高山「隙を突いて攻撃しようとしても無駄だ。仮にそうなったとしても、俺を相手にしている内はお前が他の連中に隙を見せることになる」

そう切り替えされた手塚は、眉間にしわを寄せた。

手塚「・・・よくわかってらっしゃること。やっぱアンタは只モンじゃねえな」

観念したのか、手塚は角から身を乗り出す形で両手を挙げる。

高山「賢明な判断だ」

そう言いつつも、高山は構えを解こうとしない。

手塚「やれやれ、ホント抜け目ねえな」

言葉通りやれやれと言わんばかりの面持ちで、両手を振りかざして降参の意を示す。

手塚「で？あんたらにPDAを渡して俺に何の得があるってんだ？」

強引に交渉の場に引き出した高山は、やはり無表情のまま返答を返

す。

高山「お前がPDAを貸してもらえば、こちらのメンバーの一人が首輪を外せる。その者のPDAをお前に渡そう。・・・構わんな？」

最後の確認の意は、手塚に対してでなく、葉月に対してのものだ。

葉月「ああ、こちらは問題ない」

葉月は頷くと、自身のPDAを取り出した。

手塚は暫く考えるそぶりを見せていたが、

手塚「わあったよ。・・・幸い俺はPDAを2つ持っている。その内の俺自身のPDAじゃない方を貸してやる」

手塚はそう言い、一つのPDAを取り出して、通路の角から見える位置に置いた。

手塚「俺は少し奥の方でお前らがトンスラこかねえか見張ってるぜ。・・・もしそのPDAを持ち逃げした時にゃ、俺は死に物狂いでそれを取り返すぜ」

手塚のその言い分は真実だろう。なぜなら、交渉を破談する連中相手に、何を言ってもムダだから。そして袋小路に陥っている以上、戦わなければ逃げられない。例え不利な状況でも、手塚にはそうせざるを得ないのだ。

高山「・・・いいだろう。俺がとりに行く」

高山は至極当たり前の様に言うのだが、さすがに危険だと思ったのか、葉月がそれを止める。

葉月「待ってくれ！気持ちはいがたいのだが、高山さんにそこまではさせられない。これは僕の問題だから、ここは僕に行かせてもらえないだろうか？」

麗佳「葉月さんっ！？」

驚きの声を挙げる麗佳だったが、それは高山も同じ様だった。

高山「危険すぎるぞ。いいのか？」

葉月「構わない。それに、もしこの間に麗佳君達の後ろから誰かが奇襲を掛けないとも限らないから、高山さんはそちらの警戒を頼みたい」

麗佳「葉月さん！ダメですっ！それなら私がっ・・・！」

大声でまくし立てる麗佳に対し、葉月は優しく微笑んだ。

葉月「いいんだ。こういう時は大人である僕の役目だ。それに、君を危険に晒したら、君の両親になんと言えいいのか」

麗佳「葉月さん・・・」

娘を持つ親、葉月さんにとっては、その気持ちというのは痛いほど分かるのだろう。それを知ってか、麗佳は何も言わなかった。

葉月は恐る恐る近づいて、そのPDAを手を取った。

どうやら手塚は手を出す気がないので、何も仕掛けてはこなかった。

手に取ったPDAを、自身の首輪に差し込んだ。

軽い電子音が響き、PDAの端子を抜き取る。

葉月「・・・ふう」

無事に終えた事に、思わず安堵が浮かぶ。

手塚「んじゃあ、そのPDAを地面において、さっさと立ち去ってくれ」

葉月「わかった」

葉月はじわじわと後退し、高山たちの元へと戻っていった。

高山「ふむ」

高山は頷くと、自身のPDAを取り出して葉月の首輪に差し込む。

再び軽い電子音が通路に響いた。

葉月「ありがとう」

そしてそれに続いて渚、真奈美、そして麗佳のPDAを受け取り、自身の首輪に差し込む。

麗佳「葉月さん・・・」

葉月「すまないね。僕だけ先に首輪を外してしまつて」

麗佳「いいんですよ」

葉月「娘を助けるのに、僕が死んでしまつては意味がないからね」

葉月の目にはいつしか涙が浮かんでいた。早く娘も解放してやりたい。その想いがあふれたのだ。

葉月「あとは、僕のPDAを差し込んで、これで首輪は外れるはずだ」

そしてPDAを首輪に差し込む。

葉月「よし！これで・・・」

軽い電子音と共に、けたたましいブザーが鳴り出す。

手塚「首輪は外れたか？ならさつさとPDAをこっちに渡して」

遠くから大声で呼びかける手塚以上の声が、その場で沸き起こつた。

『あなたは首輪の解除条件を満たすことが出来ませんでした。 15秒後にペナルティが施行されます』

それは首輪の解除を知らせるものではなかった。

葉月「ば、バカな！！？な、なんで・・・！」

驚愕の声を挙げたのは葉月だけではない。その場に居合わせたすべての人が、驚きの表情と声を挙げた。

麗佳「ど・・・、どうして・・・？」

その疑問に答えるものはいない。葉月は顔面蒼白のまま、ただ立ち尽くしている。

その間にも、けたたましいブザーと合成音声は流れ続けている。

有り得ない展開に、頭が真っ白の葉月だったが、聞こえてきた合成音声

が、辛うじて葉月の思考を取り戻させた。

葉月「！い、いかんっ！？僕から離れるんだ！！」

麗佳「え・・・？」

だが誰も動こうとしない。やむを得ず葉月は手塚の居る方へと走り出す。

手塚「お、オイオイ、コラ！なんでこっちに来るんだよ！」

さしもの手塚も驚いたが、それと同時に事が起こってしまった。

シュッ

その時、通路の角から一本の針らしきものが飛んできた。それは誰も針だと認識できないまま、葉月の身体へと突き刺さる。

一瞬何が起こったかは、誰も理解できなかった。葉月自身さえも。

それに気づいたのは、葉月が苦しみの声を挙げてからだった。

葉月「うおおっ!!ぐおおっ・・・」

麗佳「は、葉月さんつつ!!?」

とたんに身体が痙攣し、自由に動かすことが出来なくなってしまい、力なくその場に崩れ去る。

誰も知る由もないが、それは強力な毒が塗られた針だった。派手さはないものの、その毒が体内に入った瞬間、その呪縛に逃れることは叶わない。

あっという間だった。呼吸することもかなわず、悲鳴を上げることも許されず、苦悶の表情を浮かべた葉月は、そのまま動かなくなってしまった。

麗佳「こ・・・こんな、ことって・・・!!」

麗佳はその場に崩れ落ち、今起こった現実には、まるで金縛りにあったかのごとくピクリとも動かなくなってしまった。

その目に映るそれは、もう物言わぬ死体と化してしまったのだ。

葉月は二度と娘の顔を見ることなく、この世を去ったのだった。

• • •
• •
• •
•
•

第8話「突きつけられた現実」（後書き）

突然の葉月の死。それはこのゲームの本当の恐ろしさを知らしめる結果となってしまうたのです。

次回は第9話「乖離」残された麗佳達は果たしてどうなるのか？そして葉月の死の真相は・・・？乞うご期待

第9話「乖離」

第9話「乖離」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」

PDA

状態

解除条件

御剣 総一

(2)

健康

JOKER破壊

桜姫 優希

(6)

健康

JO

KER5回使用

北条 かりん

(?)

健康

??

北条 かれん

(Q)

健康

2日

と23時間生存

色条 優希

(4)

健康

首輪

3個収集

姫萩 咲実

(?)

健康

??

「グループB」

矢幡 麗佳

(7)

健康

全員

との遭遇

高山 浩太

(5)

健康

チェック

ポイント通過

綺堂 渚

(10)

健康

首輪

5個作動

麻生 真奈美

(J)

健康

パートナー

Iの生存

手塚 義光

(?)

健康

??

葉月 克弘

(K)

死亡

PDA

5個収集

長沢 勇治

(9)

死亡

皆殺し

苦悶の表情を浮かべたまま絶命した葉月を前に、その場に居合わせ
た5人は、ただただ呆然としていた。

高山「……」

手塚「……」

誰も何も発しようとしな。そのままどれ位の時がすぎたの
だろうか？

ようやくのことで正気を取り戻したのは、手塚だった。

手塚「お、オイ、死んだのか・・・？」

その一言を搾り出すのがやっとだった。

だがそれが引き金となったのか、とたんに真奈美が大声で悲鳴を上げる。

真奈美「い、いやああああああっ！！！」

彼女の悲鳴。それはこの場に居る残された者、そして麗佳の気持ちを代弁していた。

高山「・・・なぜだ？」

さすがの高山も顔をしかめる。

渚「な、何か手順を間違えた、とか・・・？」

高山「か、もしくはそもそもルール自体が偽りだったか・・・？」

必死で思考を取り戻そうと、自問自答している時、その場にまるで似つかわしくない笑いが聞こえてきた。

手塚「クツクツク、もう一つあるんじゃないか？」

高山「何だと？」

ようやく本来の調子を取り戻した手塚は、かつて葉月だったものを前にして、あざ笑う表情を見せた。

手塚「たしかにこのオッサンはPDAをきちんと5つ差し込んでいた。だからルールやら手順やらがどうこういう問題の可能性は薄い。つてコトはだ」

そしてこの場が一瞬にして凍りつくような一言を発した。

手塚「お前達が渡したPDAの中のJOKERが含まれていたってのはどうだ？」

麗佳「なっ!？」

麗佳にも、今この目の前に居る男の言いたいことが分かった。

手塚「誰かがJOKERを自身のPDAだと偽って、オッサンを騙したのさ。こうなることを予想してな」

その瞬間、麗佳達の間にならぬ雰囲気が漂うのを肌で感じた。

麗佳「そんな、まさか・・・」

高山「それがお前だという可能性もあるな」

高山が手塚に向けて名指しするものの、手塚は動じない。

手塚「あのな！今俺はお前らに追い詰められてるって状況は分かっているハズだろ？そんな状況で騙すつもりなら、今までずっとここでボサツと突っ立ってるわけねえだろ」

高山「む・・・」

手塚の言い分の方が一理ある事は明確だった。葉月に気をとられている高山たちに不意打ちを食らわせ、その場を逃げ出す事も恐らくは可能だったからだ。

その時突然、渚が真奈美の手を掴んで、走り出した。

真奈美「な、渚っ！？」

渚「真奈美！逃げるわよっ！」

渚はまるで麗佳達から逃げるかの様にその場を後にした。

それに続いて高山も、ゆっくりとした足取りでその場を後にしようとする。

麗佳「た、高山、さん・・・？」

高山「俺も行かせてもらう。・・・一つ言うておく」

高山は足を止め、一度後ろを振り返る。

高山「JOKERを使って葉月を騙した人物。一番疑わしいのは、矢幡、お前だ」

麗佳「え・・・？」

あまりにも意外な事を聞いた麗佳は、顔を引きつらせる。

高山「なぜなら葉月は、お前を殺さなければ娘は助からない。ならば、逆に『葉月を殺さなければ、自身が殺される』と考えるだろう」

麗佳「・・・！！」

それはかつて麗佳が初めて葉月と出会った時に思った事。その時は葉月の娘の事は知らされておらず、ただ目の前に居る人物が誘拐犯では？という疑いを抱いていたことは紛れもない事実だ。

だが葉月の事を信頼し始めた時から、そのような考えは薄らいでいた。それだけに周りにそう思われていた事にショックを受けた。

高山「もちろん確証がある訳ではない。だが、客観的に見て普通はそう考える。綺堂はイチ早くそれに気づいたのだろう」

そう言い捨て、高山はゆっくりとした足取りでその場を後にする。後ろを向いているが、その動きには隙がない。

麗佳「そ、そんな・・・！」

葉月の突然の死。疑われた自分。そして失われた絆。

言葉では言い表せない絶望が、麗佳を蝕んだ。

手塚「さてと。一通り絶望した所で、俺にちよいと付き合ってくんねえかな？」

通路の角から出てきた手塚の手には、小ぶりの槍が握られていた。

・
・
・
・
・
・

真奈美「な、渚あゝ」

渚に引つ張られる形で腕を引つ張られている真奈美は、その場にまるで似つかわしくない間延びのある口調で、その名を呼んだ。

渚「このままあの連中から離れるわよ！」

渚は後ろを振り返る。だが走っているその足が止まることはなかった。

真奈美「ど、どうして？」

渚「わかってるでしょ！あの連中の誰かが葉月さんを殺した。．．．今までは同じ境遇の人たちが共にいて良かったと思ってたけど、このゲームの特性を考えれば、それは間違いだったってコト！」

渚は真奈美にそう言い聞かせるように、矢継ぎ早にそう説明する。

渚「誰かは分からないけど、あの場に留まっていれば私たちも．．．！」

危険に晒されて命を落とす。そう考えたのだ。

真奈美「．．．誰かが、J O K E Rを．．．使って．．．」

渚「そうよ！」

途切れ途切れに現実を受け入れようとする真奈美に対し、そう言い切る渚。

真奈美「それは・・・」

その先は口には出来なかった。いや、そう考えている自分を愚かだと思ったのかもしれない。

それは、もしかして渚がやったんじゃないの・・・？

渚と真奈美は小学生からの一番の親友だった。だから本来はこんな事は思いつきもしなかっただろう。

しかし真奈美は知っている。渚の家族が今、窮地に陥っている事を。

事業に失敗し、莫大な借金を負ってしまった渚の家族は、今崩壊寸前だった。

なんとか食い止めようと、渚は真奈美と共にバイトの日々を送り、稼いだお金をすべて家族の為に使っていたぐらいだ。

それでも渚は弱音一つ吐かずに、自分に出来ることを精一杯やっている。

その事をよく知っている真奈美だからこそ、そんな疑念が浮かんでしまったのだ。

渚「真奈美？」

真奈美「え！？あ、うん、なあに？」

渚に呼びかけられ、その思考は途切れる。疑念を言葉で綴ったことも忘れ、真奈美は渚の後についていった。

しかし、真奈美に刺さった小さなトゲは、確かに存在していた。そしてその疑念がどんどん大きくなる事を、本人は気づいていなかった。

・
・
・
・
・
・

桜姫「やっと4階ね」

重い足取りで最後の段を踏み出した桜姫は、そのまま一息つく。

総一「ああ・・・」

ゲーム開始から既に32時間が経過していた。3階への階段で起こったチンピラ風の男の襲撃があつたせい、警戒しつつもなるべく早い足取りで4階へと進んでいた。

かりん「さ、さすがにしんどいね・・・」

3階に来るまでは何度か休息をとっていたものの、襲撃があつてからは一度も休んでいなかった。その影響で体力も気力も限界に近かった。襲撃を行った男と同じ階に居ると考えるだけで、休む気にならなかったのだ。

もちろんその男はいずれここにやってくる。いや、もう既に来ているのかもしれない。だが誰もその考えを口にはしなかった。

優希「も、もうダメえ〜。疲れたよお・・・」

優希は両膝を折り、その場にへたれ込む。

総一「いい加減どこかで休まないと・・・」

とは言うものの、戦闘禁止エリアの存在さえも知らぬ総一たちにとって、休めそうな場所はどこにも存在していなかった。

総一「けど、もう言ってもいられないか、適当な場所を探して休むとしよう」

その言葉で、総一達は4階の部屋をいくつか回ったのだが、

総一「階段近くだと、誰かに遭遇してしまう可能性が高いし・・・あれ？」

最前列を歩いていた総一が、何かに気づいた。

総一「こんな所にシャッターが」

総一達が進んでいた真っ直ぐの通路は、途中でシャッターに阻まれており、その向こう側の様子を知ることが出来なかった。

桜姫「変ね・・・。地図上にはそんな表記はないし」

そう言った所で、一つの記憶が思い起こされた。

咲実「・・・もしかして前に私達がエレベーターで6階に行った時と同じなのではないでしょうか？」

たしかその時もシャッターに阻まれて先には進めなかったのだ。

総一「なるほど。となってくると厄介だな」

周りの壁なども調べるものの、スイッチらしきものは見当たらない。
やむを得ず、もと来た道に戻ろうとしたのだが、

桜姫「そんな・・・」

何故か先ほど通った道まで、シャッターによって塞がれていたのだ。

総一「これは一体どういうことだ、何が狙いだ・・・？」

訳が分からず、考え込む総一であつたが、その疑問を打ち消すかの
ように、謎の音楽がPDAから響いてきた。

総一「な、何だ!？」

桜姫「そ、総一!見て!？」

桜姫は自身が見ていたPDAを差し出す。すると地図の画面から、
突如謎の怪人の姿が映し出された。

スミス『お楽しみっ!エクストラゲーム!!!』

とてとと画面の端から中央へと歩んできた力ボチャ型の怪人は、くるりと前方を向き、高らかにそう宣言した。

スピーカーから実際に耳障りな高い音声が流れ、画面にも文字が刻まれていく。

優希「な、何これ？」

スミス『やつほーっ！ボクの名前はジャックオーランタンのスミス！』

スミスと名乗った怪人は、ステップを踏みながら軽やかに踊ってみせる。

咲実「ジャック・・・？」

予想外の出来事に、誰しもが驚きの表情を作る。

スミス『そうさっ！ちなみにボクの得意技はなんと！このチェーンスーで切り刻む事、なんだよねえ』

スミスは冗談めかして言うが、誰も笑わない。

スミス『あつ、もちろん画面の中だけの話なんだけどね。実際に切り刻むのは君たちの役目さ！』

恐ろしいことをさらりと口に出すスミス。あまりの展開の仕方に総一は開いた口が塞がらなかった。

スミス『おっと、じゃあ早速本題に入ろっかな。君達専用のエクス

トラゲームの説明をしてあげるねっ」

スミスが右手をかざすと、とたんに画面が地図に切り替わった。

スミス『実は今、キミ達が居るエリアは封鎖されちゃってるんだ』

かりん「ふ、封鎖!？」

かりんは思わず大声を出す、スミスは構わず話を続ける。

スミス『キミ達の周辺の4箇所の通路。そこにそれぞれシャッターが降りている。だから出入りする事は不可能なんだ』

確かに地図には、確かにシャッターの表示が各々に示されている。

スミス『けれどももちろん、解除する方法は存在するよ。キミ達の前にあるシャッターを良く見て』

促され、総一たちはPDAから画面を離してシャッターを見る。

するとシャッターの一部分に、鍵穴の付いた謎の機器が据え付けられていた。

スミス『4つのシャッターすべてに同じ機器がついてるんだ。そしてこのエリアにはそれに合致する鍵が4つ存在する』

スミス『それらをすべて見つけ出し、鍵のロックを4箇所同時に回せば鍵は開く!』

スミス『でもね、同時に開けないと開かないんだ。だから各自分担

して執り行つ必要があるってワケ。分かったかな？」

総一「な、なんなんだ、これは??」

総一にはこんなことをさせる意味が分からなかった。一体何の為に・・・？

スミス『あ、そうそう。一つ言い忘れてたよ。キミ達が居るエリア。ゲーム開始から38時間が過ぎた時点で、細菌が流れる様に仕掛けであるんだ』

スミス『細菌を吸い込んで体内に入ると、体中の血管を溶かしてしまつ、恐ろしい殺人兵器さ!』

桜姫「さ、殺人兵器ですって!ふざけないでっ!？」

あまりに物騒な代物に対し、桜姫は怒りを露わにする。

スミス『だからなるべく急いだ方がいいよ?あ、けど38時までは大丈夫けどね』

総一はPDAの時計に目をやる。

総一「38時間・・・。あと1時間ちよつとしかないじゃないか!？」

抗議の声をまるで意に介さないまま、スミスは再び画面端に歩いていく。

スミス『それじゃ【罰ゲームからの脱出!】ゲームスタートオー!』

そんなふざけた言葉を残し、画面から姿を消した。

・
・
・
・
・
・

スミスに言われたとおり、隠された4つの鍵を探し出した総一たちは、この次にどうするかを話し合っていた。

かりん「残り時間はあと40分。本音を言えば早くこんな所から脱出したいけど」

逸る気持ちに苛まれるかりんに対し、意外にも咲実が制止する。

咲実「焦る気持ちも分かりますけれど、まずはコレが何なのかを調べてみてはいかがですか？」

そう言っただめ。

かれん「お姉ちゃん。この閉ざされた空間に居れば、あの怖い人も襲ってこれないと思うの」

かれんの言う怖い人とは、手塚の事を指している。ここに居れば逆に安全だということだ。

かりん「・・・そっか。そう言われればそうだね」

納得したかりんは、先ほど鍵と共に手に入れたツールボックスを手取る。

かりん「これって、PDAに差し込んで使うものなのかな？」

桜姫「うん。きっとそうね」

かりん「試してみよっか？」

そう言い、皆に尋ねる。異論は無かった為、さっそく手に持っていたツールボックスを自身のPDAに差し込む。

かりん「これは、ルールの一覧表みたい」

かりんはPDAの画面を覗き込みながらうなづく。

総一「ああそうか。まだルールを知らない人も居るかもしれないしな」

かりんの表情が曇っていたが、総一は気づかなかった。彼女にとって、ルールが偽りだった方が都合がよかったからだ。

優希「残りは3つ。バッテリーを消耗するみたいだから、なるべくバラバラの方が良いのかな？」

総一「そうだな。じゃあ・・・」

残るツールボックスはそれぞれ桜姫、かれん、咲実の3人にインストールする事にした。

総一は周りを警戒する役目だったので、地図の確認とソフトの使用はすべて彼女達に任せてようと考え、辞退した。

桜姫「インストール完了つと。・・・うん、これは首輪を感知して地図に表記するソフトみたいね」

かれん「私は、隠された罠の位置を知らせるものみたい」

総一「罠？そんなものまであったのか」

総一たちは幸運にも、今まで一度も罠にかかったことがなかった為、その存在自体知らなかった。

咲実「私のは、地図の拡張機能みたいです」

咲実のPDAに書かれた地図には、部屋ごとに倉庫、戦闘禁止エリア等の表記が追加されていた。

ソフトの詳細を確かめ終えた段階で、残り時間が20分と迫っていた。悠長にもしていられず、別の脱出方法を探る余裕もなかった。で、鍵を開けるメンバーの振り分けをどうするか話し合っていた。

第1のロックには桜姫。

第2のロックには咲実。

第3のロックにはかりん・かれん姉妹、それと優希。

そして第4のロックは総一という結論になった。

ロックを外した後、総一は素早くダッシュしてかりん達と合流。同様に桜姫も咲実と合流する、という手筈だ。

彼女達を一人きりにしたくない。というのが総一の本音ではあったが、他に手立てがない以上、こうせざるを得なかったのだ。

総一「・・・よし、そろそろ時間だ」

各配置についた総一達は、PDAの時間を確認しつつ、ジッと見据える。

この先に何が起こるのか、全く想像がつかない。

事前に優希のPDAにインストールした首輪の探知で、近くに反応がない事は確認したので、ひとまず襲われる心配は無くなったものの、一抹の不安は拭い切れていない。

総一「ゲーム開始から37時間44分55秒。56、57・・・」

そして55分に切り替わった瞬間、ロックのキーを回す。

ガチャン！

ロックが外れる重い音と共に、けたたましくシャッターの開く音がした。それに合わせて目の前のシャッターが開く。

総一「開いた・・・」

手筈どおり反転してダッシュしようとする総一だったが、振り向い

た先から大きな音が響くのが耳に入った。

総一「なにっ!？」

総一が走り抜けようとした通路を、別のシャッターがそれを遮る。

総一「し、しまった!」

この瞬間、この一連の狙いが分かった。

総一達を分断させる為に用意された罠だったのだ。

??「きゃああっ!!」

するとシャッターの向こう側から響く誰かの悲鳴。

総一「悲鳴!？くそっ!」

総一はPDAを素早く取り出し、地図の画面を呼び出す。

総一「分断が目的なら、きつと他の皆もシャッターで塞がれているはず。なら一体どうすべきだ!」

各々が分断されているとなれば、たとえ迂回して他のメンバーの所に行っても、そこに居るメンバーとしか合流出来ないということだ。

総一「まず誰と合流する、悲鳴を挙げたのは!？くっ・・・」

悩んでいる暇はない。恐らく一番早く合流出来るであろう、かりん

達の元へと走っていったのだった。

・
・
・
・
・
・

麗佳「はあはあはあ・・・、ぐっ！いつっ」

手塚の追撃から辛うじて逃げることに成功した麗佳ではあったものの、その代償は大きかった。

彼女の左頬には一筋の傷があった。手塚の槍での一撃をかわし切れずについた傷だった。

血は止まったものの、あとほんの少し避けるのが遅れていたら、その顔は原型を留めていなかったかもしれない。

他にも右肩を同様に槍で突かれ、両膝は擦りむいていた。

いずれも軽傷ではあるものの、心に負った傷はそれ以上だった。

麗佳「どうして、こんなことに・・・」

心労の連続で、麗佳の心は押しつぶされそうだった。

そんな時に、PDAから異様な音楽が流れ、スミスの顔が画面上に映し出される。

麗佳「これ、は・・・」

疲れきった表情の麗佳をよそに、スミスはいつもの場を無視した声で挨拶をする」

それが誘拐犯からのメッセージだと気づいた麗佳は、とたんに眉をつり上げる。

麗佳「あなたが、あなたのせいで葉月さんは！！」

スミス「まあまあ、葉月さんの事は残念だったよ。それよりも・・・」

麗佳「残念だった、ですって・・・！！」

怒りに火がつき、その口から怒声が発せられようとしたが、スミスはそれを気にせず、ペラペラとしゃべり続ける。

スミス「葉月さんの娘さん。助けたくはない？」

麗佳「なっ！！？」

スミスの質問に、大きく開こうとしていた口が止まる。

スミス「どうなんだい？葉月さんの代わりに娘さん、助けたくはないかな？」

まるで詰問しているかのように同じ質問を繰り返す。人質をとられている以上、麗佳に選択肢がない事は明らかだった。

葉月さんは、助けられなかった。・・・約束したもの、葉月さんと。

娘を助けようって。その思いが、怒りで狂いそうな心に、辛うじて歯止めがかかった。

麗佳「・・・何をすればいいの・・・？」

この先、悪い事を聞く事になるのだろう。何を求められるのか？人殺し？それとも・・・。

スミス「なあと、簡単なコトさ！君を含めて総勢5人、このゲームを無事に乗り切って生存出来たら、娘さんは解放してあげるよっ」

スミスは快活にそう告げる。

麗佳「5人・・・？」

スミス「そつ。今11人のプレイヤーが存在してるんだけど、その内の5人がゲーム終了時に生き残っていたらゲームクリア っわけ」

思っていた事と間逆の内容に、麗佳は思わず問い返す。

麗佳「本当？嘘はない！？」

スミス「本当だつてば。ボクは嘘をつかない事で有名なんだよ？」

麗佳としては、今すぐにでも罵りたい相手だった。しかしその感情をグッと堪え、それを承諾した。

麗佳「わかったわ。私と、あと他の4人が生き残ればいいのね・・・」

先ほど仲違いをした高山達3人。襲い掛かってきたチンピラ風の男。麗佳がいまだ出会っていないのは残り6人にもなる。

そうになると、まだやりようはいくらでもある。そんな気がしたからだ。

スミス「そうそう。健闘を祈ってるよお。あー、でも先にキミの傷を手当するのが先かな？近くに救急箱があるはずだから。それじゃね、バイバイ」

そう言つてスミスは画面から姿を消す。

麗佳「私が、助けなきゃ・・・」

麗佳は決意を新たにし、前へと踏み出すのであった。

・
・
・
・
・
・

第9話「乖離」（後書き）

ゲームに飲み込まれていくプレイヤー達。そしてそれは、更なる展開が待ち受けているのでありました。

次回は第10話「ジョーカー始動」必死で抗おうとする彼らに対し、いよいよ究極の殺人マスターが舞い降りたのでした。乞うご期待

第10話「ジョーカー始動」

第10話「ジョーカー始動」

作・桐島成実

現在の状態

PDA

状態

解

除条件

御剣 総一

(2)

健康

JO

KER破壊

桜姫 優希

(6)

??

JO K

ER5回使用

姫萩 咲実

(?)

??

?

?

「グループA」

北条 かりん

(?)

??

??

北条 かれん

(Q)

??

2日

と23時間生存

色条 優希

(4)

??

首輪3

個収集

矢幡 麗佳

(7)

??

全員との

遭遇

「グループB」

綺堂 渚

(10)

健康

首輪5

個作動

麻生 真奈美

(J)

健康

24時間

共にしたプレイヤーの生存

手塚 義光

(?)

??

??

高山 浩太

(5)

健康

チエツ

クポイント通過

葉月 克弘

(K)

死亡

PDA

5個収集

長沢 勇治

(9)

死亡

皆

殺し

【所在不明のPDA・・・『A』『Qの殺害』『3』『3名殺害』『8』
PDA5個破壊】

渚「な、なんでこんな事につ・・・!」

真奈美「も、もっいっ!」

ひた走る2人の後ろを追いかけているのは高山だった。

高山「生き残る為だ。許せ！」

その高山の手には日本刀を持っており、その刃はむき出しになっていた。

渚「真奈美！もっと早くっ！！」

渚は必死で真奈美の片腕を引っ張るのだが、真奈美は足並みが揃わず半ば引きずられているような状態だ。

運動神経がバツグンな渚に対し、運動が苦手でトロい感じの真奈美。こうなるのは必然だった。

高山「なかなかしぶといな。・・・だが、俺には勝てまい！」

足の速さでは高山の方が上だ。だがなぜか彼は速度を渚たちと同じペースで、渚達を追い続けていた。

渚「きつと私達の体力を失わせて、そこを狙って攻撃するつもりなのよ！だから早く！」

渚はそう言うものの、このままではギリ貧だということは十分理解していた。

このままではインストールしたあのソフトも使えない。

渚「こうなったら・・・真奈美！代わりに地図を見て探して！」

渚はそう言つと、空いていた片手で自身のPDAを取り出し、真奈美の手に握らせる。

真奈美「げげほ、・・・えっ、えっ？」

PDAを手渡された真奈美はうろたえたものの、渚の言いたい事を理解し、慌てて地図の画面を呼び出す。

渚「負けないっ！こんな所でっ！！」

渚は瞬時に反転し、接近してきた高山に突撃する。

高山「ほう、度胸だけは認めておこっ」

対する高山も、相手の動きに合わせて刀を振るう。

渚「刀を持っているのは右手。それなら・・・」

高山が刀を振り下ろす直前、渚は左にステップし、壁に身体をくつつける。

高山「む・・・？」

こうすれば、高山と渚の位置関係から刀を振り下ろそうとすると、ただでさえ横幅が狭い通路の為、壁に遮られる形となる。

高山「着眼点は良いな、だが戦闘経験は俺が上だ！」

高山は右足を軸にし、身を横に倒して左の蹴りを繰り出す。

渚「きゃあー!!」

渚は身を潜め、なんとかその蹴りをかわす。

高山「甘いっ!!」

高山は蹴りの軌道を変え、そのままかと落としを食らわせた。

ガッンッ

渚「あぐうっ!!」

渚はなんとか身をかわそうとするものの、高山の容赦ない蹴りは渚の左肩を直撃する。

高山「終わりだ」

刀を両手に持ち替え、そのまま真上に振り上げる。

真奈美「渚あっ!!!?!」

その時真奈美の叫び声が聞こえた。

高山「むっ」

高山の注意が一瞬それたのを見抜き、渚は痛みを堪えつつ後ろに下がる。

真奈美「こっち!こっちの部屋!ドアにも鍵が付いてる!」

渚「わかったわ！」

真奈美と渚は部屋の一角を目指す。そしてドアを開いて中に入る。

真奈美「ドアに手動の鍵が付いてるの！」

そう言いつつ、ドアを勢いよく閉めて鍵をかける。

その部屋はドアが一つきりで、他に出入り口がない様に見えた。

渚「ダクトはどこ？」

真奈美「こ、こっち！」

真奈美の指差す方向には、確かにダクトらしきものがあり、鉄格子もはまっていた。

渚達は高山に襲撃される前に、3つのPDA用ソフトを手に入れていた。

一つは地図上に現在位置を知らせるもの。もう一つは生存者数を示すもの。そしてもう一つがダクトの経路を記している地図だった。

それを使って高山の追撃をかわそうというのだ。

渚「鉄格子が外れたわ！真奈美から、早く！」

悪戦苦闘しながら逃げようとする2人だったが、必死になっている彼女達は気づいていなかった。

ダクトの中に逃げ込むその間、高山の追撃が止んでいたことに。

・
・
・
・
・
・

ディーラー「ゲーム開始から既に39時間経過……。そろそろかな？」

そうつぶやきつつ、ディーラーは目の前にあるコンソールを操作し、パネル上にあるメッセージを書き込む。

「準備は整った。行動を開始せよ」

それはプレイヤー達の中に紛れ込んでいるジョーカーに向けてのものであった。それを送信し終わったのを確認したディーラーは、ふうと一息つく。

いつもは、ゲーム開始から24時間が経過した時点で行動を開始して良いと、いうルールのはずだった。

だが今回に限っては、ディーラーよって事前に、指示があるまで行動を抑える様に通達されていたのだ。

その理由はシナリオの存在。プレイヤー達を固め、仮初の絆を作っておいて、後々にそれらを引き裂く。それは着々と進行しつつあった。

ディーラー「所詮、彼らは私達の手のひらで踊っているに過ぎない」

そうほくそ笑んで、並んでいるモニターに視線を移した。

その一番端のモニターに、葉月の娘の映像が映し出されている。しかし、それに映る人物は微動だにせず、ピクリとも動こうとしない。

ディーラー「金髪のお嬢ちゃんは、まさかこれがただの作り物だとは微塵も思っまい」

そうなのだ。

葉月の娘は捕らえられているわけではない。わざわざそんな手間をかけるくらいなら、プレイヤーの一人として参加させるはずだ。

これは事前に作られた偽の映像だったのだ。

ディーラー「こうしておけば、死に物狂いで生き残ろうとするはず」

しみじみと物思いにふけっていると、一つの通信が入ってきた。

ディーラー「ん？・・・こちらディーラー」

すると雑音と共に、低い男性の声がスピーカーから聞こえてきた。

高山「こちら高山。綺堂と麻生の襲撃は完了した」

ディーラー「ご苦労さまです。これで彼女達も他のプレイヤーと敵対せざるを得ないでしょう」

高山「そうなるな」

高山はまるで感情を含めずに、事務的に答えた。

ディーラー「葉月の首輪を作動させた件と言い、さすがはベテランのゲームマスター、と言ったところですかね」

高山「おだてても何も出んぞ」

2人の言うとおり、高山浩太という人物は、ゲームマスターの一人というわけだ。

そしてディーラーの指示で、高山はJOKERに偽装した『5』のPDAを、葉月の首輪に読み込ませたのだ。

結果は予想どおりの成果を挙げていた。事実その場にいたプレイヤー達は互いに疑心暗鬼を強く持っていた。

今の所シナリオ通りに事が進んでいる。率直にその手ごたえを感じていた。

ディーラー「そうですね。では、そのまましばらく休んでいてください」

高山「了解した。ひとまず控え室に戻っておく。・・・ところで、一つ質問があるのだが」

ディーラー「なんででしょう？」

高山「事前にゲームの参加者のリストに目を通したが、サブマスターの分の資料が欠けていたのだが」

ディーラー「あ、それはすみません。ええと、サブマスターとの連絡があれば、こちらで中継しますので」

高山「別に問題はないのだがな。ただ俺がメインマスターを務めている以上、ゲームの詳細は把握しておかんな。・・・リストに載っていない人物が、サブマスターということになるのだろうか？」

ディーラー「ええ、そうなります」

高山「うむ。何かあればまた連絡してくれ。ではな」

そう言うと高山は通信を切った。

実はサブマスターの資料を抜き取っていたのは、ディーラーが意図的に仕組んでいたことだった。

ジョーカーであるサブマスターの存在をメインマスターに知られると、後々面倒なことになるからだ。

ディーラー「サブマスターが殺戮を開始する時、最も効率の良い方法は何か？」

それは誰に問うたものではない。

ディーラー「通信不可、PDAのソフトも皆無。だが、唯一他のプレイヤーと違う点がある」

そして、ディーラーは画面を切り替えた。そこに映っているのは控え室の映像。

ディーラー「建物の構造だけは、熟知しているということだ」

そして冷たく言い放つ。すべてを知る彼は確信を持っていた。

ディーラー「もう二度と通信をかわすことはないでしょう。．．．さようなら、高山さん」

そして彼はモニターから目を背けたのであった。

．
．
．
．
．

総一「くそっ！みんな無事で居てくれよっ」

総一はひとまづかりん達が居るであろう場所へとひた走っていた。

通路を迂回せざるを得ない為、時間にして数十分かかっていた。

総一「仕方がなかったとはいえ、俺はなんて事を．．．！」

総一のせいではない筈だったが、総一は自身の選択に愚かさを感じ

ずにはいられなかった。

悲鳴が拳がった以上、誰かにおそわれたのは想像に容易だ。問題はあれが誰の悲鳴だったか？

シャッター越しに聞こえた悲鳴はくぐもっていて誰のものかは判別が出来なかった。

あの時、もつと別の脱出方法を探るべきだったのではないか？メンバーの振り分けをもつと考えるべきではなかったか？そんな後悔に囚われていた。

そしてやつとのこととで、かりん達が居るであろう通路の前まで来た。

あれから時間が経っている。ま、まさか・・・！

嫌な思いを振り払いつつ、通路の向こう側へと視線を向ける。

まず最初に目に入っただのは、完全に閉じきったシャッターだった。

それは総一がかつて見たものと同様で、やはり4グループともすべて分断されているようだった。

しかし、肝心のかりん達の姿はどこにもない。まるで何事もなかったかのように静まりかえっていたのだ。

総一「手筈では、かりん達はこの場に留まっているはず。・・・何かあったのか？」

不安を払拭するかのよう、周りを丹念に調べ始める。

総一「・・・!!」

悪い予感当たっていた。

総一「これは・・・!血痕!」

床に微かに落ちているそれは、紛れもなく血だった。その血はまだ完全には乾ききっておらず、真新しい事を証明していた。

もちろんかりん達は事前に怪我をしていた訳ではない。ならばそれは別れてから付いたもの。

総一「く、くそおおっ!!」

焦った総一は、周りの通路や部屋をあちこちに探し出す。

総一「どこだ!どこにいる!」

しかし、かりん達の姿はまるで見当たらなかったのだった。

・
・
・
・
・
・

ディーラーの予想どおり、あれから1時間と経たない内に事は動いていた。

ゲームを観戦しているカジノの客達は、数々のモニターの内の一つに注目していた。

客A「おおっ！ジョーカーがメインマスターを毒殺したぞ！」

客B「対メインマスター戦、占めて5連勝。ジョーカーの異名は伊達ではありませんな！」

客C「これでジョーカーの独断場決定ね！今から怯えるあの子達を想像すると、ゾクゾクしてくるわぁ」

カジノの客達のボルテージはみるみる内にあがっていった。

これまでジョーカーは最初のターゲットを必ずメインマスターに絞っていた。

なぜならメインマスターの存在は、ジョーカーにとっても脅威である。ならば存在を知られる前に始末した方が良いからである。

また、メインマスターの持つPDAには、様々なソフトが組み込まれていることを知っていた。

そして自身とメインマスターしか通らないであろう控え室。そこで待ち受けていれば必然と出会うことになる。

ジョーカーもディーラーも、それをよく知っている。そして、ゲームは本格的に始動したのであった。

・
・
・
・
・
・

闇雲にかりん達の姿を探し回っていた総一だったが、ラチがあかないことを悟り、ひとまずどうするか考えていた。

総一「落ち着け！俺がしっかりしなくてどうする！」

総一は自身に活を入れ、パシンと頬をたたく。

総一「ひとまず、優希達2人と合流するのが先決か？」

大きい方の優希は、PDAに首輪の探知機能が備わっている。だから逆を言えば彼女と合流すれば、咲実さん達4人の行方も見えてくるはず。

だが、分断されてから1時間以上経過している。それでは優希がどこに居るのか検討がつかない。

考えあぐねていると、遠くから誰かの大声が聞こえてきた。

??「御剣さんっ!!」

この声は・・・?

総一「もしかして、咲実さん!？」

声は後ろから聞こえてきた。総一は後ろを振り向くと、そこには他

ならぬ咲実の姿があった。

咲実「御剣さん、無事でしたか!？」

咲実は慌てて総一の元へ駆け寄ると、総一の無事な姿に安堵の表情を浮かべる。

総一「咲実さんこそ怪我はない？」

咲実「はい、おかげさまで」

総一も咲実の無事な姿に心底安心するものの、さっきまでの出来事を思い出し、緩みかけた心を再びを引き締める。

総一「つと、それどころじゃない。実は・・・」

総一は先ほど見た血痕について説明する。

咲実「血痕!？それって・・・」

咲実も悲鳴を聞いてはいたのだろう。だが血痕の事は知らなかったらしく、思わずそう聞き返した。

総一「考えたくはないけど、恐らく・・・」

それだけで言いたいことは分かった、が口には直接出たくはなかった。

咲実「・・・」

その行き着く答えに気づいた咲実さはさと表情が青ざめた。きつと総一が血痕を見た時も同じ表情をしていたことだろう。

総一「ともかく、ここでジツとしているわけにはいかない。まだ優希やかりん達はこの近くに居る可能性が高いはず。早く見つけ出さない」と

咲実「ま、待ってくださいっ!」

気ばかり焦る総一を咲実が止める。

総一「どうした?早く・・・」

咲実「闇雲に探しても、行き違いになる可能性があります。それに襲撃者に出くわす場合も。ここは別の方法を考えたほうが良いかと」

総一「良い方法って、そんな事考えてる暇なんて・・・」

咲実「実は、ここに来るまでの間、ずっと考えてたんです」

咲実も冷静というわけではないが、最適だと思う方法を模索していた。

咲実「実は周りを警戒して気づいたんですけど、所々に館内放送のスピーカーがある事に気づいたんです」

総一「スピーカー!?!」

咲実「はい。それを使えばうまく皆さんを誘導出来るんじゃないか

と」

総一「そ、そっか」

総一は人ばかり気にしていたので、その事には微塵も気づいていなかった。

咲実「あとは、その元となるマイクがどこにあるかなんですけど。さっき私達が閉じ込められた時、ソフトをいくつか手に入れましたよね？」

総一「あ、ああ」

咲実「私のPDAには地図拡張のソフトが組み込まれています。それで、気になった所があるんですけど・・・」

そう言うと咲実は自身のPDAを取り出し、総一に見せる。

咲実「この警備室という所なんですけれど、もしかしたらここにあるんじゃないかと」

たしかに、総一たちが居る4階の地図の一部屋に、警備室という所がある。

咲実「他の部屋は、倉庫だとかそんな記述しか載ってないんです。だから、あるとすればこの部屋ぐらいしか考えられないんです」

総一「へええ」

俺よりずっと考えてたんだな……。ずっとうろたえ続けていた自

分がなんか恥ずかしい。

総一「その方が確実性はあるな。じゃあそこへ行こう」

咲実の提案を元に、警備室へと急いだ総一たちであった。

・
・
・
・
・

総一「これか！」

警備室へとたどり着いた総一と咲実は、そこに備え付けられているマイクを手についた。

咲実「館内放送だけでなく、モニターもあるんですね・・・」

そこには所々に据え付けられているのであろう、カメラの映像が映し出されていた。

総一「優希やかりん達は映ってないのかな？」

2人はいくつかのモニターをじっくりと見渡す。

総一「あつ、優希！」

するとモニターの一つに、優希と思われる人物像が見えた。

そしてその隣に居るのは・・・。

総一「え！？優希も一緒なのか！」

総一の言う優希とは、最初に言った優希とは違う。

なんで優希が優希と一緒に・・・ええいつ！まぎわらしい！

思考が変な方に行きかけたが、一息ついて改めて考える。

優希はかりん達と一緒にじゃないのか？何かあって分断されて、その後俺と咲実さんの様に出くわしたか？

何はともあれ無事な姿を見ただけで十分だった。かりん達の姿が見えないのが気にかかるが、今は優希が先だ。

総一はマイクを手に取り、オンに切り替える。

総一「あー、あー、あー」

警備室にもスピーカーがあり、そこから総一の声が聞こえる。

総一「よし、優希！俺だ、総一だ！」

すると、モニターに映っている優希2人は、キョロキョロとあたりを見渡す。

総一「ええと、右に45度、斜め上を向いて」

カメラに正面から向き合えるように誘導する。

桜姫「・・・！」

モニターから音声は聞こえないが、カメラの存在に気づいたようだ。

総一「俺達は今、4階の警備室に居る。怪我もなく無事だ」

そう言うと、桜姫はにっこりと微笑んだ。総一にはそれが優希達2人も元気だという合図に見えた。

しかし、小さい方の優希はなぜか不思議そうな顔をして首をかしげる。

総一はすぐにその意味を悟った。

総一「あ、俺と咲実さん、一緒にいるんだけど、共に無事だ」

言い直すと、納得したかのように頷いた。

総一「とりあえず、一度みんなで集まろう」

あまり長居はしてられない。この館内放送は他のプレイヤー達にも聞かれているはずだ。

しかもこちらの居場所を言ったしまった以上、真っ先にこの警備室へと向かってくるはず。それで襲われたのでは元も子もない。

総一「集合場所は・・・」

その先を言い淀む。何と云えばいい？5階への階段で・・・じゃダメか。

すると後ろに控えていた咲実がそつと耳打ちする。

咲実「優希さんに示してもらえばいいんじゃないですか？」

総一「あ！そうか。そうすれば他の人達には気づかれない」

やっぱり頭が良いな、咲実さん。その事に頭が下がる思いだった。

総一「すまないけど、優希が場所を示してくれないか？手信号か何かで」

するとモニター越しに映る優希は互いに相談し出し、やがて大きい方の優希がピシッと姿勢を正した。

最初に示されたのは5本の指と、上を指差す一本の指。

総一「5階ってことか・・・」

咲実「あ、あの。口に出しちゃダメです」

あ、しまった・・・。マイクに流れてないだろうな？

すると、優希は次の手信号を示した。

右手で・・・、喋ってる？ん？真正面を指差す？カメラかな？

真正面の指差しは、ちょうど総一たちを指差しているようにも見える。

もしかして、という答えが導き出され、今度はマイクを切って咲実を確認をとった。

総一「もしかして、5階の警備室って言ってるのかな？」

咲実「話している、の説明が他には思いつきませんね。恐らく間違いはないんじゃないかと」

総一「そっか」

総一はうなずき、再びマイクをオンにした。

総一「わかった。俺達もすぐに行く。・・・気をつけてな」

すると桜姫が再びニッコリと笑った。大丈夫という意味なのだろう。

総一「これで心配なのはかりん達だけということになるな」

咲実「そうですね・・・」

咲実は同意の返事を返すものの、何かが引っ掛かっているのか、その声には張りが無い。

総一「どうしたの？咲実さん」

不安そうな顔をする咲実に気づき、そう問いただす。

咲実「その・・・、不安にさせる事を言ってしまうのですが・・・」

申し訳なさそうにそう詫びる。が、意を決したのか、それを口にす
る。

咲実「・・・どうして、5階の警備室なんでしょう？」

総一「え？」

総一は何とも思っていないかっただけに、その驚きは大きい。

咲実「私達は皆、4階で分断されたはずですよ。そうなりますと行方
不明のかりんさん達も4階に居るはずですよ」

総一「あつ、そうか！」

咲実が何を言おうとしているのか判った。集合場所を4階のどこか
にすれば、かりん達との距離もさほど離れないはずだ、ということ
だろう。

総一「もしかしてかりん達は今5階に居るのかな？」

首輪を探知していれば、かりん達の居場所も判っているはず。

咲実「あるいは、優希さん達が今5階に居るのかもしれないね」

総一「・・・ともかく、バラバラになった以上、頼りになるのは優
希のPDAだけだ。なら優希の言うようにひとまず5階の警備室へ

行くべきだと思う」

咲実「そうしましょう」

今度の咲実の返事は納得したものなのか、しっかりしていた。

総一「もしかしたら5階の警備室にも同様のシステムがあつて、そこにかりん達が映っているかもしれない」

そうと決まればさっそく行動しなくては。

何より俺達が警備室に遅れるわけにもいかない。

総一「行こう、咲実さん」

総一達は急いで5階の警備室へと急いだのであつた。

・
・
・
・
・

あれから4時間余り掛けて、特に障害もなく5階の警備室へとたどり着いていた。

総一「・・・電源は死んでいるのか」

総一が見た5階の警備室は、モニター等の機器はあつたものの、肝心の電気が来ておらず、操作パネルを動かしてもうんともすんとも言わなかった。

総一「まあ、仕方ない。ひとまず優希達が来るまでここで休憩しよう」

咲実「そうですね」

総一「はあ、ハラ減ったなあ・・・」

ここには食料の類は全くといっていいほどない。

いつ優希達が来るか分からないから、下手に移動出来ないのがつらいところだ。

咲実「ふふつ、御剣さんらしいですね」

総一「ん？あ、そっか。そういえば最初に出会った時もおんなじこと言っただなあ」

咲実「ええ。そういえば私も少し眠いです・・・」

総一と共に居る事に安心感が得られているのだろう。咲実の表情には青白さが抜けていた。

総一「そうだな・・・。なら俺が外を見張りしておくから、咲実さんは・・・」

そう言っただけで振り返ると、既に咲実が眠りかけていた。

咲実「すうー、すうー」

・・・やっぱり疲れてるんだな。

ひとまずそつとしておいて、総一は見張りをする為に警備室を出て行ったのであった。

・
・
・
・
・
・

第10話「ジョーカー始動」(後書き)

総一と咲実。2人の優希。そして行方不明のかりん姉妹。彼らが再開するのは果たして何時なのか？

次回は第11話「仕掛けられた罠」プレイヤー達に隠れて暗躍する悪意。それはじわじわとプレイヤー達を引き裂いていくのでした。次回も乞うご期待

第11話「仕組まれた罠」

第11話「仕組まれた罠」

作・桐島成実

現在の状態

P
D
A

状態

解

除条件

「グループA」

御剣 総一

(2)

健康

J
O

KER破壊

姫萩 咲実

(?)

健康

?

?

「グループB」

桜姫 優希

(6)

健康

J
O
K

ER5回使用

色条 優希

(4)

健康

首輪3

個収集

「グループC」

北条 かりん

(?)

??

??

北条 かれん

(Q)

??

2

日と23時間生存

矢幡 麗佳

(7)

??

全員と

の遭遇

「グループD」

綺堂 渚

(10)

肩に打撲

首輪5

個作動

麻生 真奈美

(J)

健康

24時

間共にしたプレイヤーの生存

手塚 義光

(?)

??

??

高山 浩太

(?)

死亡

??

葉月 克弘

(K)

死亡

PDA

5個収集

長沢 勇治

(9)

死亡

皆

殺し

【所在不明のPDA・・・『A』(Qの殺害)、『3』3名殺害、

『5』チエックポイント通過、『8』PDA5個破壊】

4階のまっすぐに続く一本道の通路を慎重に歩いていた手塚は、通路の奥の方から何か物音がしたのを、耳で聞き取った。

手塚「ん？誰か居やがるのか？」

独り言を呟きつつ耳を澄まし、布のかすれる音さえ聞き逃さないように集中する。

手塚「……ここからは見えねえが、誰か居るのは確かなようだな」

そう確信した手塚は、手に持っていた槍を再び構えなおす。

槍の刃先には、乾ききった血がベツトリと付着していた。

その血の主は金髪の女性。恐らく今も健在なのだろうが、次こそは逃しはしねえ。彼の目には、そんな決意が伺えた。

手塚「この角の向こうか？」

PDAの地図の通りならば、この角の先にも真っ直ぐの通路が続いているはず。

慎重に慎重を重ね、そつと角の向こう側を見やる。

手塚「……あん？あれは、人が倒れているのか？」

手塚の目に映る人物は、床に倒れたままピクリとも動こうとしない。

手塚「誰かにやられたか？おびき寄せる為の罠、ってわけじゃないわな」

いくらなんでも我が身を罠にして何らかの罠にかけろ、などという無謀な戦略を取るとは思えない、と手塚は考えた。

しかし、先ほど物音が聞こえたのも事実。とすると、誰かが待ち構

えている可能性は十分にある。

手塚は警戒を怠らず、恐る恐る近づいてみる。

手塚「・・・やっぱり動かねえな。！、コイツは・・・？」

倒れている人物の顔を見た時、それがつい最近見た顔と合致することになり気がついた。

手塚「あの時の大男か。・・・一番ヤラれそうにないヤツが死んじまうとはな」

脈がないことを確認し、さらにその大男の所持品を調べる。

手塚「おっ」

するとポケットから一つのPDAが出てきた。

しかし、それは手塚が知っているPDAとは少し違っていた。

手塚「道化師・・・？　そーいやるルールの一覧にJOKERがどうとか書いていやがったな」

コイツがそーなのか？　だが他には考えられねえな。

すると、一つの答えが導き出される。

手塚「なるほどな。恐らく初老の男、他の連中は葉月、とか言っていやがったな。そいつの首輪を作動させたのは、この男だったって訳だ」

手塚の予想どおり、油断ならない男だったということだろう。しかし腑に落ちない事があった。

手塚「しかし、この男の所持品がJOKERだけってのは変だな。この男が最初に所持していたPDAはどこにいったんだ？」

手塚が疑問に思うのも当然だろう。誰かがこの男を殺し、PDAを奪ったのなら、なぜJOKERをそのままにしているのか。そんなことをする理由が、手塚には思いつかなかった。

手塚「何にせよ、面白いことになりやがったな」

これで戦術の幅は広がる。JOKERを使ってこの男の様に誰かを騙すか、交渉するにしても十分な材料になる。

手塚「他にめばしいものはなし。まあ上等だな」

手塚は口元を綻ばせ、再び通路を歩き出したのだった。

・
・
・
・
・
・

麗佳「・・・？」

麗佳は今、ドアの向こう側に見える、戦闘禁止エリアに指定された部屋は、これまでの部屋にないほどの豪華な装飾に彩られていた。

汚れ一つない赤いカーペット。高級そうなテーブルとイス。壁にも壁紙が施され、今までの無機質なコンクリートとは比べ物にならないかった。

先ほどこの部屋に来る直前に、人影を発見して、ここまでやってきたのだ。

麗佳は恐る恐る部屋の中に入っていくものの、やはり誰も居ない。

麗佳「ここじゃないのかしら？・・・あ、この奥にも部屋があるのね」

よく見ると、部屋の奥と右側にもドアがあり、いくつかの部屋が繋がっていることを示していた。

麗佳「もしかしてこの奥に？」

麗佳が部屋の奥へと歩んでいこうとした時、ふと何か異臭がする事に気がついた。

麗佳「？何かしら、この臭い・・・？」

あたりを見渡してみると、部屋の隅の方のカーペットに、何かシミの様なものが一面に広がっているのが目についた。

どうやらそこから臭いが発せられているようだ。

麗佳「鼻の突くような臭い、これは・・・」

目を凝らしてよく観察してみると、シミの中央あたりに、何か黒い物体が置かれているのに気がついた。

あの独特の色や形、あれは・・・。

唐突に嫌な予感がして、無意識の内に後ずさる。

その予感は当たっていた。

ズウウウウンー！

麗佳「え　！？」

突然、黒い物体が爆発した。幸い麗佳の居る場所とは離れているものの、勢いのある爆風が、麗佳の身を包む。

麗佳「きゃあっ！！？い、一体何が！？」

爆風で視界が一瞬遮られ、再び戻った時、すでに次の異変が起こっていた。

ゴオオオオオ

シミがついていたはずの赤いカーペットが、真っ赤な炎によって彩られていた。

麗佳は知らなかったが、さっきの黒い物体はPDA用ソフトに付属されていた特殊爆弾だった。

PDAにソフトをインストールすると、コントローラーの項目が追

加される。

それを作動させると、付属の爆弾が爆発するというソフトだ。

そして爆弾の傍に、可燃性の液体をあらかじめ撒いておく。爆発と同時に引火し、たちまち部屋のあたりを覆いつくす。という仕組みだ。

麗佳「爆発に炎！？まさか、誰かに嵌められた！？」

その事に気がつき、慌ててドアから逃げ出そうとするものの、なぜか扉にはロックがかかっている。

それは恐らく先ほどの人影によるものだろうコトは容易に想像出来た。麗佳をおびき寄せて袋小路にする。戦闘禁止エリアだから安心だと考えた自身の甘さを、今更ながら悔いた。

麗佳「このままじゃ火達磨に！・・・どこか出口は！？」

部屋の奥に続くドアの前は火元が激しく、とても近寄れそうにない。

ゴオオオオオツ

そうこうしている内に、部屋の炎はますます激しさを増していた。床の敷かれたカーペットを焼きながら、火の範囲はどんどん広がっていく。

麗佳「右のドアは行けるかも。でも恐らくそこも行き止まり」

しかしそう思っている、迫りくる炎から何とか逃れようと、そのドアを開けて中に入る。

麗佳「ここは、台所？」

ドアの向こう側に見えた部屋は、キッチンを始め、食器棚や電子レンジ、業務用の冷蔵庫なんかもあった。

しかし肝心の出口はどこにも見当たらない。

麗佳「やっぱり、……でもここで諦めるわけにはいかない！」

死ぬのは怖い。それに私の肩には葉月さんの娘さんの命もかかっている。

葉月さんを助けられなかった後悔と罪悪感に苛まれていたことが、かえって麗佳を冷静にさせた。

麗佳「出口がないなら、自分で作るのはどうかしら？」

しかし麗佳は首を横に振る。

麗佳「……ダメだわ。私が持っている武器はコンバットナイフ。壁を叩き割ることなんか、到底出来ない」

それにそんな悠長なことをしていたら、あっという間に炎がこの台所さえも包み込んでしまうだろう。

ドアの向こう側からは、バチバチと激しい炎の音が聞こえてくる。恐らく、もう向こう側の部屋に戻ることは不可能だろう。

麗佳「逃げるのは無理。なら、ええと・・・」

台所のあたりを見回して、何か手がないかを必死で模索する。

炎・・・消すには・・・。

麗佳「あっ！そうだわっ！」

麗佳が注目したのは、キッチンに備え付けられている蛇口。これがあるということは、恐らく水道管に繋がっているはずだ。

さっそく蛇口をひねってみると、当然ながら水が出てきた。

麗佳は流しの下にある収納棚の扉を開けた。するとそこに蛇口に繋がる水道管が見えた。

麗佳「止水栓を破壊して、水道管の水を一気に放出すれば・・・」

そうすれば、抑えが利かなくなった水道管から水圧に押されて大量の水が放出される、というのが狙いだった。

破壊するだけなら、手持ちの武器や、キッチンの刃物類を使えば可能だろう。

そして水浸しにして床を消火し、更に鍋か何かを使って壁を消火していけば・・・。

しかしやはりそれでは不安だった。本当にそれで助かるのだろうか？そしてその後は・・・？

麗佳「考えてても仕方ないわ。時間が迫ってるんだから・・・！」

意を決し、麗佳はコンバットナイフに手を掛けたのだった。

ガッツ！ガツンッ！！ガチッ！！？

何度か強く叩きつけた後、水道管に亀裂が入る。そこから水が溢れ出し、次の一撃で完全に粉碎された。

ズザザザザー！！

蛇口を思い切り吹き飛ばし、先端から勢い良く水が吹き出る。

麗佳「や、やったわ・・・」

そこからは予想以上の水が噴出していた。相当な水圧がかかっているのだろう。

瞬く間に床一面が水びだしになっていく。

麗佳「次は・・・あっ！」

あまりにも激しい火を見たせいでそれに気をとられ、重大な事を失念していた事に気がついた。

一面火に包まれているであろう部屋へと続くドア。そこから黒煙が台所へと流れ込んでいた。

麗佳「まずいわ。火がどうにかなくても、有毒なガスを吸い込んで

しまつたら」

そうなれば元も子もない。なんとかならないかと再びあたりを見渡す。

麗佳「落ち着いて、ここは台所だから……。コンロ……。排気ダクト！そこから脱出出来るかしら！？」

排気ダクトはたしかに存在する。恐らく今現状の唯一の脱出ルートだろう。

麗佳「コンクリートの建物の中に居るのだから、きつとどこかに繋がっているはず」

悩んでいる暇はない。あとはダクトを通る少しの間だけ、煙から身を守る方法を考えるだけ。

麗佳は収納だながある所に戻っていき、中身をあさる。

麗佳「多分ここらへんに……。サランラップ、料理の本、ゴミ袋……。あ、あつたわ！」

麗佳はゴミ袋を手を取った。そしてそれを開けて、自分の全身にかぶせる。

麗佳「い、息苦しい。それに思ったより熱が籠って……」

しかしそんなことを言っている場合でもない。煙が入り込まないように栓をして、排気ダクトの上によじ登り、フィルターを外す。

麗佳「あとは別の場所に繋がっている事を祈るのみ、かしらね・・・ふふっ、神に祈ったことなど、今まで一度もなかったのにね」

なんとかよじ登り、ダクトの中を這いずり回る。

惨状の舞台となった台所の姿はもう見えない。そこからかすかな余裕が生まれたのか。麗佳は今までの出来事を振り返った。

麗佳「・・・それにしても、誰が私を貶めたのかしら？そんなことをする狙いは？」

私を殺したいが為？それにしては行き当たりばったりな感じがしなくもない。

私がこの戦闘禁止エリアに寄って来なければ、罠を仕掛ける意味はないのだから。

・・・もしかしていまだ出会っていない6人の内の誰かが仕組んだのかも？罠を仕組んだ人物は今どこで何をしているのか？

麗佳「さすがに、ダクトの中で待ち構えている、とは思わないけれど・・・」

考えることは山ほどある。この窮地を脱した後、どうするかも含めて。

麗佳はPDAを取り出し、地図の画面を呼び出した。

麗佳「このダクトは恐らく別の戦闘禁止エリア、そこも台所がある

と思うけど、その排気ダクトから出ることが出来るはず」

地図を操作し、別の戦闘禁止エリアの部分に画面を移動させる。

麗佳「ダクトの地図は載ってないから、方向を頼りに移動しないと・
・・」

だが麗佳の判断は甘かったと言える。ここはゲームの舞台会場。ダクトの道筋は、本来ならば有り得ないほどに入り組んでいて、まるでクモの巣の様な構造なのだ。

麗佳はしばらくの間、ダクト内をさ迷う羽目になったのだった。

・
・
・
・
・
・

それから1時間近く悪戦苦闘しただろうか？もはやどこをどう行ったら完全に分からなくなってしまった時、ダクトの向こう側から光が差し込んでいるのが見えた。

麗佳「戦闘禁止エリアにはまだ着いていないはず。・・・もしかして、通路で見たダクトの内の一つかしら？」

麗佳はその光に近づき、そつと外を見てみる。

鉄格子越しに見える景色は、どこかの部屋の一角のようだった。そこから様々な木箱や家具等が置かれているのが目に入った。

麗佳「ちよつと高い位置ではあるけれど、出られないこともないわ・
・・。ここから出るのが妥当かしらね」

そう判断し、さっそく鉄格子を外そうとした所で、突如人の声が耳に入ってきた。

麗佳「!!?」

どうやらその部屋には人が居るようだった。けれど麗佳の位置からは人の姿は見えない。

麗佳はそつと耳を鉄格子に近づけてみた。すると途切れ途切れではあるものの、明らかに声と分かるものが聞こえた。

??「・・・人殺し・・・!」

高めの声からして、女性の声であるのは間違いない。だがその事よりも、今聞こえた言葉の意味に、麗佳はびくつと身体を震わせ、そのまま硬直する。

??「私が銃で・・・私が殺したの・・・だから・・・
・・何も・・・の」

??「で、でもっ!? 私は、か・・・は・・・!」

どうやら2人居て、互いに会話を交わしているようだった。

会話の口調や内容から、ただ事ではない事はすぐに分かった。だから麗佳は、このままダクトから出る事を躊躇した。

麗佳「葉月さんの娘さんを助ける為には、4人もの人を助けて生き残らせなきゃならない。でも、けれどっ・・・」

選択を迫られている麗佳は気づいていなかった。気づくはずもなかった。

もう、すぐ目の前に、最大の危機が迫っていることに・・・！

・
・
・
・
・

かりん「はあっ！はあっ！か、かれん！大丈夫！？」

かれん「はあ！はあ！はあ！・・・」

かれんの手を引張って、今迫ってきている危機から必死で逃げた。

2人は通路をひた走り続けており、かれんに至っては返事をするにとさえも困難だった。

総一たちと別れてからというものの、この2人には危機の連続だった。

まず、見知らぬ精悍な体つきの大男にいきなり日本刀で襲われた。その際かりんは左の二の腕を切りつけられたものの、必死で抵抗し

た結果、それ以上の怪我を負わずに済んだ。

しかし今度は別のプレイヤーに追い回されている。

かりん「き、来たっ！！」

かりんは後ろを振り返ると、そこには勢いづいて突進してくる男の姿が映った。

手塚「ハッ！逃げ足だけは速いやツラだな。だが、ソイツもいつまで持つかない？」

手塚がかりん達と遭遇した時点で、手塚は問答無用に襲い掛かってきた。

手塚からしてみれば、恐らく格好の獲物と判断したからだ。

単に相手が子供だからという理由もあったが、片方の少女が怪我を負っている状態にもかかわらず、対峙した際、怪我を負った少女がもう一方の少女を背中に庇った為だ。

手塚の目には、その甘さに付け込むチャンスだとなぜか判断した。

庇われた方を足止めさえしてしまえば、逃がすことはないだろう。だから先ほどから執拗に攻撃を仕掛けていたのだ。

手塚「今度は避けられるか！？オラッ！！」

手塚は右手に持っていた投げナイフをかれん目掛けて投げつける。

かりん「危ないっ!!」

かりんは引張っていた手をぐいと引き寄せ、かれんの身体を引き寄せる。

かれん「ひゃあっ!？」

かれんの顔のすぐ横を、ナイフが通り過ぎる。

手塚「3度目も外したか。・・・いちいち面倒だな。いっぺんに投げりゃ、どれか当たるだろ!」

手塚は持っていた投げナイフを指と指の間に計6本を挟みこんだ。

近接武器が主な武器の現状において、遠距離から攻撃出来るのは、大きな利点だ。

その為、手塚は多数を持ち運びできる投げナイフを可能な限り所持していた。

両腕を大きく振りかぶって、指からナイフを離そうとしたが、その直前にかりんがこちらを振り返って何かを投げつけてきた。

ヒュン!

手塚「つとと」

避けようと、足を大きく踏ん張った手塚だったが、かりんの投げたものは軌道が低く、手塚に当たる前に床に激突してしまい、そのま

ま床を転がっていった。

手塚「避けるまでもなかったか？・・・って、うおっ！？」

突如、手塚とかりん達の間の床がぽっかりと抜け落ちた。

手塚はイチ早くそれに気づき、急ブレーキをかけてギリギリ穴に落ちずに済んだ。

手塚「・・・なるほどな。さっき物を投げたのは、罠を作動させる為か」

確認したわけではないが、それがきっかけで罠が作動した、と見るべきだろう。

手塚「これじゃ追撃は無理か。ジャンプして乗り越える事は出来なくもねえが、万一の事があるかもしれんしなあ・・・」

しかしながら、その悩みはすぐに解消される事になる。

落とし穴タイプの罠は、しばらくすると床が元に戻ってしまうのだから。

・
・
・
・
・
・

第11話「仕組まれた罠」（後書き）

ひとまず窮地を乗り切った麗佳。しかしこの先、更なる苦難が彼女を待ち受けているのです。只ならぬ会話を交わしていたのは一体誰なのか・・・？

次回は第12話「悲しき姉妹」北条かりん・かれんの2人に迫る、絶体絶命の危機。その結末はいかに？乞うご期待

第12話「悲しき姉妹」

第12話「悲しき姉妹」

作・桐島成実

現在の状態

PDA

状態

解

除条件

「グループA」

御剣 総一

(2)

??

JO

KER破壊

姫萩 咲実

(?)

??

??

「グループB」

桜姫 優希

(6)

??

JO K

ER5回使用

色条 優希

(4)

??

首輪3

個収集

「グループC」

北条 かりん

(?)

左腕負傷

??

北条 かれん

(Q)

健康

2

日と23時間生存

矢幡 麗佳
の遭遇

(7)

数箇所負傷

全員と

「グループD」

綺堂 渚

(10)

??

首輪

5個作動

麻生 真奈美

(J)

??

24時

間共にしたプレイヤーの生存

??

手塚 義光

(?)

健康

??

高山 浩太

(?)

死亡

5個収集

葉月 克弘

(K)

死亡

PDA

殺し

長沢 勇治

(9)

死亡

皆

【所在不明のPDA・・・『A』『Q』の殺害、『3』『3』3名殺害、『5』
チェックポイント通、『8』『PDA5個破壊】

手塚の追撃を逃れたかりん達は、その事を確認すると、走り続けていた足のペースを落とした。

かりん「な、なんとか撒いた、かな？」

かりんは息を切らしつつ、独り言を呟くかのようになんとか言葉を出したのだが、かれんは答える余裕もないようだった。

かれん「はあっ、はあっ！う、げふっ！ごほっ！」

かりん「ちょ！ちょっとかれん！？」

かれんの調子が悪いのは、誰の目から見ても明らかだった。顔色は青白く、呼吸がままならないのか、息遣いも一定でなくなっていた。

かりん「すぐ休まなきゃ！あ、でもさっきの男もすぐにやってくるはず……」

かりんはそう言って自身のPDAを覗き込む。

そこには地図の画面と共に、罨を示すイラストが描かれていた。

これは総一たちと別れる前にインストールしたソフトで、罨の位置と種類を知らせるソフトであった。

これがあったからこそ、一時的にでも時間稼ぎが出来たと言える。

かりん「とにかく、なんとかやり過ごさないと」

手早く地図を確認しつつ、あたりを見渡す。

かりん「近くに戦闘禁止エリアはないから、ええと……」

地図から得る情報も限られているし、時間もない。その為、近くの部屋へと逃げ込むことしか思いつかなかった。

2人はひとまず比較的広い部屋へと避難し、そこに隠れることにした。

かりん「人が隠れられそうな場所は・・・」

部屋の中をくまなく、そして音を立てずに探る。もしかしたら部屋の外に、あの男が忍び寄っているのかもしれないのだ。

置かれている家具等を探っていると、突如かりんとかれんが持つ、2つのPDAからアラームが流れてきた。

かりん「ひゃっ！？な、なに！？」

突然の事で驚いたが、悲鳴をぐつと飲み込むように口元を押さえる。あの男に聞かれなかっただろうか？その不安がよぎった。

それが念頭にあつたからだろう。アラームが鳴った意味は何か、と考える前に、そのアラームの音が原因で居場所を知れるのでは、とかりんは考えた。

かりん「音、音を塞がないと・・・！」

いまだ鳴り続けるアラームに、アタフタとしつつも、近くにあった毛布を手にとって、かれんのPDA共々それにくるんだ。

かりん「ふう、これでなんとかかな・・・？」

アラームが音漏れしていない事に安堵に息を漏らす、ゆつくりと事を構えるわけにはいかない。部屋中を調べ、なんとか人が入れそうなスペースを探しだした。

かりん「あ、あった！じゃあ、かれん。かれんはそこに隠れて」

かりんが指し示したのは、高級そうな収納棚だった。その上側は大きく間口がとられていて、人が入るのには十分なスペースがあった。

かれん「お、お姉ちゃん・・・」

苦しそうな息遣いの中、かろうじて出した言葉と共に、不安そうな目で姉を見るかれん。そこには1人が隠れるのがやっとで、2人一緒に入れそうにはなかった。

かりん「大丈夫、心配しないで！私がかれんの事守ってあげるから！」

励まそうとあえて明るい言葉で気軽にそう答える姉のかりん。それに影響されてか、かれんもやっと微笑みを見せた。

かれん「・・・うんっ！」

力強くうなずくかれんの表情には、姉に対する信頼が窺えた。身体をフラフラさせながら、その収納棚に近づく。

かりん「私はこっこのロッカーに隠れてるから。・・・もしあの男が来たらじつとしててよっ」

かりんが入ろうとしているのは古ぼけた縦長のロッカーだった。扉は5つあるが、これも人が1人ずつ入るのがやっとだった。

別々の扉にそれぞれ入れれば良かったのだが、ずっと立ち続ける必要がある為、かれんにはキツイと判断したのだろう。

かれん「お姉ちゃんも、無事でいてね」

かりん「うん、一緒に帰ろう」

そう言つて2人はギュツと抱擁する。かれんは姉に励まされ一筋の希望を持ち始めていたように見えるが、姉のかりんは違っていた。

もうこれが、最後の抱擁になるかもしれないということが。

かりん「じゃあ、30分ぐらい隠れよう。あの男が遠くにいつてくれたらいいんだけど・・・」

最後の言葉はかれんに聞こえないように声を小さくした。

そして2人はおのおのの場所に隠れた。

それからどれくらい時間が経つただろうか？家具とロッカーの中に隠れて扉を閉めた状態だと、暗闇に支配される格好になってしまい、時間の経過も狂いそうになった。

かりん「3分30秒・・・」

自身のPDAに表示されている時間を確認して、心の中でそう呟く。液晶ディスプレイの光が、唯一暗闇を照らす明かりだった。

かりん「このまま何事も起きませんように・・・」

その願いは瞬時に打ち砕かれた。

バン！！

けたたましく扉が開く音が部屋中に響いた。

かりん「！！？」

突然の事に驚き、思わず悲鳴を上げそうになるが、その声をグツと飲み込む。

カツカツカツ・・・

部屋の中を誰かが歩き回っているのは確かだ。それが誰かは窺い知ることは叶わない。

い、一体誰！？さっきの男！？それとも総一たちと別れた時に襲ってきた別の男！？

ドクンドクンドクン・・・

心臓の音が跳ね上がりそうなほど響いてくる。ロッカーの扉一枚を隔てたその先に居る人物に聞こえそうなほど。

足音がとたんに止み、静寂に包まれた。

かりん「・・・・・・・・」

かれんは無事だろうか？恐らく私と同じく怯えているはず。

極度の緊張に晒され続け、もはや2人共限界に近かったが、それでも耐え続ける。

先ほどの足音は段々とこちらに近づいているように感じられた。

恐らくロッカーの目の前に居るのではないかと思われる。

一体目の前に居る人物は何を・・・？

かりん「・・・？」

しんと静まり返った現状に、不気味に感じ始めたその時、突如起こった。

ガン！！

かりん「・・・！！？」

思わず声が出そうになった。それを歯をぐつとかみ締め堪える。

何かが接触したような音。一体何があったというの！？

音がした瞬間、ロッカーが揺れた感じがした。

その疑問は、続けざまに聞こえてきた声が、恐怖へと塗り替えられる。

手塚「チツ！外れか・・・」

かりん「！！」

今一番会いたくない男が、目の前に居る。それを理解したかりんはガタガタと身体を震わせた。

手塚「オイコラ！そこに居るのは分かってんだぜ」

手塚は、持っていたクロスボウの矢をセットしつつ、そう脅しをかける。

さっきの音は、クロスボウにつがえていた矢が放たれて当たった音。ロッカーの一番右側の扉に向けて。

そこには矢が全長の半分ほどが扉を貫通して内部に入り込んでいた。

手塚「出てこねえと矢が当たっちまうぜ？ホラ、2発目っ」と

ガン！！

今度は最初に撃った隣の扉に向けて矢を放った。

かりん「ど、どうして！？なんで私達が居る場所がバレたの！？」

部屋に手塚が入って来てから、ほとんど迷いなくこちらにやってきた。

物音を立てた覚えはない。それとも本当に心臓の音でも聞きつけた

と言っの！？

大声を出して恐怖を外に吐き出したい。そんな衝動に駆られるが、自身がやられれば、次はかれんが殺されてしまう。

手塚「なんでい、また外れか。・・・だが、次は3分の2の確率で当たるぜ」

手塚はそう言って再びクロスボウに矢を装填し始めた。

かりん「3分の2？私1人なんだから3分の1になるはずじゃ・・・？」

その疑問を辿っていく内、一つの答えにたどり着いた。

そうか！この男は私達そのものが見えてるわけじゃないんだ！きつと私が持つてるこのPDAを感知するソフトで、位置を特定しているに過ぎないんだ！

かりんの左手には毛布に包まれたかりん自身のPDA。そしてかれんのPDAの2つ。

だからロッカーに2人が隠れていると勘違いして・・・！

しかし、それが何の解決策にも繋がらないことに気づき、閃いた考えは瞬時にしぼんでしまう。

かりん「ダメ・・・。私がやられれば結局は同じ。すぐにかれんも見つかってしまう・・・！」

ならばいつそこちから仕掛ける？けれど本当にやれるのだろうか？

手塚「さあーって、3発目っ」と

最悪、相打ちでも・・・！？

そう結論を出し、ポケットに入っていた果物ナイフを取り出して、前方に身構える。

そして、ロッカーの扉を勢い良く開こうとして・・・。

バン！！

かりん「え？」

突如、部屋の奥の方から扉が物凄い音を立てて開く音が聞こえた。

木製同士がぶつかって発生する、独特の乾いた音がっ・・・！

かりん「かれんっ！！？なんて真似をつっ！！」

止まる間もなく、かりんは目いっぱい勢いづけて扉を開く。

手塚「！？」

最初、手塚は後ろから音がした事を気をとられた。そこには人が居ないだろうという誤った思い込みが、一瞬の隙を作る。

更には、かれんがそこから姿を現して、今まで見せたことも無い叫

びと共に、唯一持っていた携帯電話を手塚めがけて思い切り投げつけた。

かれん「お姉ちゃん!!?」

手塚「なんだとっ!？」

手塚は瞬時に相手の動きを見抜き、イチ早く身をかわそうとする。

だが、わずかに遅れたタイミングでロツカーから飛び出してきたかりんの存在を見逃す羽目となってしまった。

ズドォーン!!

ボーガンから矢が発射されるが、狙いが外れたそれは、かりんのすぐ脇を通り過ぎ、そのままロツカーに突き刺さる。

かりん「うわあああぁっ!!?」

雄たけびを挙げ、ナイフを手塚目掛けて突き刺そうとする。

手塚「チイツ!？」

手塚は持っていたクロスボウを瞬時に強く握り、両手をそのまま下に振り落とす。

ガッツ!!

かりん「あぐうつ!？」

果物ナイフが手塚の脇腹に刺さる寸前の所で、クロスボウはかりんの眉間に直撃した。

かりん「あう！！？うぐあああつ！あああつ！？」

金属の塊であるそれが頭に当たった衝撃は、並大抵ではなかった。額を切られ、眉間から瞬く間に流血した。

勢いそのままに、手塚はもう一度クロスボウを構えて叩きつけようとした。

かれん「やめてええええつ！！？」

かれんの悲痛な叫びと共に、背後から体当たりを食らわせようとする。だがそこは手塚といったところか。その動きを瞬時に察知し、片足で踏ん張った後、大きく回し蹴りを食らわす。

手塚「遅せえんだよ！ガキの分際で！！」

ドコオツ！！

手塚の足は、かれんの顔面にヒットする。

かれん「きゃああああつ！？」

勢い良くはじかれ、そのまま後ろに吹き飛ばされ、木箱の山に激突する。

かれん「あう、う・・・」

かりん「かれんっ！！！」

妹に乱暴を働いた事に、かりんは瞬時に激高する。ギリリと歯を食いしばって痛みに耐え、必死の形相で床に落ちたナイフを拾い上げようとする。

手塚「見え見えだっての！」

回し蹴りで浮いた足をうまく反転させ、ナイフを蹴り上げる。

かりん「ああっっ！！？」

その際、かりんの手に手塚の足が接触する。

手塚「頭に血が上ったヤツあ、始末におえねえな。ま、その方が分かりやすくいいんだがな」

手塚は再び両手を大きく振り被り、持っていたクロスボウをもう一度かりんに叩きつけると、フレームの部分が真っ二つに折れた。

バキィッ！！

フレームが折れた音と共に、かりんの頭蓋骨にヒビが入る。

かりん「あゝ あああっ！！？」

あまりの痛みに、張り裂けんばかりの悲鳴が響き渡る。

勢い良く流れ出た血はかりんの顔を覆い隠すが、目は死んでなく、キツと鋭い視線を手塚に浴びせかける。

手塚「しぶてえヤツだ。そのまま大人しくくたばりやがればいいものをよお」

折れたクロスボウを投げ捨て、腰に手をもっていき、投げナイフの一つを手取る。

手塚「冥土の土産に、一つ食らうとけや!!」

そして手塚はナイフをかりんの首へと突き立てた。が、実際はそうならなかった。

ズドォーン!!!

その音を聞いた時、それが何を意味するのか、手塚には分からなかった。分かったのは、自身に変化が訪れた事を悟った時だった。

手塚「なんつ、だと・・・!!!」

手塚の脇腹には、一つの銃弾が貫いていた。そして銃を撃つたのは・・・。

かれん「お、お姉ちゃん、を・・・放して・・・!」

痛みをこらえ、両手でしっかりと銃を持つかれん。その手は力チカチと震えていた。

先ほど木箱に叩きつけられた際、破損した木箱から銃が零れ落ちていたのだ。

幸いなことにその銃は手塚から見えて死角だった。そして何よりも、手塚自身、銃が現存するという事実を知りえなかったこと。それが、かれんの銃の一撃を食らう要因となったのだ。

手塚「ま、まさか銃を隠し持っていやがるとはな。ぐうつ！？く、くそっ！」

体勢を大きく崩した手塚は、前のめりになってロッカーに身体を打ち付ける。

だがなんとか踏ん張ろうと、ロッカーを柱にして倒れそうになる身体を支える。

かりん「い、今のうちにつ・・・！」

かりんは果物ナイフを手にしようと足を動かすが、床に落ちている果物ナイフは、ちょうど手塚を挟んで向こう側に落ちていた。

かりん「こ、これじゃ・・・！？」

さ迷う目に飛び込んできたのは、床に落ちている手塚が放ったクロスボウの矢。

断続的に続く痛み、意識が飛びそうになるものの、なんとかそれを拾い上げる。

そして、それを強く握り締め、手塚の心臓に向けて突き立てた。

かりん「う、うわああああっ！！？」

ザシュユツツ！！！！

殺そうとした訳では決してなかった。かりんもかれんも。

ただ、大切に人を守りたい。その一心で、目の前の悪魔に牙を向いた。

手塚「ごおっ・・・！？くそっ、たれえ・・・！！」

身体がもつれ、そのまま床に転倒した手塚の心臓には、一本の矢が突き刺さっていた。その矢には今もかりんの手がしっかりと握られていた。

かりん「あ・・・」

襲い掛かる激しい痛みに、一瞬気を失いそうになるものの、無理やり自らを奮い立たせた。

だが、手塚の反応が無いこと。それと手に滴り落ちる、ドロツとしたようなモノ。それらは次第に、事が起こった事実を鮮明に伝えていく。

かりん「う・・・そ・・・？」

かりんは放心状態に陥った。今起こった現実を受け入れなくなかったからだ。

けれど、いくら否定しても目の前にある光景は変わらない。

かりん「わたし、は・・・？」

知りたくない。けど知ってしまった。妹を、そして自らを守る為に、人を、人を殺めてしまった事を・・・！

かりん「な、なんで・・・こんな」

だが非情にも、先ほどまで悪魔に見えた手塚は、ピクリとも反応しなかった。代わりに、別の変化が訪れた。

『あなたはQのPDAの所有者を見事殺害し、解除条件を満たすことに成功しました！』

それはかりんのPDAから聞こえてきた音声。

そして続けざまに、かりんの首輪がいつも簡単に外れてしまった。

かりん「どう、いうこと・・・？」

考える気力はどこかへ行ってしまう、ただ今の疑問に問いかけるのみだった。

かれん「！コレ・・・！」

ふらつきながらも姉の元へと寄ってきたかれんは、何かを発見したらしく、そっとそれを指差す。

それは手塚のポケットから落ちたであろう、PDAの内の一つだった。かりんはそれを拾い上げる。

そして、そこに描かれていたものは・・・。

かりん「ハートの、クイーン!？」

かれん「どうして・・・？」

かれんのPDAであるクイーンは、今も毛布に包まれてロッカーの中に置いてある。それは間違いない。

かりん「クイーンが2つ・・・？」

自らが犯した過ちを受け入れたくないのだろう。思考は空転しながらあつちの方向へとズレていく。

かりん「これは、まさか・・・JOKER!？」

ルールを必死で思い出していく内、思いついた考えがそれだった。

かりん「でも、ルールには確か・・・」

もう一度ルールの4番を反芻して、次第に表情が強張っていく。

【このPDAをコネクして判定をすり抜けることはできず、また、解除条件にPDAの収集や破壊があつた場合にもこのPDAでは条件を満たすことができない】

かりん「JOKERは直接首輪に差し込んで解除する事は出来ない。破壊や収集もカウントされない。けれど・・・」

けれど、クイーンの殺害に関しては何も記述がない・・・。

その答えに行き着いた瞬間、緊張して凝り固まっていた身体が、とたんに崩れだす。

かれん「お姉ちゃん・・・」

すると、すぐ傍にいたかれんと目が合う。妹の無事な姿。そして今の自分の血塗れの姿を見られた事に、かりんの心は大きく揺さぶられた。

かりん「！かれんっ！？わ、私！私、人を殺しちゃった！私、人殺し・・・！」

うろたえるかりんに対し、かれんは意を決したかのように、かりんに近づき、そしてギュツと再び抱擁した。

嗚咽を交えながら罪の意識に押しつぶされそうになるかりん。それを全部受け止めようとするかれん。

かれん「私が銃で撃つたから、私が殺したの。・・・だからお姉ちゃんは何も悪くないの」

かりん「で、でもっ！？私は、かれんは・・・！」

それでも人殺しである事に変わりは無い。どちらにしても嫌だと訴えるかりんを、強く抱きしめる。

かれん「お姉ちゃんのした事は、私がした事でもあるの。・・・だから一緒に帰ろう。それで一緒に罪を償おう。ね、お姉ちゃん」

それはこれからも共に歩んでいこうという約束。それは、折れて碎

け散りそうなかりんの心に、一筋の光が見えた気がした。

共に同じ罪を背負ってくれる妹が居る。そう、かりんの首輪が外れた事で、妹と一緒に帰ることが出来るのだ。

かりん「うわああああん!!?かれんっ!かれんっ!!?」

大声で泣き喚くかりん。血で視界が塞がれるのも構わずに、そのまま泣き崩れる。

だが心の奥底では、凄惨な現実を受け入れることが、少しずつではあるが出来ていた。

そして姉として、共に罪を背負う者として、決して自暴自棄にならずに、このゲームを無事、乗り越える決意を固めたのだった。

しかし

ガンー!!

何の前触れもなく部屋に響いた、一発の銃声。

かりん「・・・え?」

かりんは信じられないものを目撃し、瞬時に硬直してしまう。

それは『本当の』悲劇の始まりを示すものであった。

• • •
• •
• •
•
•

第12話「悲しき姉妹」（後書き）

手塚と戦い、血で手を染めたかりん姉妹。試練を乗り越えたかに見えた2人でしたが、この後更なる悲劇が繰り広げられる事になるのです。

次回は第13話「悪夢」かりんは気づきませんでした、途中PD Aから発せられていたアラーム。あれは全員に知らされたものですが、その内容はあまりにも残酷なものでした。それは次回明らかに、乞うご期待

第13話「悪夢」

第13話「悪夢」

作・桐島成実

現在の状態

PDA

状態

解

除条件

「グループA」

御剣 総一

(2)

??

JO

KER破壊

姫萩 咲実

(?)

??

?

?

「グループB」

桜姫 優希

(6)

??

JO
K

ER5回使用

色条 優希

(4)

??

首輪
3

個収集

「グループC」

北条 かりん

(A)

??

Qの

殺害

北条 かれん

(Q)

??

2日と

23時間生存

の遭遇

矢幡 麗佳

(7)

??

全員と

「グループD」

綺堂 渚

(10)

??

首輪

5個作動

麻生 真奈美

(J)

??

24時

間共にしたプレイヤーの生存

手塚 義光

(?)

死亡

??

高山 浩太

(?)

死亡

??

葉月 克弘

(K)

死亡

PDA

5個収集

長沢 勇治

(9)

死亡

皆

殺し

【所在不明のPDA・・・『3』3名殺害、『5』チェックポイント通過、『8』PDA5個破壊】

渚と真奈美の2人は、ようやく5階へと続く階段の前へとたどり着いていた。

渚「敵の姿はないみたいね。よし、今のうちに・・・」

渚は階段に足をかける。真奈美も後ろからそれに続く。

真奈美「はあ、はあ・・・」

警戒しながら歩いたり、全力で走ったりの連続で、疲労が濃く出ている真奈美。その為、壁に手を添えた状態で身体を支えながらなんとか階段を上っていく。

カチッ！

真奈美「えっ・・・？」

すると、手を添えていた壁が突如動いたような感触が伝わってきた。そして続けざまに異変が生じた。

ガラガラガラ、ガシャン！！

渚「な、なんなの！？」

慌てて音が聞こえてきた後ろの方を振り向くと、いつの間にか天井から柵が降りていた。

ガラガラガラ・・・ガシャン！！ガシャン！！

しかも柵は次々とこちらに向けて降りてきており、段の一番下から順に塞がれていった。

渚「ま、真奈美っ！？急いで階段を上りきるわよっ！！」

言い終わらない内に、真奈美の手を掴んで引張る。

真奈美「な、渚あゝ!？」

真奈美の抗議じみた悲鳴を無視し、半ば強引に階段を上りきって、なんとか5階のホールへと脱出した。

渚「真奈美! 後ろはどう? 柵は階段の外に降りてきていない!？」

ホールの前方に敵が居ないかどうか、あたりを見渡しつつ、真奈美に問いかける。

真奈美「ちょ、ちょっとまって。・・・はあっ、はあっ、だ、大丈夫! 柵はもう降りてきてないみたい!」

どうやら立て続けに降りた柵は、階段の一番上の段に降りた分が最後だったようだ。

渚「はあ、はあ、つく、敵は居るし、罨まで在るし……。休みたいのが本音だけど、気を緩めていたら今度こそつ……。!」

気を緩め、油断した頃に襲撃にあう。その影響で渚は右肩を、真奈美もあちこちにかすり傷を負っていた。

真奈美「渚あ、わ、私、もうダメえ! 私、足が竦んで」

極度の緊張と疲労がたたって、真奈美はその場に座り込む。

渚「ま、まだよっ、真奈美! せめてどこか休める部屋を探してからつ……。」

真奈美「で、でも、どこへ?」

最初、高山に襲われた際、戦闘禁止エリアに逃げ込んだ事があった2人だったが、そこで部屋の外からクロスボウで狙われる、という事態に陥ってしまった。

幸いそこは無事逃げ出す事が出来たが、当たらない位置からとはいえ、ずっとクロスボウで狙われている状況では、まるで生きている心地がしなかった。

渚「そうね。ドアが2つあってなるべく見渡しの良い部屋、．．．ここなんかどう?」

渚はPDAの地図の一角を指で示す。

真奈美「も、もうどこでも良い。．．．私、考えるのもイヤ!．．．」

渚「真奈美．．．」

どこか暗い影を醸し出している2人だったが、ひとまず部屋に逃げ込んだ。

．
．
．
．
．

真奈美「や、やっと、休め．．．る」

部屋の中を確かめて、誰も居ない事を確認した真奈美は、その場に

へたりと座り込む。

渚「や、やっぱり、2階で武器の山を見た時、何か持ってくるべきだったわね・・・」

真奈美「はあっ、はあっ、はああ・・・」

2人はこの部屋に来るまでの間、武器らしいものを何一つ持っていなかった。

なぜなら2階で部屋一面、武器で飾られた部屋を見て以降、武器らしき物を目撃していないからだ。

それだけに、あの時武器を手にしていれば、もう少し楽な展開に持ち込めたかも、という後悔の念が渦巻いていたのだ。

渚「やっぱり5階にも武器はないわよね・・・」

過度の警戒心の影響か、疲れているのにジツとしているのが耐えられなくなったのか、渚はあたりの木箱をあさりだした。

渚「せめて、PDAのソフトだけでも・・・、っ！！？」

木箱の中からある物を発見した途端、渚の顔が引きつる。

真奈美「はあ、はあ・・・？、っな、渚??？」

真奈美は重たい身体を引きずりながらも、渚の隣へと足を運ぶ。

しかし、渚が凝視しているそれを目撃した瞬間、真奈美の顔は青ざ

めた。

渚「こ、これって・・・銃!!?」

木箱に納められていたのは拳銃が2丁、左右対称に並べられていた。

渚は確かに武器を求めていた。しかし、予想だにしていなかった物が突如目の前に現れ、頭の中が真っ白になっていた。

渚は意を決したかのように、その内の一つを手取る。

真奈美「ほ、本物、なの・・・?」

驚きに顔を強張らせながら、おずおずと尋ねる。

渚「た、たぶん、そうだと、思う」

渚自身も認めたくないのだろう。今の現実を。だからその答えはいまいだった。

暫く固まっていた2人だったが、渚はそれを腰にセットした。

真奈美「渚っ!?!」

突然の行動に戸惑いを隠せない真奈美。それに答えるように静かに口を開く渚。

渚「ここにこれがあるってことは、恐らく他の連中も同じ物を手に入れている可能性が高いわ。だから、こちらでも武装する必要がある

と思うのよ」

銃を持つ事をあっさりと受け入れた渚に対し、真奈美はますます混乱した。

真奈美「ほ、本気なの・・・？」

渚「もちろんよ！こんな所でくたばってたまるもんですかつ！」

震える声でそう尋ねる真奈美に対し、渚はキツパリとそう答える。その様は、かえって真奈美を怯えさせる結果となってしまった。

そんな気まずい雰囲気を打ち破るかのように、突如PDAからアラームが聞こえてきた。

渚「な、何っ？PDA？一体なんのアラームなのっ！」

驚きのあまり、つい大声になってしまふ渚。もしかすると彼女自身、恐怖を紛らわせようと、無意識の内に行った事かもしれない。

真奈美「渚、このエクストラゲームって！」

渚「なんですって！？」

真奈美「ほ、ホラ！」

2人は各々のPDAの画面を覗き込んで驚愕する。

渚「くっ、あなたがスミス！・・・いい加減にしなさいよっ、スミス！」

PDAにはかぼちゃ型の絵柄が表示されていた。葉月から言伝に聞いていて、おおよその事は知っていたが、実際に見るのはこれが始めてだった。

渚「下の方にタッチ！の表示があるわね。・・・押せてコト？」

ピッ

ボタンを押すと、とたんに音楽とそれに合わせてスミスが軽やかに動き出す。

真奈美「！、何コレ・・・？」

スミス「やあやあ！ゲームは楽しんでもらってるかな？ボクも楽しくてウキウキしちゃってるよお」

渚「ぐ、ぬううー！！」

場を無視した勝手な物言いに、渚は齒を強くかみ締める。

スミス「おやおやあ？どうやらペアで居るのが、ワンペア、ツーペア・・・フォーペア居るみたいだね。って、なんかフォーペアだなんて変だよねっ、アハハッ」

一瞬本気でPDAを叩き割ろうとした渚だったが、そこは理性で抑えた。

スミス「じゃあポーカーにちなんで、フォーカードって呼ぼうかな？でさ、そんなキミ達に朗報だよっ！」

スミスはそう言って、背後から大きい看板の様にものを取り出す。

そこに書かれている題名を見た瞬間、渚の怒りに火がついた。

渚「何よコレ・・・！」「仲間を殺してボーナスゲット！」ですつてえ！正気なの！？」

真奈美「な、渚・・・？」

対する真奈美は不安の表情を覗かせる。

詳細を知らずとも、それがロクでもない事は明白だった。

渚「ふ、ふざけるんじゃないわよっ！！」

渚の激高にも、スミスは意に介さない。どころか、さらに煽った。

スミス『ずっと一緒に行動してきたキミの仲間なんだけど、そろそろ仲良しゴツコも潮時なんじゃないかなあ？？裏切りのタイミングを見計らっていた諸君！その判断は正解だ！！今裏切れば数々の特典が・・・！』

真奈美「え、えつとお・・・」

ペラペラとしゃべり続けているスミスの言葉に対し、何と言つべきか迷っている真奈美。その意味する所を意識的に避けているのだろつ。

だがそんな空しいささやかな抵抗も、スミスによって容易く打ち砕

かれていく。

スミス『今仲間を殺せば、次の特典からひとつ好きなものをプレゼントしちゃうよお！？賞金倍増、？強力な武器、？首輪の解除条件の緩和、？便利なPDAのソフト、予備のバッテリー付き・・・』

渚「なっ、な、ななななっ・・・！」

もはや驚きを通り越して、言葉にすらなっていない。そんな渚達に、もうひと押しするスミス。

スミス『あ、そうそう！一番最初に仲間を裏切った賢明なプレイヤーには、初回特典付きだよお！』

その言葉と共に、スミスが軽快に踊りだす。

スミス『何が貰えるかはお楽しみっ でも、きっと喜んでくれると思うよ！』

更にはクラッカーを取り出し、本体を右手に、伸びているひもを左手でそれぞれ持ってみせる。

スミス『さあーって、それじゃ「仲間を殺してボーナスゲット！」スタートオー！』

ひもを引張り、クラッカーをパァン！とけたたましく鳴らしたスミス。

それが開始の合図だった。

真奈美「な、渚っ！」

受け入れたくなくても、その意味を受け入れてしまった真奈美。とっさに渚の名を呼んだ。

渚「つくうゝゝ！バカにしてえゝ！！」

渚は怒りでどうにかなりそうだったが、それをグツと堪える。

真奈美「渚っ！渚は私を裏切ったりしないよね！ねえ、そうでしょう！！」

真奈美は訴えかけるように叫びだす。

渚「当たり前よっ！どこの誰が、こんな安っぽい誘惑に乗るってのよ！」

それを示すかのように、あたりは再び静寂を取り戻した。

2人は固まったまま、10秒、20秒、30秒、そして1分が過ぎようとしていた。

渚「・・・・・・・・」

真奈美「・・・・・・・・」

重苦しい空気があたりを包み込む。やがて、その緊張に耐えられなくなったのか、真奈美が不自然なほど明るく答える。

真奈美「そ、そうだよねっ！こんなバカげた事、乗る人なんかいな

いよねっ！」

しかし、それを打ち破ったのは、渚の持つPDAから発せられるアラームだった。

真奈美「な、何！？・・・」

真奈美のPDAは反応していない。ということは、そのアラームは全く別の意味を携えているのだろう。

渚は再びPDAの画面を見た。

渚「え・・・？」

最初、それを目にした時は、己を疑った。

真奈美「ど、どうしたの・・・？」

嫌な予感が2人をよぎった。そしてそれは現実のものとなった。

渚「ま、真奈美・・・せ、生存者の数が・・・！減ってる！！」

渚のPDAには、生存者数を示すPDAが組み込まれている。

先ほどまでは、そこに『10』の数値が刻み込まれていた。つまり10人生存している事を示していた。

ところが、それが『9』という数値に変わっていたのだ。

真奈美「そ、そんな・・・！？」

2人は只ならぬ戦慄に捕われた。

そして更に、溝の深みはますます増していく。

渚「あぁっ！！またアラームがつ・・・！は、8人！？」

真奈美「あ、うつ、くうつ・・・！」

何事もなく終わってほしい、その希望は絶望へと塗り替えられていった。

渚「な、7人！！？こ、こんな・・・」

真奈美「や、やめて、もうやめてっ・・・！！」

現実はまだにも残酷すぎた。そして・・・。

渚「ま、また・・・！ろ・・・」

真奈美「もういやぁぁぁっ！！？」

渚の声を、真奈美の絶望の咆哮が部屋中に響き渡る。

真奈美「裏切ったのよ！！エクストラゲームに乗ったのよっ！！！！殺しあうのよ！！？みんな殺しあうの！！最後の1人になるまで殺し合いするのよ！！？」

完全に気が動転し、大声を張り上げる真奈美。その面影は、もはや元の可愛げな真奈美ではなかった。

渚「真奈美！真奈美いつ！！」

「
渚はなだめようと必死で呼びかけるが、真奈美は気づいてすらいな
い。」

真奈美「いやあぁっ！！死にたくない！！もう嫌よ！私っ・・・。
死にたくないよぉ！！？」

渚「真奈美！落ち着いてっ！？」

真奈美は、伸ばしてきた渚の手を、思い切り振り払う。

真奈美「触らないでっ！！渚だって私を殺すつもりなんでしょっ
っ！！？」

渚「ま、真奈美っ！？」

そして木箱に置かれてあったもう一つの銃をわしづかみにして、渚
に向けて銃を向ける。

渚「銃を降ろして！！真奈美！？どうして私に銃なんか向けるの！
っ？」

渚も平静さを完全に失っていた。だから真奈美が何を考えて、どん
な気持ちでいるのかさえも分からなかった。

真奈美「だって！！私知ってるんだもん！渚が、お金が欲しくてた
ままないんでしょう！？家族を助けたいんですよ！！？」

真奈美が言っているのは、ゲームの勝利者となれば賞金が貰える、という事を言っているのだろう。

更に先ほどのエクストラゲームに乗れば、賞金は更に倍増になる。

渚「お金は欲しいわよ！でも、こんなことでお金を貰ってもしょうがないじゃない！！本当にくれるかどうかわからないのに。だから真奈美！銃を降ろすのよ！！」

真奈美「そんなの嘘っ！！1人で帰れば20億円よっ！渚のお父さんの借金も半分以上返せる！私っ、私・・・知ってるんだから！！」

カチカチ・・・

真奈美の持つ銃を持つ手が震えている。その手、その表情は、完全に怯えきっていて、震えが一向に止まらない。

渚「ダメ！？引き金から手を離して！」

真奈美「嫌よっ！！」

渚「お願い真奈美！撃たないで！私はっ、あなたを殺そうだなんて思っていないのよ！！」

真奈美「う、うるさい！うるさいっ！！」

ガン！！

銃を持つ手に力がこもり、はずみで引き金を引いてしまっつ。

渚「!!!」

反射的に、思わず渚も銃を構える。

真奈美「やっぱり銃を向けたわね！渚！？」

渚「ち、違う！ゴメン！！」

人一倍反射神経が鋭く、頭の回転が良い渚のとっさの判断は、今回のパターンでは最悪の事態を招く結果になってしまった。

真奈美「や、やっぱりそうなんだ！！うつっ！渚！やっぱり私を撃つんだ！！？」

ヒステリックな悲鳴を挙げ続ける真奈美の目には、もはや敵味方の区別もつかなくなっていた。

ただ動くもの。それが自分自身に襲い掛かってくる。そんな錯覚に捕われていた。

渚「こ、これは・・・！いきなり撃たれたからつい反射的に・・・！」

渚は口ではそう言うものの、銃口は真奈美に向けたままだった。

真奈美「私を撃ってお金にするつもりなんですよ！！どうせそんなエクストラゲームなんですよ！？そ、それとも私を殺して首輪を作動させようって魂胆なワケ！？」

渚「そんなつもりはないのよ！？真奈美！」

真奈美「私を殺して、家族のところに帰るんでしょ！！・・・なん
だって出来るものね、愛する家族の為なんだもの。あれだけ、あれ
だけ必死に守ってきた家族なんだもの・・・！！！」

何かにとり憑かれたかのように、呪文のごとく言葉を紡ぎ続ける。

渚「それは違うのよ真奈美っ！！私はあなたのことだって・・・」

真奈美「うるさい！うるさい！！うるさいっ！！！」

叫び続ける真奈美は、やがて鬼のような形相と鋭い眼差しを、渚に
向けて放つ。

真奈美「・・・やってやるわよ！！撃たれる前に撃てばいいんだわ。
私1人なら、誰も、殺しになんか、こないんだからっ・・・！！！」

もはや呼吸のリズムも大きく狂い、ぜえぜえと荒い息を繰り返す。

追い詰められた真奈美の精神は崩壊寸前だった。いや、もう崩壊し
始めているのかもしれない。

渚「待って！！そんなの駄目よ！！待って」

2人はほぼ同時のタイミングで、銃の引き金を引く。

そして銃から弾が飛び出そうとした所で、それは起こった。

桜姫「ダメえええッッ！！？」

突如ドアから飛び出した一つの影が、勢いそのままに渚の身体を押し退ける。

渚「！！？」

真奈美以外の事が目に入っていなかった渚は、完全に虚を突かれ、抗うこともなく、そのまま床に押し倒される。

バン！！

その衝撃で、銃から弾が発射される。

だが、床に倒れた影響で、床に向けて発射される形となった。

ガッツ！！

そのままコンクリートの床に弾が当たった。それと同時に、渚の手からの銃が零れ落ちる。

そして、真奈美が撃った弾は、的を大きく外れ、あさつての方向へと飛んでいく。

真奈美「あ、あ、っ・・・」

声とも嗚咽ともつかないうなり声を挙げ続ける真奈美。そこへ、

優希「やめて！！お姉ちゃん！！親友なんでしょ！！大事な人を撃つちゃダメだよっ！！？」

桜姫とほぼ同時に飛び出した優希は、真奈美の身体に思い切り飛びつく。

真奈美「あゝ、ヴ、う、うるさいっ!？」

真奈美は再び銃を撃つべく狙いをつけようとするが、優希が腕にしがみ付いているので、狙いが定まらない。

ガン!!

狙いが定まらないまま、再び銃の引き金を引く。

ヒュン!!

しかし、やはりどこにも当たらなかった。

桜姫「・・・っ!!」

桜姫は、倒れた渚をそのままにして再び立ち上がり、まるで躊躇もなく堂々と真奈美へと迫っていった。

その動きは威圧的で、真奈美は再び銃を構えようとジタバタするのだが・・・。

パンツッ!!

銃撃ではない、乾いた音が部屋に響いた。

桜姫が真奈美の頬を思い切り叩いたのだ。

桜姫「いい加減にしなさいっ！！あなたが銃を撃つてもなんにもならないのよっ！！？」

それはまるで子供に叱り付ける親のようだった。ボランティアで長く活動してきた彼女は、子供のしつても得意だった。

真奈美「うつ・・・」

気圧されそうになる真奈美だったが、再び銃を構えようと手を動かした。

桜姫「こんなものっ・・・！！」

パシッ！！

桜姫は平手打ちを、今度は真奈美の銃を持つ手に向けて当てられた。

力強く握っていたはずの銃は、力なく床へと弾き飛ばされる。

桜姫「あなたの大切な人に当たったらどうするの！！」

渚に対する恐怖心さえも吹き飛ばす勢いで、桜姫は真奈美の身体を揺さぶる。

真奈美「大切な、人・・・？」

すると、かすかに真奈美の目に光が戻り始めた。

桜姫「そうよっ！！あなたが殺してしまったら、もう2度と言葉を

交わすことも出来ない。謝ることさえも。それでもいいのっ!？」

真奈美「あ……う」

力が抜け切った真奈美の身体は、ユサユサと揺すられる力にまるで抵抗せず、ブラブラと大きく揺れ続ける。

優希「……………」

優希は、そつと真奈美から離れて、今度は渚の方へと駆け寄った。

優希「えと、お姉ちゃん。あの人を救えるのはお姉ちゃんしかいないと思うの。だから……」

そう言つて、優希は渚の手を取る。

渚「え……? あ……!」

ぐいと引張られ、そのまま立ち上がる。

渚「え、えと……」

戸惑う渚に対し、優希はゆっくりと微笑みかける。

優希「あの人は怖がつてるだけなの。決してお姉ちゃんを嫌つてるわけじゃないの。だから……」

そこまで言われた時、渚は今、自分が何をすべきかに思いついた。

そして、自分の意思で足を1歩、2歩と真奈美の元へと進んでいっ

た。

真奈美「……………」

怒りや憎しみ、絶望。そんな『トラワレ』から救い出された真奈美は、視点も定まらず、ただぼうつとしていて、渚に気づいていない。

そんな真奈美に渚はゆつくりと近づいた。桜姫はそつとその場を離れると、入れ替わるように渚は、真奈美を抱きしめた。

渚「ゴメンね。真奈美の気持ちに気づいてあげられなくて……」

それは謝罪の言葉。そして、再び親友としてやっていこう、という証でもあった。

それは、真奈美の内に潜んでいた恐怖をきれいに拭い去った。

真奈美「な、渚……。ご、ごめんなさい。わ、私こそ……！」

2人の目には涙が浮かんでいた。気持ちを共有するかのように、強く抱擁し続ける。

親友2人の仲を取り持った功労者である優希2人は、良かったとばかりに微笑んだのであった。

・
・
・

・・・

それからどれだけの時間が過ぎたのだろう。友情を再び取り戻し、拉致される前の明るい2人に戻った渚と真奈美と共に、優希達は行動を共にしていた。

その最中、お互い自己紹介をし、今の状況を整理しつつ、先を急いでいた。

桜姫「そうなの。5階の警備室で私の、その、恋人が居るはずなの」

先頭を歩く桜姫は、顔だけを後ろに向けてそう言った。

渚「それが、総一、さん？」

桜姫「そっ」

自己紹介をした際、お互い高校生だった事もあってか、すぐに打ち解けることが出来た。

桜姫「そこで落ち合うつて約束したの。それで・・・」

桜姫はそう言うものの、その表情は暗い。それは優希も同じで、ポツリと言葉を漏らす。

優希「生存者数が6人……。私達が4人居るから、残りはたったの2人・・・」

PDAに表記されている数値を信じるならば、総一、咲実、かりん、かれん。その内最低でも2人、既に亡くなっている計算になる。

桜姫「総一・・・」

目的地に近づくにつれ、不安は増大していく。

渚「大丈夫、うん、きっと大丈夫よ!」

根拠のない自信を示す渚だったが、それが励ます為の優しさだという事を、桜姫は理解していた。

桜姫「うん、ありがとう」

そして警備室の目の前にたどり着いた。ドアの前には誰もいない。

桜姫「・・・っ」

意を決し、ドアノブに手をかける。そしてドアを開き、中を覗く。

桜姫「・・・!!」

そこで見たものは、あまりにも信じがたい光景だった。

1人、部屋の真ん中で突っ立っている総一。彼は生存していた。問題なのは、彼が凝視しているあるモノ。そして、なぜか手に持っている銃。

そして総一の視線の先には・・・。

桜姫「総一・・・？」

そこには全身血塗れで床に倒れている咲実の姿だった。

・
・
・
・
・

第13話「悪夢」(後書き)

謎だらけの今回のエピソードですが、次回いよいよその全貌が明らかになります。次回は第14話「真相」ですっ

あ、その前に『特別ステージ』を用意いたしましたので、先にご覧くださいな。

【特別ステージ】司会者：スミス&ディーラー

スミス『やあ！観客のみんな！』

ディーラー「ようこそ、いらっしやいました。ここはお客様方専用の【特別ステージ】でございます」

スミス『さあーって！それじゃ、エクストラゲーム場外戦【BETシステム】今から詳細をを説明するよっ』

ディーラー「進行は、私ことディーラーと、マスコットのスミス君に協力してもらいましょう」

スミス『はあーい、こちらこそよろしく。ところでボク達、今回は大活躍だったよね？』

ディーラー「共に裏方に徹しておりますが、ゲームが滞りなく進行している事に内心、安堵しております」

スミス『そうそう！ボクなんか、プレイヤー達を陥れたり、陥れたり、陥れたり・・・、と、とにかく、色々頑張ったわけなんだよねっ！』

ディーラー「そうですね・・・ではなくてですね、スミス君。今回はお客様方にも、このゲームに参加してもらおうと、こうして【特別ステージ】を用意させていただいたわけです」

スミス『あゝ、そうだったねえ。じゃ！さっそく内容を説明するでしょうかな？』

ディーラー「まず、お客様方は各々、賭けコインを【100枚】ずつ所持しております」

スミス『でさ、このコインを使つて、ジョーカーが誰なのかをBETしてほしいんだよね。推理小説みたいに答えが隠されてるわけじゃないから、怪しいなあ、と思う人物をBETしてみてよっ』

ディーラー「何枚賭けるかは自由ですが、【複数人BETは不可】とさせていただきます」

スミス『さあて、キミ達は一体誰に、何枚賭けるのかなあ？BETは強制じゃないけど、もしよかったら、感想文を通してBETしてみてね』

ディーラー「賭けるか賭けないかは、あなた次第でございます」

スミス『不謹慎な遊びじゃないかって？それは言わない約束だよ？』

ディーラー「以上でございます。それでは・・・」

スミス『つて、ちょ、ちょっと！待つてよ』

ディーラー「ん？どうしました？」

スミス『何か特典とか賞品とかは出ないワケ？』

ディーラー「賞品・・・ですか？」

スミス『そうそう。例えばさ、見事ジョーカーの正体を当てたキミに対してのみ、解答編をご覧いただくよぉ』　みたいな・・・』

ディーラー「・・・そんな事を言ったら收拾つかなくなりますよ?」

スミス『うゝん、じゃあさ、見事当てたキミ達にはもれなく、今回出場したプレイヤー達から1名、もれなくプレゼント!!・・・とか?』

ディーラー「プレイヤーを、ダンボールが何かで梱包してお届けするわけですか?」

スミス『そういうことっ!あの子やこの子を生身でそのまま頂けるなんて、キミ達はなんて幸せなんだぁ』

ディーラー「おや?通信が・・・。もしもし、こちらディーラー」

オペレーター『す、すみません。先ほどの賞品の件に関してなんです、参加したプレイヤー達からクレームが・・・!』

・・・

麗佳『そんな事されるくらいなら、舌嚙んで死んでやるわっ!!』

咲実『ゼロ距離射撃で瞬殺します』

優希『カボチャ頭のスミス君を食べちゃうぞぉ』(怒)』

桜姫『料理しちゃいます。包丁はここに・・・(笑)』

かりん『たつ、かつ、たた・・・』

かれん『噛みすぎだよ、お姉ちゃん・・・（汗）』

・・・

ディーラー「ものすごい反発ですね・・・」

スミス『むがー！！言いたいこと言ってくれないか！？・・・うゝ、それじゃ、ボクが一肌脱いで・・・おや？』

ディーラー「これは・・・？予告状？？」

スミス『えーと、なにに。このステージの終了と同時に、スミさんの内部に仕込んだ爆弾が爆発します！？byジョーカー！？』

ディーラー「大変な事になりましたね・・・」

スミス『あわあわ、あわわ・・・』

ディーラー「まあ、シナリオ上、スミス君の出番はこれで終わりのはずだから、問題なしか・・・」

スミス『そ、そんなあゝ！！ひ、人でなしっ！？なんとかしてよ！？』

ディーラー「それでは、皆様方のBETを宜しくお願いいたします。では・・・」

スミス『ちょ、ちょっとおゝ！？行かないで！あつつつ！！？』

ズウウウウン！！！！

・
・
・
・
・
・

？コインを最大100枚にて、ジョーカーだと思われるプレイヤーをBETして下さい。何枚賭けるかは自由です。

？複数人BET不可。あくまで1名に対してのみBETして下さい。

？BETする意思の有無は、感想文を通して行って下さい。もちろん任意です。

？このエクストラゲームに対するペナルティは一切ございませんので、誰でも安心して参加いただけます。

第14話「真相」

第14話「真相」

作・桐島成実

【残りの生存者数・・・6人/13人】

現在の状態

PDA

状態

解

除条件

「グループA」

御剣 総一

(2)

健康

JO

KER破壊

姫萩 咲実

(?)

??

?

?

桜姫 優希

(6)

健康

JO K

ER5回使用

色条 優希

(4)

健康

首輪3

個収集

綺堂 渚

(10)

健康

首輪

5個作動

麻生 真奈美

(J)

健康

24時

間共にしたプレイヤーの生存

「グループC」

北条 かりん	(A)	? ?	Qの殺
害			
北条 かれん	(Q)	? ?	2日
と23時間生存			
矢幡 麗佳	(7)	? ?	全員と
の遭遇			
手塚 義光	(?)	死亡	? ?
高山 浩太	(?)	死亡	? ?
葉月 克弘	(K)	死亡	PDA
5個収集			
長沢 勇治	(9)	死亡	皆
殺し			

【所在不明のPDA・・・『3』3名殺害、『5』チェックポイント通、『8』PDA5個破壊】

桜姫「総一・・・？」

ドアの前に先頭に立っている桜姫は、今日の前に展開している光景を見て、瞬時に固まってしまう。

総一「ゆ、優希・・・？」

呼ばれた総一は、まるでブリキのオモチャのように、ゆっくりと首を回して優希達の方を向く。

優希「どうしたの？」

桜姫の後ろに居た優希は、横に飛び出して総一の方を向く。

優希「えっ・・・！！さ、咲実お姉ちゃん！？」

優希の表情が一瞬にして強張る。それを察知し、桜姫が優希を抱きかかえるようにして、視線の向きを変える。

桜姫「だ、ダメッ！！見ちゃダメよ！？」

優希「え！？で、でも・・・」

優希には見えないように、ギュッと抱きしめる桜姫。そして顔だけを総一に向ける。

桜姫「一体何が・・・」

そう言いきる前に、総一はハッとした表情を浮かべ、咲実の方に向き直る。

総一「そ、そうだ！咲実さんっ！？」

思い出したかのように慌て出した総一は、持っていた銃を落とし、咲実の方へと駆け寄る。

総一「脈は・・・ある！い、生きてる！！」

その様子を見た桜姫は、優希を後ろに居る渚達に任せ、自分も咲実の元へと駆け寄る。

桜姫「話は後！今は手当てをしないと・・・。総一！手伝って！」

総一「お、おうっ！」

桜姫は持っていた救急箱を取り出し、傷の状態を確認する。

桜姫「腹部に銃弾が一発・・・。他に怪我はないみたいね」

ガーゼと消毒液を取り出し、傷口に当てる。

咲実「・・・うつ！」

咲実がうめき声を挙げる。意識を失っているものの、やはり生きてはいるようだ。

桜目「・・・これで良し。ひとまず毛布を床に敷いて、そこに寝かせるのが良いかしらね」

渚「毛布なら、ここにあるわ！」

渚が毛布を取り出し、それを床に敷く。

総一「よいしょっと、これでいいか？」

桜姫「うん」

応急手当ではあるものの、これで命に危険はないだろう。

桜姫「・・・それで？」

唐突にそう切り出した桜姫。その問いに気づき、総一は答える。

総一「あ、ああ。俺と咲実さんは、この警備室で優希達が来るのを待っていた」

総一の話ではこうだ。

総一は寝ている咲実を部屋に残して外に出て、咲実の居る部屋のドアから少し離れた位置に陣取り、ずっとあたりの様子を窺っていたそうだ。

こうすれば、万一敵対的な人物と遭遇しても、警備室に入られる前に対応が可能だ。

又、咲実が居ることを悟られる危険が減るだろうと考えた。

そうして数時間の時が流れ、何も異常がないので眠気を感じ始めた頃、突如咲実の居る警備室から銃声が聞こえたらしい。

慌てて警備室に入ると、血塗れの咲実が床に倒れており、銃がすぐそばに落ちていたらしい。

そこに桜姫が来て・・・という経緯だ。

桜姫「そっか」

その場に居た他の3人はリアクションに困っていたものの、桜姫は納得したかのように大きく頷く。

そして総一の元へと近づき、優しく微笑んだ。

桜姫「私は信じてるから。総一の事」

それは嘘偽りのない言葉だった。なぜなら総一は、人を撃つておいて平気な顔をしていられるほど強くない事を、桜姫は知っていたからだ。

もし嘘をついていたら、それがすぐに顔に出る事も、付き合いの長い桜姫は判っていたからだ。

真奈美「で、でも、あの、その・・・」

するとオロオロしていた真奈美が、おずおずと尋ねた。

真奈美「もし、総一さんの言うとおりだとすれば、咲実さんを撃つたのは一体・・・？」

当然ながらその疑問が出る。

桜姫「咲実さんを撃つたのは誰かは分からないわ。でもね、総一が聞いたつていう銃を撃った人物は分かるわ」

渚「・・・え??」

そして、桜姫はある人に視線を向ける。

桜姫「総一が聞いた銃声。あれを撃つたのは・・・咲実さんよ」

桜姫は咲実の方を見る。彼女は意識を失ったままだった。

渚「ど、どういう事!？」

渚の疑問を打ち消すように、桜姫は一つ一つ順に説明していく。

桜姫「消去法よ。ゲームの参加者の内、生存者数は6人。私達4人はさつきからずっと一緒に居たから違う。そして総一も違うとなれば、残っているのは咲実さんだけ」

総一「え!?!いや、待ってくれ、優希!」

驚きの声を挙げたのは総一だ。

総一「それじゃ、咲実さんは自分で自分を撃つたつてのか?そんなバカな!？」

総一の疑問はもつともだった。それじゃただの自殺行為だ。

渚「そ、そうよ。そう考えるよりも、総一さんが、その、撃つた、と考える方が自然じゃない?」

すると、おずおずと真奈美が言い出した。

真奈美「も、もしかして、私達以外に撃った人が居るのかも??」

優希「私達、以外・・・?」

真奈美「う、うん。もしかして誘拐犯とか」

総一「あ、そうか！すっかり忘れてた！」

誘拐犯が、恐らくエアードクトから咲実を狙い撃ちをした。その事に咲実は何らかの方法で事前に気づいて、この部屋で手に入れた銃で発砲した。

だが、相手の方が上手で、咲実の方が撃たれてしまった。

桜姫「ううん、そうじゃない」

そうキツパリと否定する。どうやら彼女はすべて分かっているようだった。

桜姫「咲実さんの身体、全身血塗れでしょう?でも治療した時出血はほとんど止まった。撃たれたばかりのはずなのに、血が固まってるのはおかしいわ」

桜姫は続ける。

桜姫「そもそも、あれだけ大量に出血していたら、今頃命はなかったと思うわ。それに・・・」

桜姫「腹部にキズを負っただけなら、腕や膝にまで血がつくのは不自然よ」

たしかに、桜姫が指摘した箇所と、他にも手の平や足のつま先にまで血がベツトリとついていた。

手は撃たれた時に思わず触ったと考えられるが、他はありそうもない。

桜姫「誰かが咲実さんを引きずったとも考えられるけど、床にはそんな跡はない」

確かに、床には血らしきものはほとんど付いていない。

桜姫「しかも、腹部から流れ出た血が、スカートの方向に向かって滴り落ちている」

総一「ん？という事は・・・」

桜姫「撃たれた後も、咲実さんは立っていた。・・・自分の足で」

総一「！！」

そうか！そうだった！？

撃たれてそのまま床に倒れこんだのなら、足の方に向かって血が滴り落ちるのは変だ！

引きずられたワケでもない以上、自分の足で立っていたと考えるの

が自然だ！

桜姫「恐らくこうだと思うの。咲実さんは総一が部屋に居ない事を確認して、あのエアードクトから抜け出した」

桜姫「そして、誰かと戦って相手の返り血を浴びたんだと思うわ。その際、自分自身も銃で撃たれた。それを手当てもせず再びエアードクトを通してこの部屋に戻ってきて、PDAの首輪の探知か何かで、私達が来るのを待ち構えて、銃を撃つ」

桜姫「そうすれば、後からやってきた私達は、総一が撃ったものと勘違いをする」

確かに筋が通っている。けれども、桜姫自身不可解に思っている事が1つあった。

咲実が犯人だとしても、あまりにも自らの命を粗末にしすぎているのだ。

自らの怪我の手当てもせずに、そんな無理をするだろうか？

それに、いくら私達を貶める為だとはいえ、それ自体に何の意味があるのだろうか？命を賭けてまで行う事？

それが理解出来なかった。それとも、何か重要なコトを見落としているのかも・・・？

しかしその疑問はすぐに霧散される。

??「なあんだ。バレちゃいましたか」

とたんに、別の角度から声が聞こえた。

総一「咲実、さん・・・」

さつきまでの気絶した様子はどこへやら。まるで何事もなかったかのように立ち上がる咲実。

咲実「結構頭が切れるんですね。見直しました」

総一「じゃ、じゃあやっぱり・・・」

総一は未だに信じられなかった。目の前に居るのは別人じゃないかと思うほどに。

咲実「そうですよ。桜姫さんの言うとおりです。私はこの部屋を抜け出して殺したんです。・・・ゲームマスターの高山さんに、金髪の女性。そして、かりんちゃん達も」

総一「なっつ！！！！？」

それは今まで聞いたどんな内容よりもショッキングだった。

咲実「うふふつ、かりんちゃんの泣き叫ぶ姿。あなた達にも見せたかったわ」

・
・
・
・
・
・

咲実「あなたが今回のメインマスターですね？」

控え室で一服しながら休んでいた高山は、声が聞こえた方を向く。

高山「む、お前は……。そうか、お前が今回のサブマスターか？」

咲実「はい、そうです」

咲実は微笑みつつ、そう答える。学生服の姿も相まって、高山の目にはどこからどう見ても普通の学生にしか見えなかった。

高山「そうか。まだ若いな。新入りか？」

咲実「はい。今回初めてサブマスターを務めさせていただいてます、
姫萩咲実と申します」

そう言うと、深々とお辞儀をした。対する高山はふう、と煙を吐き出した。

高山「……。高山だ。これからよろしく頼む」

まるで興味がない事を示すように、その表情には変化がない。

咲実「はい！……あの、これは先ほど持ってきたものなんですけど……」

そう言うと、一本の缶コーヒーを取り出した。それを高山に向けて

差し出す。

高山「気が利くな。ありがたく頂戴しよう」

それを受け取り、缶のフタを開ける。

高山は歴戦のゲームマスターだ。そのしぐさには隙がなく、油断もない。そう、『舞台』の上では。

慣れたゲームマスター故の盲点。それは舞台の袖では安全だと言う錯覚。

だから、気付くのが少し遅れた。

高山「・・・うおっ、ぐほっ！？ど、毒かつ！！？」

吐き出そうとする高山だったが、無駄な抵抗だった。

次第に力が抜けていき、持っていた煙草を落とす。悲鳴を挙げる余力もないまま、イスから崩れ落ちていく。

咲実「おいしかったですか？」

その台詞が当人に聞こえたかどうかは分からない。が、それは完全にあざ笑っているが故の発言だ。

咲実「缶コーヒーと引き換えに、あなたのPDAを貰っていきますね」

高山のPDAを取り出し、画面を操作する。

咲実「あら？この近くに首輪の反応が有るわね。せつかくだからこの人には辱めを受けてもらいましょうか」

咲実はその言い、亡き者となった高山の身体を引きずっていく。

咲実「よいしょ、よいしょっと」

控え室を出て、通路に一角にたどり着いた所で、身体を解放する。

咲実「ふう。それでは、じっくりとご覧下さいな。その先に居る誰かさん？」

咲実はその言い捨て、その場を後にする。

手塚「・・・ん？誰かいやがるのか？」

・
・
・
・
・
・

ガン！！

部屋に空気が弾けるような音が響いた時、かりんは驚きの余りその身をびくつと震わせる。

しかし本当に驚いたのは、今まで抱擁していたはずの相手、かれんの抱きしめる腕が、とたんに弱まったことだった。

かりん「え・・・？か、かれん・・・？」

何が起こったのか理解出来ず、かれんの方を向く。

抱きしめ合っている格好の為、かれんの表情を窺い知ることとは出来ない。やむなく、抱いていた身体を引き離し、かれんの顔が見える位置に持っていく。

かりん「これは、何・・・？」

それを見た瞬間、かりんの頭は真っ白になり、何も考えられなくなっ

た。かれんの額には、一つの穴が空いていた。一瞬、見間違いなのかと思っ

た。しかし、見間違いでないことを悟ったのは、その穴から赤い何かが流れ出てからだっ

た。かりん「う、あゝ！？う、うわあああああつ！！？」

脳が再び働き始めた途端、かりんは張り裂けんばかりの悲鳴を挙げた。

しかし、それをあざ笑うかのような声が、後ろから聞こえてきた。

咲実「あらあら。当たっちゃったの？私の腕が悪いせいね、ゴメンね」

その声に導かれるように、かりんはゆっくりと振り返る。そしてその声の主を見た途端、その名を呟く。

かりん「咲・・・実、さん・・・？」

咲実「元気にしてた？」

まるで友達に話しかけるような気軽さで、咲実は微笑む。しかし、その明るい表情とは裏腹に、右手には銃が握られ、銃口をかれんの方に向けていた。

その事に気が付いたかりんは、咲実が撃った、という事を遅まきながら理解した。

かりん「・・・なっ！？なんで！？どうして！！咲実さんっっ！！？」

かりんはかれんを両手で支えたまま、咲実に大声で訴えかける。

咲実「ん」とね。本音を言うと、かれんちゃんの死を目撃して、かりんちゃんがどんな反応をするのかなあって。それを見てみたかったの」

まるで悪びれる様子もなく、アッサリとそう言っただけ。

咲実「けれどまあ、私の銃を撃つ腕が悪いのも確かだけれどもね」

ガン！！

咲実は2発目を発射した。そしてそれがかりんの横をすり抜け、か

れんの身体に直撃する。

かりん「い、いやあああつ！！かれん！かれんっ！！」

それがかれんに当たったことを認識したかりんは、もはや自力で動くことが叶わないかれんの体を掴んで必死に揺さぶる。

咲実「ホラ、もう死んじやってるのに、また当たっちゃった」

かりん「や、やめてえっ！！」

かりんは、もはや死んでいるという現実にも構わず、かりん自身の背中にかれんを隠して庇おうとする。

咲実「へえ、さすがお姉ちゃんね。じゃあ、頑張つて守り抜いてみせてね」

咲実は今度はかりんに銃口を向ける。

かりんは、かつて手塚を刺してしまったクロスボウの矢を再度拾い、咲実に向けて投げつけようとするが、咲実の方が動きが早かった。

ガンン！！ガンン！！ガンン！！

間髪入れずに銃を何度も撃つ咲実。そして銃弾はそれぞれ、かりんの右手、左腕、そして左肩を次々と撃ち抜く。

かりん「あぐうっ！！ううっ、あああつ・・・！！」

数発喰らったにも関わらず、かりんはその場を動こうとせず、かれ

んを庇うのをやめようとしなない。

その間、物凄い表情で咲実を睨み続ける。

咲実「あらあら、こわい目ね。そんな目は潰してあげなきゃ」

そして言葉通り、かりんの目に照準を合わせる。

??「やめなさいっ!!」

天井から飛び出た誰かが、銃を撃とうと狙いを定めていた咲実に直撃する。

ガン！！

反動で銃の引き金を引く咲実。しかし狙いが完全にそれた弾の軌道は、かりんの真横を通り過ぎる。

その誰かは、ぶつかったはずみで、咲実と共に折り重なるように床に転がった。

咲実が衝撃をまともに喰らい、握っていた銃を落としてしまう。

咲実「くうっ、っ!」

一瞬痛みで呻いた咲実を無視し、その人物はかりんに向けて叫ぶ。

麗佳「今よ!?早く逃げなさいっ!!」

それはエアーダクトから飛び出した麗佳だった。

彼女はダクトに居たこともあり、今起こっている状況を把握するのに時間がかかった。が、理解してからは、己の身を案じることもせず、咲実とその身体を投げ出したのだ。

咲実「なんだあ、あなただったの」

視線を麗佳に向けた咲実は、すぐ気を取り戻して、見下すように流し目を向ける。

咲実「てつきり丸焼けになったのかなあ、って期待してたんだけどなあ」

麗佳「！？あれは、部屋に放火したのはあなたの仕業だったのね！？」

身を起こした麗佳は、そのまま咲実の身体を掴んで、組み伏せようとする。

麗佳もナイフを所持していたが、咲実とぶつかった瞬間に取り落としてしまった。だからナイフを拾うより、そのまま掴みかかる方が先と瞬時に判断して、咲実の両腕を掴み取る。

麗佳「何をしているの！？早く！！」

かりんに向かって叫び続けるが、あまりの急展開にどうして良いかわからず混乱する。

対する咲実も負けじと、全力で取っ組み合いをする。

咲実「なーんてね」

咲実は突如身を前に起こすと、上にのっかかっている麗佳の頭に思い切り頭突きを喰らわせた。

麗佳「ぎゃあっ!？」

視界が一瞬塞がれた麗佳。しかしそれが致命的だった。

麗佳「!？それは」

視点を取り戻した麗佳が見たものは、いつの間にか咲実の左手に握られているアイスピックだった。

それには見覚えがあった。最初の頃、葉月と出会った時に拾った細長い針。

それと寸分変わらない細長い針状のものが、麗佳の左胸に目掛けて突きつけられた。

ザシュッ!!

麗佳「あぐうっ!!!？」

細長いアイスピックは、さほどの抵抗もなく麗佳の身体に吸い込まれた。

そしてトドメを刺さんとはかりに、アイスピックの柄を握っている手に力を込め、少し角度を変えて更に奥深く突き刺した。

麗佳「ご、ごぶうつ!!?」

吐血し、入っていた力が失われていく麗佳。咲実はいすピックを引き抜くと、小さな傷跡から大量の血が噴水の如く噴出し、それが麗佳と下敷きになっている咲実の身体に降り注ぐ。

そして器用に麗佳の身体をすり抜け、麗佳が掴んでいる両手から逃れる。

麗佳は力なき人形のごとく、そのまま床に崩れ落ちる。

かりん「う、動くなっ!?!」

立ち上がった咲実に、かりんは銃を向ける。咲実が取りこぼした銃を拾ったのだ。

咲実「あら?失敗しちゃったなあ……。せつかくのお楽しみはここまでね」

銃で狙われているにも関わらず、余裕の笑みを浮かべる咲実。

かりん「お、お楽しみっ……。!?!」

さっきまで怒りに打ちひしがれていたかりんだったが、もはや怒りを通り越して絶句していた。

こ、この女、正気じゃないっ!!

あまりに人の道から外れている咲実に対し、今まで命を狙われていた時とは別の恐怖に駆られていた。

命を狙われる事に対する恐怖ではない。こんな人間が存在する事に
対して感じた恐怖だった。

咲実「さあ、私は他に武器を持っていないから、今がチャンスよ」

咲実はなぜか、かりんに対して銃を撃つようと煽る。

い、一体何なの！？な、なんでこんな事が平気で出来るのっ
っ！？

目の前に居る咲実と名乗る人物に対し、信じられないモノを見るよ
うな視線を向ける。

咲実「ほらあ、私を殺さないと、またかれんちゃんが酷い目に遭っ
ちゃうわよ？」

かれんの名を聞いた瞬間、再び怒りが腹の底から噴火した。

咲実「まず、指を一本ずつ切り落として」

かりん「そ、そんな事させないっっ！！？」

咲実の言葉を打ち消さんばかりの勢いで、銃の引き金を引く。しか
し

カチッ！カチッ！

かりん「なっ！？弾切れ・・・？」

かりんは愕然とした。咲実が持っていた銃の弾は占めて6発。それらを撃ちつくした銃は、もはやただの金属の塊と化していた。

咲実「うふふつ、残念でした」

そして咲実は麗佳を刺したばかりのアイスピックを、今度はかりんに向けた。先ほどまで銀色の輝きを放っていたそれは、真っ赤に染まっていた。

咲実は躊躇なく、かりんに歩み寄っていった。この時かりんは自身が死を迎えることを覚悟した。

きつと、助けようとしてくれた女性と同じ運命を辿る。そんな絶望感と悔しさ、悲しさ、そんなものがかりんの心を占めていた。

だから、瀕死の重傷を負ってでも、嘔きあがる怒りのみで支えていた自分の身体はとたんに崩れ、その場に倒れていく。

ガンー！！

かりん「え　！？」

死ぬ直前、かりんが最後に見た情景。それは、咲実のお腹の部分が、真っ赤に染まっていた事。しかしそれが何を意味するかを悟る前に、視界は暗闇に支配されてしまった。

咲実「ぐうつ！？くつ！ま、まだ生きていたのね・・・」

銃弾を放ったのは他ならぬ麗佳。麗佳の持っている銃は、かつてかれんが手塚相手に撃った銃。

最後の力を振り絞って撃った麗佳の必死の抵抗だった。

麗佳「私の、心臓、は……。右胸にあるの、よね……」

心臓を刺して完全に息の根を止めた。と勘違いした咲実。さすがにその事実は計算外だったようで、驚きの表情を隠せない。

しかし、麗佳の反撃はここまでだった。

葉月さん、娘さんを助けられなくて、ごめんなさい……。

麗佳は力尽き、かりん、かれんの2人の後を追ったのだった。

・
・
・
・
・

第14話「真相」（後書き）

ジョーカーの正体は咲実だった。その事と仲間の最後は、総一達にこれ以上ないほどのショックを与えたのでした。

次回は第15話「明かされた因果」咲実の人生を狂わせた原因は、なんと総一達に関係があった！？そして、【殺人マスター・咲実】との戦い、そしてその結末は・・・？乞うご期待

第15話「明かされた因果」

第15話「明かされた因果」

作・桐島成実

【残りの生存者数・・・6人/13人】

現在の状態

PDA

状態

解

除条件

「グループA」

御剣 総一

(2)

健康

JO

KER破壊

桜姫 優希

(6)

健康

JO
K

ER5回使用

色条 優希

(4)

健康

首輪
3

個収集

綺堂 渚

(10)

健康

首輪

5個作動

麻生 真奈美

(J)

健康

24時

間共にしたプレイヤーの生存

?

姫萩 咲実

(?)

??

?

5階の警備室で、桜姫と総一が再会するほんの少し前、運営側が滞在しているメインコントロールルームにも、ある異変が生じようとしていた。

その異変のきつかけとなったのが、カジノゲーム総責任者である稲葉が、この様子を見に来たことから始まった。

ディーラー「これはこれは、稲葉様」

ディーラーはお辞儀をする為座っていたイスから立ち上がろうと足を動かさず、当人によって制された。

稲葉「そのままで構わんよ。少し様子を見に來ただけだからのお」

高齢に差し掛かった稲葉は、威厳を携えたまま、至極落ち着いた口調でそう述べる。

稲葉「はっ・・・」

その言葉に甘んじ、仕事を再開するディーラーだったが、やはり上司にあたる人物が間近に居ることが気になるのだろう。一度チラリと横目で、その上司の様子を窺う。

稲葉「ふむ、今回も盛況であるな」

数々のモニターに釘付けとなっている観客達を遠くから見据え、異常がない事を確認する稲葉。

そんな中、ふと真横に置かれているスタッフ用のモニターに目を向けた時、何かしらひっかかるものを感じたらしく、眉をひそめて考え込む。

ディーラー「・・・？どうかされましたか？」

顔を上げて、不思議そうに尋ねるディーラー。何かミスを犯してしまったか？そんな不安に駆られたものの、どうやらそうではないらしい。

稲葉「ううむ、何か、忘れていたような気がするが・・・はて？」

稲葉が先ほどからモニターを見て回っている。注目しているのは、人物が映されている画面。それを一つ一つ確認するかのように目を泳がせている。

稲葉「何だったかのお。何か重大な・・・あ、キミ！」

ディーラー「は、はい！」

稲葉「今回のゲームの資料をもう一度見せてくれんかね？」

稲葉が指差したのは、ディーラーのコンソラーの横に置かれた資料の束だった。

ディーラー「あ、はい」

そそくさとその資料を渡すと、稲葉はペラペラとページをめくり始めた。

そして、ある資料を目にした時、稲葉の目がカツと見開かれた。

稲葉「・・・！！、き、キミ！？」

ディーラー「は、はいっ！なんでございましょう」

大げさに返事を返すディーラーだったが、彼が本当に驚いたのは、稲葉の今までに見たことも無いほどの青ざめた表情だった。

稲葉「こ、こ、これはどういうことかね！？」

稲葉様ほどの敏腕が、動揺している・・・。それは言い換えれば今までにないほどの緊急事態を暗に示している。その事を悟ったディーラーは、慌てて稲葉の持つ資料を覗き込む。

いつもならこんな失礼な事は許されないが、今はそんな事に構っている余裕はなかった。

稲葉「な、なぜ！なぜ『この娘』がゲームに参加しているんだ！？」

ディーラー「この娘？」

稲葉が指差す一番前のページの資料は、ゲームプレイヤーの内の一人だった。

稲葉「わからんか！？・・・いや、わかるはずもないか。いいか、この娘は、この娘はっ・・・！！」

その次の言葉を聞いた時、ディーラー以下他のスタッフの動きが、完全に固まってしまった。

稲葉「我が組織のトップに立っておられる、色条良輔様の一人娘だっ！ー！」

ディーラー「・・・はっ？・・・え！？はあっ！ー！？」

意味不明な返事を繰り返すディーラーだったが、それも当然のはず。本来ならありえない状況が、今起こっていることに気がついたのだから。

稲葉「何がなんだかわからんが間違いない。この娘の苗字も確かに『色条』だ！なぜ事前に気がつかなかったのか・・・！」

自身の見落としに、今更ながら悔いる稲葉。

稲葉「と、とにかく、このままにしておくわけにはいかんっ！今すぐ回収部隊を編成して・・・」

ディーラー「ま、待ってくださいっ！？今まさにラストゲームが始まる直前なんです！？プレイヤー達も集結しつつありますし、この状況で介入することは不可能ですっ！？」

飯に介入出来て、ターゲットを回収したとしても、辻褄合わせにダミー映像を作成する時間も余裕もない。

かといって、今ゲームを中断する事など出来るはずもない。主催者側にとって、権力者であり財閥のお偉いさんが集っているこのゲー

ムを止める事は、信用を失う事に繋がるからだ。

そうなれば、組織は大きく揺らいでしまうことになる。その打撃は計り知れないだろう。

稲葉「ならばどうすれば良い！？・・・そうだ、ゲームマスターに連絡せよっ！奴らにターゲットの守護をせよと。命に代えてでも守りぬけと指令を出せっ！！」

ディーラー「それは無理です！？メインマスターである高山は、既に死亡しています。それにサブマスターは・・・！」

稲葉「くっ！そうか、ジョーカーか・・・。よりにもよって・・・！」

ジョーカーがいかに危険な人物か、稲葉もよく承知している。だがこの段階で使えるのはジョーカーしか居なかった。

稲葉「背に腹は変えられん。オペレーター！指令を出せ！・・・それとキミ！ダミー映像の作成を急げ！この際、限られた映像だけで構わん！」

オペレーター「ハッ！」

ディーラー「承知しました！」

稲葉「あとは・・・」

稲葉はディーラーの横に介入し、コンソラーを操作する。

そして一つのリストを画面に呼び出す。そしてパネルを操作し、カーソルを合わせる。

稲葉「『コレ』を用意しろ！万一の場合の保険だ！」

それはPDA用のソフトの内の一つ。『進入禁止エリアへの進入を可能にする』ソフトであった。

これは特性上、ゲームの舞台である建物内に初期から設置されることはまずない。

これを手に入れてしまえば、首輪を解除出来なくて最上階の6階が進入禁止になっても生存出来ると、プレイヤーが思い込んでしまい、ゲームに対し熱が入らなくなる危険がある為である。

しかし実際は、バッテリーを大きく消耗するのでゲーム終了時間まで持ちこたえることは不可能なのだ。

だから、このソフトを設置する条件としては、1人のプレイヤーが首輪を外し、進入禁止となった下の階へと逃げ込んだ際、別のプレイヤーが追従出来る、といった限られた条件のみなのだ。

稲葉「これをジョーカーに渡して、ターゲットのPDAにインストールして使用させよ。そうすれば多少は時間が稼げる」

最悪、ラストゲームが終了した段階で幕引きをすれば、違和感なくターゲットを回収出来る。

仕上げはこれで行くかな。あと考えるべきはどうやってターゲットを傷付けずにゲームを終えるか、だ。

だが、その目論見は後に、ものの見事に打ち砕かれることになる。

ジョーカーは、自身そして組織さえも顧みない無謀者だという事を、目先の事に捕われているせいで、完全に失念してしまっていた。

・

・

・

総一「そんな、そんなっ・・・!？」

咲実から事の成り行きをすべて聞かされた総一達4人は、あまりの非情さに、心が押しつぶされそうになった。

優希「かりんお姉ちゃんっ、かれんお姉ちゃんっ・・・!!？」

まだ幼い優希は、あまりに衝撃的な告白を聞きいたせいで、顔が青白くなり、支えきれずにその場に崩れ落ちる。

咲実「お楽しみいただけましたか？」

そんな総一達の心情を完全に無視し、咲実は毛布を捨てて立ち上がる。

その右手には、隠し持っていたもう一丁の銃が握られていた。

桜姫「どうして!?!どうしてそんな事が出来るの!?!？」

甲高い声で、桜姫は激しく非難する。

咲実「さあ？なんででしょうね？私にもわかりません」

これは実は偽りではなかった。人としての心が壊れて長い月日が経っている咲実には、自分の感情が欠落していた。

その為、自分が嬉しいのか悲しいのかさえも判らなかった。

咲実「それじゃあ、ラストゲームを始めましょうか？」

宣言通り、咲実は銃を構える。狙っているのは総一だった。

渚「ッ！？」

素早く反応し、反撃しようと持っていた銃を構えたのは渚だった。しかし、咲実はその動きを読んでいたかのように、毛布に隠れていた左手から、何かを投げ込む。

あれは、首輪！？そういえば、咲実さんの首にあるはずの、首輪がない！

カラン！カラン！

円状のそれは、床を転がって渚の足に当たる。

『あなたは首輪の解除条件を満たすことが出来ませんでした』

首輪から発せられる警告の音声。渚はそれを以前に聞いていた。

その時の記憶が瞬時に蘇る。葉月さんの首輪が作動し、15秒後にワイヤーが飛び出して。

渚「よ、避けてっ！！！」

渚は足を蹴って後ろにジャンプする。そのすぐ後に、壁から出てきたワイヤーが飛び出し、渚が元居た場所に突き刺さる。

咲実「さすがね。でも・・・」

咲実の銃の狙いを瞬時に動かして、渚に照準を合わせる。

ガン！！

避ける事に集中していた渚は、それに対応出来ない。

渚「ぐうつ！！？」

渚が慌てて狙いをつける前に、銃を持つ右手を貫く。弾が貫通した衝撃で、銃が吹き飛ばされる。

真奈美「な、渚ああっ！！？」

真奈美の叫び声に誘われるかのように、咲実の銃が火を噴く。

ガン！！ガン！！

真奈美「きゃっ！！？」

総一「ぐわあっ!!?」

銃撃は、銃を吊り下げている真奈美の腰に、そして銃を取り出そうとした総一の右肩にそれぞれ命中した。

桜姫「総一つつ!?!」

桜姫はとっさに、持っていた手斧を咲実に投げつける。

ガキン!!

しかし、再び撃った咲実の銃撃が、空中に舞うそれに当たり、弾き飛ばされてしまう。

優希「真奈美お姉ちゃん!!総一お兄ちゃん!!?」

3人が床に倒れ、残っているのは桜姫、優希の2人だけだった。

な、なんて速さなのっ・・・。

この時桜姫は、自分の判断の甘さを痛感していた。

1人の咲実に対し、こちらは5人。増して咲実は怪我を負っている。

だから、あきらめて投降するのでは、と考えていたのだ。

だが一瞬にして、今度はこちらが追い詰められていた。このままでは全滅してしまうだろう。

優希「もうやめてよ！！こんな酷い事！！」

優希は皆を庇うかのごとく一步前が出る。

桜姫「だ、ダメ！優希ちゃん！？」

桜姫の制止も聞かず、ただやめてほしいという、その願いのまま、
咲実に訴えかける。

咲実「あ、そうだ！いいコト教えてあげよつか？」

その訴えはまるで届かず、咲実は満面の笑みを浮かべてそう問いかける。

優希の返事を待たずして、咲実は話し出す。

咲実「このゲームの主催者って、一体誰だと思う？」

優希「?!」

まるで見当違いの咲実の切り返しに、優希の言葉が詰まる。

咲実「実はね。なんとあなたのお父さんだったりするのよねえ」

優希「・・・え？」

思わぬ言葉に、優希は目をパチクリさせる。その反応に満足したのか、咲実の口元が歪む。

優希「そ、それって一体・・・？」

咲実「だ・か・ら、あなたのお父さんはこの人殺しゲームを経営する人なの。もろろんここで人が殺される事も承知の上。だから、そうね・・・」

咲実「あえて優希が一番追い詰められる言い方をした。」

咲実「かりんちゃんや、かれんちゃんを殺そうと最初に考えたのは、あなたのお父さん、って事かな？」

直接手を下したのは他ならぬ咲実だ。しかし、そのきっかけを作ったのは『組織』であり、その元締めである優希の父親が、きっかけそのものと言っても良い。

優希「そ、そんなの嘘っつ！？」

咲実「嘘じゃないわよ。なんならあなたのお父さんに直接聞いてみればいいわ」

そして咲実は銃口を桜姫に向ける。

桜姫「あなたは・・・あなた自身は一体どうして・・・？」

桜姫はそう問いかける。

咲実「前に言わなかったかしら？私の父親が事業に失敗して、家族がバラバラになったって。そこを付け込まれたのよ。『組織』にね・・・」

桜姫「事業？それって・・・まさか、姫萩事業所？」

その発言に、咲実がピクリと反応する。

総一「な、何か知ってるのか、優希？」

なんとか立ち上がった総一は、2人のやり取りに対し、そう問いかける。

どうやら全員の怪我は致命傷ではなく、渚と真奈美もそれぞれ立ち上がった。

その事に密かに安堵した桜姫だったが、やがてポツリと語りだした。

桜姫「ええ。私の記憶が正しければ、咲実さんの事業を潰したのは・
・私のお父さんよ」

総一「な、なんだって!？」

桜姫「私のお父さん。仕事一筋の人だったけど、外では鬼だ悪魔だ
って呼ばれているくらいヒドイ事を繰り返してきたの」

数々の他の事業を乗っ取り、その規模を大きくしていったものの、
多方面から恨みを買うことになった。

又、事業を乗っ取られた人たちは、自殺に追い込まれたり、家族が
バラバラになったりした。咲実もその内の1人だったのだろう。

桜姫「私は何度もやめてってお父さんに訴えかけたけど、止められ
なかった。・・・そして私が中学生の時にお父さんが亡くなったの」

結局、父親の悪行を最後まで止めることは叶わなかった。その時はまだ力無き桜姫にとっては仕方ないとはいえ、彼女はそれを言い訳にしたくなかったのだろう。

桜姫「だから、せめてもの罪滅ぼしに、ボランティアを始めることにしたの・・・」

父が亡くなり、残された遺品を片付けていた際、偶然乗っ取られた事業に関する資料を発見した。その時に姉萩事業所の名前を目撃していたのだ。

それを片手に、娘である自分が罪を償おうと・・・。

総一「そうか、だから・・・」

総一さえも知らなかった桜姫の家庭事情。それは桜姫がずっと1人で抱えてきたことなのだろう。しかしそれで合点がいった。

桜姫の必要以上に正義感が強いのも、その反動だろう。けれど父親のズルを止める事が適わなかった。その事を悔い、桜姫はすべてを背負い込んだのだ。

咲実「ふふっ、あっはっはっはっは!!?」

突如、咲実が狂ったかのように笑い出す。

咲実「そっか、あなたが！ディーラーもこの事を知ってたのね。ゲームを盛り上げるには最高の組み合わせだわっ！」

その様はその場に居る他の5人を啞然とさせた。すると咲実とはたんに笑うのを止め、桜姫に向き直る。

咲実「じゃあ、私が更に盛大に盛り上げてあげるわっ!!」

銃の照準を桜姫に合わせ、そして引き金を引く。

咲実 は自覚していなかった。長い間心の奥底に沈んでいた憎しみや絶望感が、今噴出している事に。

その証拠に、目は鋭く桜姫を射抜いていた。

桜姫「くっ!!」

咲実 を不幸にしたきっかけを作ったのは、私の父親。その変わり様のない事実が、桜姫を縛りつけ、自らの行動を遅らせる結果となった。

咲実 「引導を渡してあげる。あなたのお父さんにね!!」

ガン!!

ザシュッ!!

銃弾は放たれ、身体に貫通した。しかしそれは桜姫に対してではない。

桜姫「優希ちゃん・・・?」

そう、桜姫を庇った優希の身体に、弾が当たったのだ。

優希「お・・・お姉・・・ちゃん・・・」

そう呟き、優希は庇った勢いのまま、床に崩れ落ちる。

桜姫「優希ちゃん!!!!」

総一「ぐ!!!!うおおっ!!」

総一は傷む右肩を必死に堪え、2人の優希の前に立ちはだかる。

咲実「お互いを庇いあうのね。でもそんなの無駄な足掻き。結局は力のある者が勝ってしまうのだから・・・!」

かつての私もそうだった。そう言いたげにしながら、咲実は総一に銃口を向ける。

桜姫は銃を持っておらず、優希や渚達は銃を落としている。彼女達にはなすすべがなかった。

総一は優希達を守る!その一心で、銃弾が当たっても咲実を止める覚悟を決め、咲実に突進していった。

ガン!!

咲実の銃撃は、総一の脇腹を貫通した。

総一「ぐわあああっ!!」

悲鳴を挙げても、突進するのを止めようとしない。咲実の指が2度3度と引き金を引こうと指に力を込める。

しかし、この時咲実は一瞬致命的なミスをしてしまった。

自身に課せられたミッションの事を。

色条優希を無傷で捕獲、もしくは守護をする様にと。

その優希は今・・・？

ガガガガガッ！！！！

部屋中に響く、連射式の銃声。それは壁から突如現れた機関銃が撃った音だった。

咲実「！？」

そしてその弾は、咲実の身体に瞬時に突き刺さっていく。

ザシュザシュザシュッ！！

咲実「くそおつ！くそつ、くそおおつ！！？私を見捨てるつもりかああつ！！？」

悲鳴を上げることにはなかった。代わりに憎しみの籠った言葉が口から次々と吐き出される。

咲実「がふうっ！！？」

血が全身から噴出し、言葉を発することが出来なくなっても、その口の動きを止めようとしなかった。

両親に見捨てられ、親族にも見捨てられ、ディーラー達にも見捨てられ、一体私は何！？何なのよっ！！？

命を引き裂かれ、絶命するその瞬間まで、彼女はすべてを呪うのをやめようとしなかった。

総一「のわあっ！！？」

突進していた総一は、驚きのあまり足のバランスを崩して床に倒れこむ。

そのおかげか、機関銃の連射に巻き込まれずに済んだ。

桜姫「・・・！！そ、総一！！！」

桜姫が叫ぶが、その声も連射する射撃の音にかき消される。

誰も何も発しなかった。あまりに予想外の出来事に、自分がどうすべきか、その考えに至らなかったのだ。

そして長い銃撃が止み、開放された咲実の身体は、床に崩れ落ちていく。

グシャッ！！

床にぶつかった時の音は、まるで水溜りに落ちたかのような独特の音だった。

総一「・・・・・・・・」

桜姫「・・・・・・・・」

こうして咲実は、皮肉にもディーラーの横槍によって、あっけなくその生涯を閉じたのであった。

・
・
・
・
・

咲実の壮絶な最後を見せ付けられた総一達5人。その影響で暫くの間微動だにすることが出来なかった。

だが深手を負った総一がその場に崩れ落ちた事により、我に返った桜姫は、ひとまず手当てをする事にした。

本来ならば、どこかベッドがある部屋まで移動したかったが、総一の身体への影響を考慮して、通路に出るのが精一杯だった。

総一「ぐうつ・・・・、す、すまない、優希」

総一はそう返答するものの、内臓に傷を負ったのか、意識は朦朧としている。

桜姫「いいのよ、・・・・痛かったら言ってね」

そう言いながらガーゼを傷口に当てていく。

先ほどの戦いで怪我を負っていないのは桜姫1人だけだった。渚の怪我は軽傷だったものの、真奈美と総一は独力では動くことが出来ない状態だった。

優希「……………」

優希も、怪我はさほどではないものの、精神的に負ったショックは相当なものだった。

父親がこのゲームの主催者だった。恐らくあれはハッタリではなく、本当の事だろう。少なくとも優希はそう思っていた。

幼い割に洞察力の鋭い優希は、あの時の咲実の目を見て本能的に真実である事を見抜いていたのだ。

そして、それがかりん達を死に至らしめる結果を生んでしまった……。

その事が、優希の心を苛んでいた。

桜姫「優希ちゃん……」

手当てをしながら、優希の様子をチラリと見る桜姫。彼女は優希の気持ち痛いほど分かっていた。

彼女自身も又、父親の暴挙によって多くの人が悲しみ、死んでいった人も居た。状況こそ違えど、受けた悲しみ、やるせなさは共に深いものだった。

そして、自分がいかに無力だということも、知っていた。

励まして、それが気休めにさえならない事も・・・。

・
・
・
・
・
・

渚、真奈美、そして総一の手当てが済んだ5人は、ひとまず6階へと上ることにした。

つい先ほど4階が進入禁止になった所だ。2階からずっと9時間おきに進入禁止エリアが上っていった為、総一達が居る5階も恐らくは9時間後なのだろう。

とはいえ、このゲームの意地の悪さを考えると、それも確定的とは言えない。だから急ぐことにしたのだ。

総一は傷の痛みの影響か、いつの間にか意識を失ってしまっていた。だから比較的軽傷の渚と桜姫で総一を、優希は真奈美が、それぞれ担いで6階の階段近くの部屋まで連れて行った。

その間、誰も何も発しなかった。かつての仲間だった咲実が、実は殺人鬼だった事。それは5人の間に暗い影を差し続けていた。

真奈美「あ、渚！桜姫さん！総一さんが目を覚ましましたよ！」

たまたま総一の様子を見に来た真奈美が、向こうの方で調べ物をしている桜姫と渚に向かってそう呼びかけた。

桜姫「えっ？あ、うん！」

動かしていた手を止めて、総一に駆け寄る。

総一「ゆ・・・う・・・き・・・」

桜姫「うん、私よ・・・大丈夫？」

総一は桜姫の問いかけには答えず、ポツリと独り言のように話し出した。

総一「・・・夢を見たんだ」

桜姫「夢？」

総一「咲実さんの、夢・・・？」

桜姫「？どういう事??」

訝しげに首を捻る桜姫。そんな総一の様子が気になったのか、渚と真奈美もそっところらに向かってきた。

総一「夢の中の咲実さん、悲しんでた・・・」

・
・
・

•
•
•
•
•

第15話「明かされた因果」(後書き)

咲実との決着は、優希が自らの身を盾にした事で、決着がついたものでありました。しかし、総一達が負った心と身体の傷も、深いものでした。

次回は第16話「決意を胸に」総一が見た咲実の夢とは一体？そして、みんなで生き残る為に、そして悪夢を終わらせる為に、総一達の最後の戦いが始まるのでした。乞うご期待

第16話「決意を胸に」

第16話「決意を胸に」

作・桐島成実

【残りの生存者数・・・5人/13人】

現在の状態

PDA

状態

解除条件

「グループA」

御剣 総一 (2)

右肩・わき腹負傷

JOKER破壊

桜姫 優希 (6)

健康

JOKER5回使用

色条 優希 (4)

右腕負傷

首輪3個収集

綺堂 渚 (10)

右手負傷

首輪5個作動

麻生 真奈美 (J)

腰を負傷

4時間共にしたプレイヤーの生存

姫萩咲実という少女は、最初から殺人鬼だった訳ではない。

事が起こったのは、事業を桜姫の父親に乗っ取られ、家族がバラバ

ラになり、親戚の家に引き取られてからしばらくの事だった。

今からおよそ3年ほど前になる。咲実が中学3年の時だった。

彼女は総一達よりも前に、この狂ったゲームに参加させられていた。

咲実「はあっ、はあっ、っ、ううっ・・・！」

文香「くっ、しっかりして！咲実さん！」

必死になって咲実の手を引張る文香。そんな2人を追いかけるのは・・・。

郷田「いつまでも逃げられると思っているのかしら？・・・漆山さん、お願いね」

郷田は、共に追いかけている中年の男性に、そう願う。

漆山「ま、まてえゝ！！」

漆山もそれに答えるかのように、鬼のような形相で2人を追いかける。

郷田も漆山も、かつては咲実達と行動を共にし、色々あったものの、少しは気を許し始めていたほどだった。

しかし突如、郷田が反旗を翻し、漆山も郷田の誘惑によって取り込まれたのだ。

そして他のプレイヤー共々、ゲームという名のカオスにからめ取られていった。

・・・

咲実「文香さん！文香さんっ！！」

文香「は、早く逃げなさい！咲実ちゃん！！」

戦いの末、文香は足に銃撃を喰らい、今は漆山に組み伏せられ、ナイフを突きつけられる寸前だった。

漆山「彼女の、愛しの彼女の為なんだあ！！」

いつもは考えられないほどの強靱さで、ナイフを力任せに押し込もうとする漆山。文香は漆山の手を掴んで抗うものの、踏ん張るのが精一杯だった。

ここで、文香さんを見捨てたりなんか出来ない！じゃあ、やつぱり、やるしか・・・。

悩みぬいた拳句、手に持っている銃を撃つ決意を固めた咲実。そして・・・、

ガンーン！！

銃を撃った。その弾は、ナイフを持つ漆山の手に当たった。

漆山「ぐああっ！！」

しかし、それは同時に、抗っていた文香の手さえも、貫く結果となつてしまった。

そして、運の悪い事に、力の行き場を失ったナイフは、軌道を外れ、文香にそのまま突き刺さった。

文香「あぐううつっ！！」

咲実「！！！！」

驚きのあまり、瞬間的に固まる咲実。

漆山「く、くそおお！！この小娘があああっ！！」

激怒した漆山は、ナイフを文香から抜いて、真っ先に咲実に突進していった。

その際、噴出した鮮血が、漆山を、そして咲実の視界を赤く彩る。

咲実「き、きやああっっ！！」

錯乱した咲実は、反射的に銃の引き金を何度も引いた。迫り来る銃弾になすすべもなく崩れ落ちる漆山。

それを見た咲実は、そんな事をしでかした自分に心底怯えた。だが、かろうじて正気に踏みとどまった咲実は、文香の元へと駆け寄る。

文香「だ、だいじょうぶ？さ、咲実、ちゃん・・・」

咲実「文香さん・・・！ごめんなさい。私の、私のせいで・・・！」

文香「いいのよ、咲実ちゃん。あなたが無事だっただけで」

ガァン！！

その声は突如途絶えた。そして文香は2度と話す事はなくなった。

郷田「さあて？この場に残っているのは私とあなただけ。さて、どう出るかしら？」

郷田は狙い撃った銃を、今度は咲実に向けつつ、冷たくそう言い放つ。

咲実「い、いやあああああつ！？！」

誘拐され、おかしなゲームに巻き込まれ、何度も殺されそうになり、仲間に裏切られ、唯一支えてくれていた文香を自らが傷つけ、そして文香は死んだ。

さらに、自らが人殺しをしてしまった。なのに、助けられなかったなら、私は一体何の為に人殺しを・・・？

そんな疑問を考える間もなく、再び命を狙われる。

もう咲実の精神は、限界だった。そして、脆くも崩れ去っていったのだった。

・・・

郷田「へえ。まさか彼女が生き残るとはね」

一仕事終えて控え室へと戻った郷田は、ディーラーからの通信を受けていた。

ディーラー「はい。一番レートが高かった彼女が、まさかの生存。おかげで観客席はいつも以上に盛り上がっています」

彼女とは、咲実の事を指している。

郷田「生存ねえ……。でもあれって生き残ったって言えるのかしら？」

郷田が最後に見た咲実は、すでに心が壊れかけていた。むしろこの状態で生き残れたのは奇跡に近かった。

ディーラー「・・・恐らくあの状態で元の生活に戻っても、まともな人生を歩むことはほぼ不可能でしょう」

郷田「そうよねえ。じゃあ・・・」

何か言いかけた郷田を、ディーラーが遮る。

ディーラー「後で上に申請はしますが、あの娘を私に預けてもらおうと思ひまして」

郷田「あの娘を？」

ディーラー「そうです。うまく使いこなすことが出来れば、私の考えている新たなゲームマスターが誕生するかと」

ディーラーの仕事は、何もゲームの管理だけではない。いかにゲームを盛り上げる為の要素を作り上げていくか、それが基本となる。

それ故、咲実を鍛え上げて、ゲームマスターに駆り出そうという狙いだった。

郷田「ふうん。でもあの娘にそんな資質があるのかしら？」

郷田が見る限り、逃げたり怯えたり連続で、反撃らしい反撃を行えたのは、漆山との一件のみだった。

ディーラー「あの娘は元々、精神が不安定な所がありました。ちょうどあれぐらいの年齢ではありますが、それに家庭の事情が相まって、人を恐れる様になったのでしょう」

ディーラー「そして、今や彼女の心は壊れきっています。そこにゲームマスターとしての心を刷り込めば、可能だと思われます。・・・外見はひ弱な女子中学生ですし、客からすれば見ごたえはあるかと」

郷田「まあ、いいわ。あなたの好きなようになさい」

まるで興味がないといわんばかりに、郷田は通信を切った。

そこから、咲実にとって地獄の日々だった。

ディーラーはまず、人を殺すのに必要な殺気と、狂気を植えつけることにした。

最初に行ったのは、様々な殺人シーンの映像を延々と見せ付ける事だった。

目を逸らそうとしても、耳を塞ごうとしても無理だった。様々な手段を用い、常に映像を、音声を、スピーカーから聞こえてくる悲鳴や怒声の数々を・・・。

なぜ？とも、嫌とも発することさえ、許されなかった。ただただ、残酷なシーンと常に共に居る生活を余技なくされた。

次に行われたのは、実際に自らの手で生き物を殺すことだった。

最初はアリをつぶす事から始まり、次にクワガタの足を一本ずつ引きちぎり、ウサギをナイフで切り刻み、ネコの足を口で噛み千切つて。そして最後は、実際に人を殺させたのだ。

その仮定で、生き物の生命が途切れる加減や、様々な苦しめ方、殺し方を身につけさせられた。

他にも様々な拷問に等しい行いを、1年余りにも渡って繰り返された。

・・・もしかしたら死んでいた方が幸せだったかもしれない。しかし、死ぬことさえ許されなかった。いや、死を選ぶという発想を思い浮かべる余裕さえ、与えられなかった。

咲実「あははははっ！！うふ、うふふ、あはははっっ！！」

1人の少女に過ぎない咲実に、正気で居ろ、という方が無理な話だろう。

もう元の彼女の姿は微塵も残されていなかった。あるとすれば、海の底ほど深い狂気を覆い隠すために同時に刷り込まれた、偽りの仮面だけだった。

・
・
・
・
・

桜姫「そっか。咲実さんの悲しむ顔が・・・」

総一は、先のすべてを夢として見たわけではない。ただ、咲実の悲しみや、助けを乞う叫びが、狂気となった咲実の姿から垣間見えたのだ。

総一「もしかしたら、いや、間違いなく彼女も、このゲームの犠牲者なんだろうな」

その咲実とは、ゲームの主催者に裏切られ、命を落としてしまった。結局最後まで助けられなかった。本当はかりん達を殺した憎い相手のはずなのに、なぜかそう考えていた。

優希「・・・本当に憎むべき相手なのは、このふざけたゲームを考え、行っている連中なの」

桜姫「優希ちゃん!？」

いつの間にか優希も、渚達の後ろから、総一の話聞いていたようだった。

その優希が発した言葉は、これまで聞いたことも無いほど、低く暗いものだった。

総一「その・・・大丈夫か？」

どう声を掛けていいか迷ったが、その言葉が口をついて出た。

優希「うん・・・。あのね、ひとまず私達の首輪を外す必要があると思うの」

優希は何かをグツと堪えて、努めて冷静にそう提案する。声が暗いのは感情を無理に抑えているせいなのだろうか？

桜姫「あ、うん。実はそれなんだけど、さっき渚さん達と色々話し合ったの」

桜姫はそう言っ、プラスチックの箱を取り出す。

総一「ツールボックス？」

桜姫「うん、そう。コレが、咲実さんのすぐ近くに落ちていたの。で、何のソフトか調べていたんだけど・・・」

桜姫はそう言っ、ソフトを自身のPDAに差し込む。すると、そ

のツソフトの説明書きが画面に示された。

「進入禁止エリアへの進入が可能になる。注意！バッテリー消費・極大」

優希「進入禁止エリアへ入れる・・・？」

桜姫「うん。だから、6階が進入禁止になる直前にコレを使えば、もしかしたら助かるかも・・・？」

総一「あ、そうか！」

このゲームのクリア条件に照らし合わせれば、何も首輪を外す必要はない。ゲーム終了時間まで、生き残ってさえ居ればいいのだ。

それに気づき、総一は表情を明るくするが、桜姫達は表情を変えずに返答した。

渚「けれど、バッテリーが持たない可能性もあるわ」

桜姫「うん。それに、コレは1つのPDA。つまり1人分しか使えないらしいの」

総一「え？それじゃ・・・」

桜姫「うん。コレだけじゃ、助かる事は出来ないわ。だから、やっぱり首輪を外す必要がある」

総一「そうか。ええと、首輪の解除条件は、たしか・・・」

総一が考え始めようとしたが、先に桜姫が答える。

桜姫「私と総一はJOKERが必要。それがクリア出来れば、私達の首輪が外れる。それに咲実さんの首輪は外れていたから、それも使えるはず」

皆は桜姫の説明を確かめるかのようにうなずく。

桜姫「これで計3個だから、優希ちゃんの首輪が外れるわ。あとは渚さんだけ……」

渚「うん。私は首輪が5個作動する必要があるの。……既に2回、首輪が作動しているのを見てるから、外れた首輪をすべて作動させればいいはず」

渚の見た首輪の作動は、葉月と咲実の分である。

総一「問題は、JOKERがどこにあるか、だな」

やはりそうなってくる。JOKERを発見しなければ、少なくとも総一と桜姫は助からなくなってしまう。

桜姫「うん。……こればかりは分からないわ。JOKERを探知出来る方法があればいいんだけど、そんな都合の良いものが出てくるとも思えないし」

桜姫「一応、手がかりがあるかもって、咲実さんの身体を調べてみたけれど、持っていたPDAの2個共破損していたし……」

そう言ってため息をつく。もちろんその2つのPDAが、JOKER

Rだったという可能性もある。しかし桜姫は悲観的には考えていないようだった。

桜姫「JOKERは下の階に居る誰かが持っているはず。だからその人達を調べれば、きっと出てくるはず」

総一「その人達だったって、全員か？そりゃ、いくらなんでも・・・」

言いかけて気づいた。

総一「！もしかして、その為にさっきのツールボックスを？」

桜姫「うん、それしか無いと思う」

桜姫は呟き、手に持っていたそれを渚に差し出す。

渚「・・・私に？」

桜姫「うん。この中でまともに動けるのは私か渚さんぐらい。私のPDAのバッテリーは、何度も首輪の探知に使ったから、時間的猶予はないの。だから・・・」

桜姫「渚さんに、このツールボックスを使ってもらって、4階から下に居る人達をそれぞれ調べてほしいの」

真奈美「4階から下？それじゃ、5階は・・・？」

桜姫「それは私が。5階での首輪の反応は5個、一つは咲実さんで、あとの4個は1箇所固まってる。だから時間的には間に合うはず」

渚はしばらくじっと桜姫と、持っているソフトを交互に見つめていたが、やがてうなずいてツールボックスを受け取った。

危険な賭けではあった。だが他に手はない。

渚「それじゃ、方針を決めないと」

4階より下にいくつ反応があるのか、まず知るべきはそれだ。

桜姫「うん、そうね」

さっそく、首輪の探知機能を使ってみた。

桜姫「4階に1つ、1階と2階にもそれぞれ1つずつ反応があるわね」

その内のどれが、JOKERを持っているだろうか？

渚「2階の反応は葉月さん。葉月さんは恐らくJOKERを使われて命を落としてしまった。だから2階の反応は違う」

真奈美「そうだよね……。じゃあ1階の反応も違うかな？」

渚「うん。だから4階の反応の所へ行けば、JOKERがあるかも？」

そうと決まれば、さっそく行動を開始した。この勝負、時間がカギを握るからだ。

5階に桜姫、4階に渚、優希、真奈美は総一の看病。みんなでこの危機を乗り越える。その想いを胸に秘めて

・
・
・
・
・

桜姫「うつ・・・」

5階の首輪の反応があつた部屋に入った時、凄まじい有様に、思わずうめき声を漏らす。

4人も死体。それぞれが血にまみれ、うつろな瞳は何も捉えていなかった。

その中に見知つた2人が居た。

桜姫「かりんちゃん、かれんちゃん・・・」

ボランティアを通じて親しくなつた2人。生前の面影はなく、2人折り重なるようにして倒れているのが、辛うじて姉妹の絆を感じ取れるほどだった。

桜姫「・・・ごめんね、助けてあげられなくて」

この時、桜姫は目に涙をためていた。そして無力な自分を責めた。この子達を助ける方法はなかったの？そんな後悔に捕われていた。

でも、そんな事をして何も変わらない。それは昔の経験から知っていた。せめてと思い、2人のまぶたをそつと閉じた。

桜姫「あ！」

すると、2人のすぐ傍に、外れた首輪が転がっているのに気がついた。

桜姫「これは・・・かりんちゃんのもの？」

かりんの首には、首輪はなかった。と、すればこれは当人のものだろう。

それを拾い、4人のPDAをそれぞれ回収して、桜姫はその部屋を後にする。

その間、なんとか涙を堪えようと、必死で耐えようとした。泣くのはすべてが終わってから。そう決めていたから。

そして、その部屋を出た所で、突然天井に備え付けられているスピーカーから声がした。

渚「優希さん！？居る？」

桜姫「渚さん！？」

桜姫はスピーカーの方を向いた。渚の声はどこか慌てているように聞こえた。

渚『そ、それが！例の進入禁止のソフトなんだけど、バッテリーが持ちそうにないの！』

桜姫「な、なんですって！？」

渚『このままじゃ・・・！な、何か方法はない！？』

桜姫は慌てた。が、すぐに頭を回転させ、なんとか活路を見出そうとする。

桜姫「そ、そうだ、5階の警備室！」

渚は恐らく4階の警備室に居るのだろう。会話をする為には、互いにスピーカーをすれば可能かもしれない。そう考えたのだ。

桜姫「幸い、すぐ近くにある。待ってて！」

そう言い、5階の警備室へと急いだ。

桜姫「聞こえる！？」

警備室のマイクに向かって、そう声を発する。すぐ傍に、かつて咲実だったものがあるが、むせるような血の臭いに、なんとか耐える。

渚『うん！聞こえる！それで、えと』

桜姫「待って！今考えるから」

そう言って一度マイクから離れる。

桜姫「PDAに何か手がかりが・・・」

そう思い、先ほど手に入れたPDAを丹念に調べる。

桜姫「こっちはPDAを探知するソフト、こっちは罠を地図上に投影・・・あ！」

桜姫は、地図上に表示されている罠の内の一つに目をつけた。

桜姫「これなら、なんとかなるかも！」

そして再びマイクを手取る。

桜姫「いい？今から私の言うとおりにして！」

PDAの探知のソフトを使いながら、渚を罠のある位置に誘導する。

桜姫「そこで待ってて！その罠は5階からじゃないと作動出来ないの！」

そう言つて素早く警備室を出る、そして罠の真上に位置する場所へと走っていった。

桜姫「ココね！」

目的地にたどり着いた桜姫は、さっそく罠の起動スイッチを作動させる。

ガコン！

すると、床一面がポツカリと開いた。そしてその下に渚の姿があった。

渚「優希さん！？」

お互いに、相手の無事な姿を見て安堵するが、そうも言ってもらえない。

桜姫「良かった！えと、ちょっと後ろに下がってて！」

渚が言われた通り後ろに下がると、桜姫はある物を落とし穴に向けて投げ入れた。

それはかりんの首輪。しかもそれは警報アラームを発していた。

桜姫「ワイヤーが出てくるはずだから、それに掴まって！」

渚「ワイヤーって・・・あ！そうか！」

葉月や渚自身に襲い掛かった、ペナルティのワイヤー攻撃。あれを利用しようというのだ。

そして

シュッ！ガッツ！！

宙に舞う首輪に向けて5階の天井からワイヤーが飛び出す。そしてそれは落とし穴をくぐり、4階の床まで突き刺さった。

桜姫「今よっ！」

渚はワイヤーにがっしりと掴まり、それに呼応したかのようにワイヤーは再び元に戻る。とする。

渚「よっと！」

通し穴を通り過ぎた辺りで、うまく身をよじって床へと着地する。その運動神経の良さはさすがだった。

桜姫「よし！うまくいったわ」

計算どおり事が進んだことに安堵したものの、時間は迫っていた。

桜姫「私達が居る5階が進入禁止になるのは、多分3時間ほど。階段までは結構ギリギリかも」

けれど考える暇はない。なんとかそこまで急がないと。そう思って再び走ろうとした2人だったが、再びスピーカーから声が聞こえた。

優希『優希お姉ちゃん！渚お姉ちゃん！』

桜姫「え！？」

渚「・・・もしかして、6階の警備室から？」

驚く2人をよそに、優希は続ける。

優希『えと、2人が居るのはここだから……。えっと、今から私の言うとおりに動いてほしいの!』

優希『お姉ちゃん達から見て、一番近い階段の所に来て!お願い!』

渚「え?でもそこは使えない階段じゃ……」

そう。PDAの地図には確かに近くに階段が存在するが、×印が付けられており、使用する事は出来ないはず。

桜姫「優希ちゃんを信じましょう」

桜姫の迷いはないようだった。2人は、その階段へと急いだのであった。

・
・
・
・
・

階段の前に来た2人は、その情景に啞然とした。

桜姫「うわぁ」

渚「何もかもバラバラね……」

そこには本来、障害物が置かれているはずだった。だがしかし、そこにあつたはずの障害物は、ものの見事に粉碎されていたのだ。

総一「ふう、なんとか成功、かな？」

桜姫「総一！？」

そして、階段の向こう側には、総一と真奈美の姿があった。

渚「い、一体どうやったの？」

渚の問いに、総一達が答える。

真奈美「う、うん。あれから6階のあちこちを調べただけで、そこに爆弾がいっぱいあったの。それでえ」

総一「階段をあちこち爆破しておけば、イザと言う時通れるかなあ、ってな」

渚と桜姫がやりとりした、スピーカーでの内容を、総一達も聞いていたのだ。

それで時間が切迫している事を悟り、こうして先手を打ったのだ。た。

渚「そ、そっか」

いささか強引にも感じたが、これで6階へといけそうだった。

総一「そつと渡ってくれよ？」

階段にもヒビが入っている為、崩れる危険があった。

桜姫「うん」

そうして2人は無事、6階へとたどり着いた。

桜姫「や、やった」

そこに総一達が出迎える。

総一「おかえり」

桜姫「ただいま」

そうして手を取り合う2人。ふと思い出した桜姫は、2つのPDAを取り出す。

桜姫「多分、このどちらかがJOKERだと思うの」

桜姫が取り出したPDAは、共に『Q』の文字が刻まれていた。しかし、

総一「図柄が、道化師に変わっていく……。やったな！優希！」

桜姫「うんっ！」

今回の賭けは、成功に終わった。総一達は勝ったのだ！

それから先は楽なものだった。当初の方針どおり、JOKERを使って最初に桜姫、次に総一の首輪を外した。

次に総一達と合流した優希、そして渚も無事、首輪を外すことが出来た。

残すは真奈美ただ1人。それも時間の問題だった。

5人は一つの部屋に集まっていた。ようやく訪れた休息の時だった。

桜姫「やっと終わったわね・・・」

一気に疲れが出てきたのか、珍しくだらしなく座る桜姫。他の人達も同様だった。

ただ1人だけ、暗く沈んだ表情を浮かべるものが居た。

桜姫「優希ちゃん・・・」

総一達と再び合流した時、やはり元の明るい優希の姿はなかった。やはりまだ立ち直れていないのだろう。

その思いを当人は読み取ったのだろうか。優希は視線に気づき、トコトコと桜姫の前に歩んできた。

優希「あのね、お姉ちゃん・・・」

桜姫「なあに？優希ちゃん」

優希「お願いがあるの」

いつしか、優希の目は輝きを取り戻しつつあった。そして意を決し

たかのように提案した。

優希「その・・・、かりんお姉ちゃん達にもう一度会いたい」

桜姫「えっ！？・・・」

一瞬、驚きの声を挙げる桜姫。もちろん、叶えられるならそうしてあげたいというのが偽りなき気持ちだ。

しかしそれは2度と叶わぬ事だと言う事は、ボランティアで人助けをし、時に死に別れの現場を目撃してきた桜姫には、痛いほど理解していたのだ。

優希「私は・・・。私は、お姉ちゃん達を救えなかった。だからせめて、私の手で弔ってあげたいの」

優希も、かりん達と生きて再会したいという気持ちがあった。そう言いたい言葉をグツとこらえ、搾り出すようにそう答えた。

このゲームに捕われて命を落とした2人。それも、その死を望んでいる悪魔のような人達の手にかかって死んだのだ。

そんな人たちに、かりん達の死に様を、たとえ監視カメラを通してでも晒し続ける事は、かりん達、そして他ならぬ優希にも耐え難い事だった。

優希「かりんお姉ちゃんを戦闘禁止エリアにあるベッドに寝かせてあげたい」

そうすれば布団に隠れて死に様を隠せるし、安眠させる事も出来る。

死者に対し安眠はおかしい気がするが、それは優希の切ない想いの表れだった。

桜姫「・・・うん。わかった。じゃあ私が」

優希の気持ちを汲んで、手を挙げる桜姫。

優希「私も、連れてって」

その意思を示すかのように、ゆつくりと立ち上がった。

桜姫「そ、それはダメよ、だって・・・」

そんな事したら、優希にかりん達の凄惨な姿を見せることになる。そんな事したら、優希の心は壊れてしまつかもしれない。

優希「お願いっ!!」

必死で食い下がる優希の目には、一種の決意が窺えた。

総一「どうした?・・・優希?」

他の人達も、優希の様子に気づき、近づいてくる。

優希「私、目を背けない。・・・パパがやったひどいこと。胸に刻んでおくの」

桜姫「優希ちゃん・・・」

優希「それに、まだ、終わってないの」

桜姫「え？」

優希「まだ、このゲームは終わってないの」

総一「終わってない？あとは真奈美さんの首輪を外すだけだし・・・」

優希「ううん、そうじゃないの」

優希は首を横に振る。桜姫は優希の言わんとした事に気づいた。

桜姫「それって・・・」

もしかして、私達が参加しているこの『ゲーム』じゃなくって、『ゲームの存在そのもの』を指しているんじゃない・・・。

優希「だから、みんなの力を貸して！これ以上犠牲を出さない為に」

そして優希は、キッと前を見据えたのだった。

第16話「決意を胸に」（後書き）

優希は、この狂ったゲームを本当の意味で終わらせるべく、戦う事を決意しました。

次回は最終話「本当の勝利者」優希の、一世一代の戦いが、幕を開ける。乞うご期待

第17話「本当の勝利者」

最終話「本当の勝利者」

作・桐島成実

高級感漂わせながらも、至極落ち着いた雰囲気の部屋に、1人の男がイスに座っていた。

色条良輔「最近『エース』の活動が一層活発になったと聞く。全くふざけた話だ・・・」

その人物は他ならぬ組織のトップであり、色条優希の父親でもあった。

彼は普段以上に険しい表情を露わにしていた。我が組織を潰そうと企む、別の組織『エース』の所在を掴んだのは、およそ3年ほど前のことだった。

良輔「我が最愛の娘、優希をゲームの参加者に潜り込ませたのも、『エース』の仕業ではないかとの推測が出ている。・・・いつその事、『エース』を潰す算段を立てる必要があるかもしれんな」

感情論でいえば、今すぐでもそうしたい。

とはいえ、自らがその組織に狙われている現状を考えると、下手に行動をすべきではないと先に理性で判断している為、いつもと変わらず雲隠れを何度も繰り返していたのだ。

コンコン！

良輔「！？誰だ！」

??「私よ、パパ」

ドアの向こう側から聞こえるのは、聞き慣れた娘の声。

色条良輔「おお！優希か。わざわざソックをするとは、偉いなあ」

先ほどの険しい表情はどこへやら、一瞬にして緩んだ父親の表情に変わってしまった。

優希「入っていい？」

良輔「いいぞ！今仕事がひと段落した所だからな」

そう言うとは彼は持っていた書類を机に置く。

彼は以前、家を留守にする事がほとんどだった。しかし、例の一件があつてから、常に傍に優希を置くようにしていたのだ。

ガチャッ！

良輔「どうしたんだい？ゆう」

その台詞は突如途絶える。それもその筈。優希の後ろから、謎の人物が次々と部屋に入ってきたのだから。

色条良輔「誰だ貴様ら！！、警備兵はどうした！！」

瞬時に警報スイッチを押した良輔、しかしそれを押しても全く作動しなかった。

優希「パパ、それを押しても意味無いと思うよ？」

良輔「な、なに・・・？」

それは彼にとって意外な展開だった。謎の集団が優希を人質にしている。とっさにそう考えていたからだ。

優希「その警報システム、一時的に妨害してもらったから。優希お姉ちゃんのおかげ」

良輔「ど・・・どういう事なんだ？優希！」

今起こっている全ての事象を、娘は知っている。その事が彼のほほを引きつらせた。

そして優希に近付こうとするが、優希は微動だにしない。

代わりに、謎の集団が、優希と父親との間に入る。

総一「ここは通させやしないさ！」

その場に居る総一、桜姫、渚、真奈美の4人は、優希を守るかのよう
うに陣を組んでいた。

良輔「ええい！邪魔するな！・・・貴様ら、命が惜しくないようだな！」

良輔の威嚇にも、4人は動じない。しかし優希が、総一達を制した。

優希「ありがと、みんな。・・・でも、ここからは、私とパパとの戦い」

意を決した優希は、一步前に出る。その足取りは強くしつかりとしていた。

優希「今日は、パパにお願いがあつてきたの」

良輔「・・・??」

展開が読めない良輔は、身構えたまま優希の表情を窺う。

優希「パパが運営しているカジノの、私が参加したゲーム。あれをやめてほしいの」

その言葉は至極落ち着いたものだった。しかし、強みは十分に感じられた。

良輔「ああ・・・。そうか！そうだな。あんな怖い目にあつたんだもん」

良輔は娘の優希の事を大切に思っていた。だがしかし、それは偏愛であり、優希の望む愛の形とはあまりにもかけ離れていた。

良輔「だが大丈夫だ！パパと居る限り、2度とあんなゲームに参加させられたり」

優希「違うつ！！？」

良輔の解釈を、大声で遮る優希。その表情は怒りに満ち溢れていた。

優希「あんな・・・！あんな、人と人とを争わせるなんて残酷なゲーム、やめてほしいの！！ひどいよ！こんなの！！」

怒りは更なる怒りを呼びおこし、必死に訴える優希。だがしかし、良輔もその類の台詞は過去に何度も聞いてきたのか、涼しい顔だ。

良輔「あのなあ、優希。アレはお仕事、ビジネスなんだよ。だから、やめるわけにはいかないんだ」

説得しようとする良輔。しかし優希は鋭く視線を放ち、キツと睨みつける。

優希「だつたら・・・ゲームに参加して死んだ、かりんお姉ちゃんや、かれんお姉ちゃん。それに他の沢山の死んだ人達の命を、返してよ！？ねえ、返してえっ！！」

当然ながらそんな事が出来る筈もない。完全に困惑した父親にしびれを切らしたのか、優希は手段を変える。

優希「・・・パパは、私の事好きなんだよね？愛してるんだよね？」

良輔「あ、ああ。当然じゃないか！優希の好きなもの、いつだってかなえてやったじゃないか」

優希「その私がこんなに頼んでもダメなの？」

先ほどの怒声とは打って変わって、懇願するかのような視線。戸惑いを見せる良輔ではあったが、やはり答えは同じだった。

優希「そっか、それじゃ」

そう言ってポケットから一丁の銃を取り出す。

そしてあるうことが、それを自らのこめかみに突き付ける。

良輔「なあっ!!!？」

これには流石に冷静な彼も驚きを隠せなかった。それは総一達も同様で、全員の視線が優希に釘付けになる。

総一「ゆ、優希!？」

総一も、優希がまさかこのような行動に出るとは思ってもみなかったのだ。

優希「私・・・死んでみんなにお詫びするっ!ごめんなさいって!そして、恨むなら私を恨んでっ!それで・・・それでみんなの怒りや悲しみが、少しでも癒されるなら・・・!」

それを言い終らない内に、銃の引き金に指を掛けた。

優希「バイバイ。私の好き『だった』パパ・・・」

そして、引き金を引く寸前のところで

ガッ！！

銃を持つ優希の手を、良輔の手ががっしり掴む。しかしそれは乱暴ではなく、大切な手を包み込むような、優しい掴み方だった。

良輔「分かった！パパの負けだ！・・・」

銃を握る優希の手を寸前で止めたのは、他ならぬ彼の、娘を思う気持ちだった。やはり、彼も普通の1人の父親だったのだ。

・
・
・
・
・

あれから、総一達は優希と共に部屋から出た。父親である良輔は、総一達に何も手出しはしなかった。

彼にとって、これ以上の脅しはないだろう。お兄ちゃん達に手を出せば自ら命を絶つ、と優希が宣告したのだから。

優希は、自らの命を盾にして、総一達を守っていたのだった。

もちろんそれだけではない。

総一「良かったな、優希のお父さんが承諾してくれて」

結局例のゲームは、今後しばらくの間すべてダミー映像を流してや

り過ぎすそうだ。そして頃合を見て別のゲームに切り替えると。

本来ならば、いくらトップの座に居るからといって、このような背信行為は組織にとって到底許せる状況ではないだろう。

だが今回の場合、優希がゲームに参加した件に関して、組織の『最高幹部会』の連中も事態を重く見ていた。

今後似たような事例が発生するかもしれない。いくら警戒しても、万一を防ぎきれるとは限らないのだから。

そうなれば、今度は自分が・・・という恐怖心が、各々の幹部達に對して働いたのだろう。

事実上、人殺しゲームは幕を閉じることになったのだった。

その最大の貢献者である総一達5人には、なんとか笑顔を取り戻しつつあった。

総一「お！さっきまで曇ってたのに、いつのまにかすっかり晴れちゃったな」

外に出た総一達は、降り注ぐ日光を浴びつつ、自然と空を見上げる。

幾分か時が過ぎ、ふと桜姫が優希の方に向き直った。

桜姫「あのね優希ちゃん。いくら説得する為とはいえ、自分に銃を向けるなんてしちゃダメよ？」

渚もそれに同意する。

渚「そうよ、もし優希ちゃんに何かあったら」

2人とも多少責める口調であったものの、それは優希を想うての事。それはもちろん当人も分かっていた。

優希「大丈夫だって！」

そしてなぜかニツコリと笑みを浮かべる優希。

優希「だってこの銃、弾が入っていないんだもん」

桜姫「え？ええっ！？」

総一「なんと・・・」

つまりは、すべて優希の計算だったのだ。パパがきつと私を止めてくれる。そう信じて。

もしかすると、ゲームの【本当の勝利者】は、優希だったのかもしれない。

優希「うん！これで、悲劇はおしまいっ、と」

そして優希は持っていた銃を庭に投げ捨てたのだった。

・
・
・

・・・

あれから一ヶ月ほどが過ぎ

渚「みんな居る？」

真奈美「う、うん、みんなもう来てるみたい」

相変わらずの間延びした声を出す真奈美。2人は向こう側で待っている3人に手を振って答える。

総一「おう！こつちだ！」

それは変わらずあの5人だった。彼らが今居るのは墓地。そう、かりん姉妹の墓参りに来たのだった。

今彼女達は、先に旅立った両親と同じ墓で眠っている。

総一「あれから、もう一ヶ月以上経つんだな・・・」

総一には、それが昨日の事に感じられた。忘れられないあの笑顔。それがもう2度と見えないのは、辛く悲しいものだった。

桜姫が線香を焚くと、みんなで手を合わせる。

総一「俺達、元気にやってるぜ」

総一の呟きに、みんなは無言で同意する。2人は、天国で暖かく見守ってくれてるだろうか？そんな想いがふとよぎった。

総一「それにしても、意外だったな」

総一は、すぐ横で共に拝んでいる桜姫に、そっと視線を向けた。

桜姫「ん？どしたの？」

その視線に気づき、桜姫も総一に視線を合わせる。

総一「いやあ、なんと言うか……。優希の父親に直談判した時の事さ」

桜姫「何か気になることでもあったの？」

総一「お前の性格を考えたら、いつそ組織を潰そう！とか言い出しそうだったなあって」

総一はあの時、桜姫ならそんな行動に出そうな気がしていた。強い者が弱い者を弄ぶ。それは桜姫がもつとも忌み嫌うことであった。

そんな組織、なくなってしまう方がいい。それはかつて桜姫が、自分の父親に対して抱いた想いと似通っていたはずだ。

桜姫「あ、うん。そりゃ、私だってあんな組織なくなってしまう方がいいと思ってるよ。でも……」

総一「でも？」

桜姫「そんな事をしたら、今度は優希ちゃんが一人ぼっちになっちゃうから……」

総一「あ、そうか」

組織の事を、もし公にする事が出来たとしても、それは優希に対し、犯罪者のボスの娘という汚名を被むらせてしまう。

それに、父親が捕まってしまうえば、今度は優希の家族がバラバラになってしまう事だろう。

かつての桜姫の様に、そして、咲実の様に・・・。

総一「そっか、そうだな・・・」

すべてを察した総一は、それきりその話題には触れなかった。

優希「あ、そうだ！」

熱心に拝み続けていた優希は、ふと何かを思い出したのか、持参したりユックからガラス製の瓶を取り出した。

それは全部で5個、同じものがあつた。

桜姫「！コレって、もしかして・・・」

優希「うん、そう。・・・かりんお姉ちゃんと、かれんお姉ちゃん、なの・・・」

瓶の中身に入っていたのは、他ならぬかりん姉妹の遺骨。

身寄りの無い彼女達は、遺体の引き取り手がなかった。

そんな経緯もあつてか、優希が懇願して、葬儀を執り行ったのだ
た。

優希「かりんちゃん達と、その……。ずっと一緒に居てほしいの」

総一「優希……」

優希「かりんちゃん達の最後を知ってるのは、私達だけ。だから・
」

2人の事、忘れないでほしい。ずっと一緒に居てほしい。それは優
希のささやかな願いだった。

優希「私も忘れない。かりんお姉ちゃんとかれんお姉ちゃんのコト。
そして、もう2度と、こんな悲しいコトを起こさせない為に……」

総一「……。わかった。優希のその思い、俺も一緒に……」

俺達は1人じゃない。みんな一緒なんだ。その思いを乗せて

……。この時から、優希達の様々な活動によって、『ゲーム』の悲
劇は終焉を迎え、犠牲者が出ることもなくなったのであった。

～END～

第17話「本当の勝利者」(後書き)

いかがだったでしょうか？優希と総一達は、今までに起こった惨劇を胸に刻み、共に歩いていく決意を新たにしました。

優希が、みんなが居る限り、あのゲームが蘇ることはないでしょう。

このゲームは終了しましたが、他にエピソード『5』『6』、そして新たに「仮想エピソード」を作成していますので、そちらもご覧いただけると嬉しい限りです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2514m/>

シークレットゲーム KILLER QUEEN ~ エピソード7 ~ 【桜姫編】

2011年5月20日13時02分発行